

タルノ確證出ルモ法律ノ規定シタル場合三條一ニ該當セサル以上ハ此訴ニ依リ其誤認ヲ正スコトヲ得ヌ故ニ斯ル場合ニ於テハ天皇ノ大權ニ訴ヘ特赦ヲ奏請スルコトヲ相當トヌ又實際上必ス此方法ニ依リ以テ冤枉ノ苦ヲ救済スルナラン果シテ然ラハ被告人ハ不當ナル刑ノ執行ヲ免カル、ニ至ル可キモ而カモ前ノ裁判ハ依然其効力ヲ有スルヲ以テ此裁判ハ民事上ノ利益ニ付キ既判力ヲ有シ民事裁判所必ス之ニ依據セサル可カラヌトスルニ於テハ被告人ハ自己ニ責任ナキ損害賠償ヲ負擔セサル可カラヌ天下公衆擧テ前ノ裁判ノ誤認ナルコトヲ認メタルニ拘ハラヌ更ニ又民事裁判所ヲシテ其誤認ヲ承繼セシム是レ果シテ人情ニ違フコトナキカ又果シテ條理ニ反スルコトナキカ余ハ大ニ之ヲ疑ハサルヲ得ヌ

左レハ證據編第八十五條ノ如キ規定ハ寧ロ之ヲ全廢シ以テ民刑裁判所ヲシテ各、互ニ獨立獨行スルコトヲ得セシメ以テ彼ノ非常ノ場合即チ刑事裁判ノ誤認ニ出タルコト判然タル場合ニ於テハ民事裁判所ヲシテ刑事ノ裁判ニ依據スルコトナク真正ノ事實ニ適合スル完全無疵ナル裁判ヲ爲スコトヲ得セシムルヲ允當ナリ

トヌ是レ余カ第二説ニ左祖スル所以ニシテ之ヲ要スルニ斷見ハ前掲法條ノ廢止ヲ主張スルニ歸着ス可シ

以上ハ專ラ立法論ニ涉レリ此ヨリ以下前掲法條ノ意義ニ付キ聊カ解釋ヲ下サ

法文ニ「重罪、輕罪又ハ違警罪ノ判決ハ云々」トアリ故ニ判決ニ非サルモノハ既判力ヲ有セス即チ豫審終結ノ言渡ノ如キハ判決ニ非スシテ一ノ決定タルニ過キサルカ故ニ犯罪ノ事實ナシ又ハ被告人ニ罪責ナシトノ理由ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲シタリト雖モ民事裁判所ハ其言渡ニ依據セサル可カラサルノ義務ナシトス

又判決ニ付テモ其既判力ヲ有スル部分ハ法文ニアル如ク「犯罪所爲ノ眞實其犯罪ノ性質及ヒ被告人ノ罪責ニ付テノ裁判ニ關スルモノニ限ル」故ニ犯罪タル所爲ノ存在シ若クハ存在セサルコト被告人其所爲ニ關係シ若クハ關係セサルコト及ヒ其犯罪ノ性質如何ナルヤニ付キ裁判シタル點ノミ既判力ヲ有シ其他ノ點ニ付テハ民事裁判所ハ隨意ニ裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ然リ而シテ我國ハ歐洲諸國ト

異ナリ陪審ヲ用ルニ總テ裁判官ニ於テ裁判ヲ爲シ又其裁判ニハ必ス理由ヲ付
ス可キヲ以テ右ノ三點ニ付キ如何ニ裁判ヲ爲シタル乎ハ其理由中ニ就テ容易
ニ之ヲ發見スヘキヲ得ヘキナリ

要スルニ我法律ハ佛國ニ行ハルニ第一說ヲ採用シタルモノナレハ其結論ナリ
トシテ余カ前段ニ說示シタル所ノモノハ之ヲ我法律ニ適用スルヨリ得ヘシ

第二節 民事ノ裁判ハ刑事裁判ニ影響ヲ及ボス可キ

平否ヲ論ス

刑事裁判ノ民事裁判ニ於ケル關係ニ付テハ前節ニ示シタル如ク佛國學者ノ說
ニ派ニ別レタリト雖モ民事裁判ノ刑事裁判ニ於ケル關係ニ付テハ彼國ノ學者
ノ說一途ニ出テ孰レモ此効力ヲ彼ニ及ボスヲナシト說ケリ而シテ其理由トスル
所ハ第一、薄弱ナル證據ニ基キタル民事裁判ノ効力ハ公力ヲ用非テ十分ニ集取
シタル證據ニ基ク可キ刑事裁判ノ上ニ及ボサシムルノ必要ナク又其道理ナシ
第二、一個人タル被害者カ民事訴訟ニ關係シタルヲ以テ代表者タル檢事ニ代リ
タルモノト看做スヲ得スト云フニ在リ

然レモ豫判事件ニ付テハ民事裁判所カ豫判シタル所ハ其効力ヲ刑事裁判上ニ
及ボス可ク刑事裁判所ハ決シテ其民事裁判ニ反對スルヲ許サズ之ヲ例外ト
ス即チ身分ノ事及ヒ森林ノ所有權ニ付テハ刑事裁判所ハ民事裁判所ノ裁判シ
タル所ニ服從セザル可カラス

我法律ニ於テハ佛國法ノ如ク豫判事件トシテ特ニ規定シタルモノナク又民事
裁判ハ刑事ニ付キ既判力ヲ有スト明言シタルモノナキヲ以テ身分ニ關スル事
所有權ニ關スル事ト雖モ總テ民事裁判所ノ裁判ハ刑事裁判ニ對シテ何等ノ効
力ヲモ及ボスヲ得サルモノトス即チ民事裁判所ニ於テハ甲者ハ乙者ノ子ナ
リト判定シタゾヲ刑事裁判ニ於テハ甲者ハ乙者ノ子ニ非ス故ニ弑親罪成立セ
スシテ通常ノ謀殺罪ナリト判定スルモ妨ナク又民事裁判ニ於テハ其ノ物品
ハ丙者ノ所有ニ屬スト判定シタルヲ刑事裁判ニ於テハ其物品ハ丁者ノ所有ナ
ルカ故ニ丙者ハ竊取ノ罪アルヲ免カレスト判定スルモ亦可ナリトス

第四章 公訴私訴ニ干與シタル者ノ責任

公訴私訴ニ干與スル者ニハ官吏アリ常人アリ又其干與ニ直接ト間接トノ別アリ

リ判事ハ常ニ直接ニ公訴私訴ニ干與シ又檢事ハ公訴ニ付キ民事原告人ハ私訴ニ付キ直接ニ干與スルモ司法警察官及ヒ告訴人、告訴人ノ如キハ間接ニ公訴ニ干與スルニ過キヌ此ノ如ク彼此區別アリト雖モ其干與ニ付キ過誤アルニ於テハ齊シク被告人ニ對シ損害ヲ加フルノ結果ヲ生ヌ可シ若シ此結果ヲ生シタルキハ彼等其賠償ノ責ニ任セサル可カラサル乎是レ本章ニ於テ研究セントスル所ノ問題ナリトス

法律ハ右ノ問題ニ付キ官吏ト常人トヲ區別シ先ツ第十三條ヲ以テ常人ノ責任如何ヲ規定シ次ニ第十四條ヲ以テ官吏ノ責任如何ヲ規定シタリ今便宜上此順序ヲ顛倒シ左ノ二節ニ別テ説明ス可シ

第一節 官吏ノ責任

官吏ノ責任ニ付テハ第十四條ニ

「被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡查、憲兵卒ニ對シ賠償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヌ但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在

ラス」

ト明言シ是等ノ官吏カ故意ヲ以テ被告人ニ損害ヲ加フルニ非サレハ被告人有罪ト爲リ又無罪ト爲リタルニ拘ハラヌ總テ賠償ノ責ニ任セサルト爲シタリ去レハ其重大ナル過失ニ依リ損害ヲ加ヘタル場合ト雖モ官吏ハ別ニ懲戒ノ處分ヲ受クルトアル可キモ被告人ニ對シテハ毫モ責任ナキモノト云フ可シ

翻テ常人ニ關スル法律ノ規定ヲ觀ルニ其重大ナル過失ニ依リ被告人ニ損害ヲ加ヘタル場合ニ於テハ賠償ノ責任アルモノト爲シタリ然ルニ法律ニ精通シ注意周到ナル可キ官吏ニ付テハ其過失如何ニ重大ナルモ賠償ノ責任ナシト爲シタルハ頗ル事理ニ反スルモノ、如シ是レ人ノ輒モスレハ立法者ハ徒ニ官吏ヲ庇保スルモノナリトノ疑ヲ容ル、所以ナリトス

然レモ法律カ右ノ如ク規定ヲ爲シタルモノハ畢竟然ラサルヲ得サル一大理由アリテ然ルナリ其一大理由トハ何ソ官吏ヲシテ安心シテ十分ニ其職務ヲ盡サシメントスルモノ是ナリ

第一、判事ニ付テ之ヲ觀ルニ判事タル者ハ豫審、公判ヲ問ハス訴ヲ受ケタル事

件ニ付テハ必ス裁判ヲ爲サ、ル可カラズ若シ故ナク之ヲ拒ムトアラシカ刑法
 上其罰アリ然リ而メ其裁判ヲ爲スニハ先ツ十分ニ證據ヲ集取シ一々之ヲ取調
 ヘ以テ事實ノ發見ヲ勉メサル可カラズ又必要アルニ當リテハ被告人ノ逃走ヲ
 防止スル爲メ已ムヲ得ス合狀ヲ發シテ其自由ヲ停止スルトアル可シ總テ是等
 ノ處分ヲ爲スニ付キ偶、過失アリタルハ被告人ニ對シ賠償ノ責ニ任ス可キモ
 ノナリトセンカ判事タル者ノ進退維レ谷マルモノト云フ可シ進ンテ其職務ヲ
 盡サンカ萬一ノ過失賠償ノ責ヲ生シ退テ其職務ヲ曠フセンカ刑罰若クハ懲戒
 ノ處分之ニ隨フヲ免カレヌ去レハ自然ノ情勢トシテ一方ニ於テハ賠償ノ責ヲ
 免カレ他ノ一方ニ於テハ刑罰若クハ懲戒ノ處分ヲ免カレンカ爲メ外形上十分
 ニ職務ヲ行ヒタルノ機ヲ裝ヒ其實不十分ナル取扱ヲ爲スニ至ルノ弊ヲ生ス可
 シ豈此ノ如クニシテ裁判事務ノ舉カルヲ望ム可ケンヤ乃チ法律ハ判事カ毫モ
 顧慮スル所ナク十分ニ進テ其職務ヲ盡サントテ欲スルヨリ多少ノ過失アルモ
 賠償ノ責ニ任スルトナシト規定シタリ

第二、檢事ニ付テモ亦然リ犯罪アルト認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルハ

ハ捜査ヲ爲シ而シテ其事件果シテ法律ノ罰スル所ナリト認メタルハ公訴ヲ提
 起實行セサル可カラズ然ルニ一旦起訴シタル後反對ノ證據出テ、被告人爲メ
 ニ無罪免訴ト爲リ又ハ起訴シタル罪名ヨリ輕キ罪ニ該當スルト爲リタルハ
 ハ最初ノ起訴ニ過誤アルヲ原因トシ賠償ノ責ニ當ラサル可カラズトセハ檢事
 タル者其責ニ任セントテ顧慮スルヨリ自然犯罪アルトテ確知スルモ容易ニ起
 訴ノ手續ヲ爲サズ遂ニハ其時機ヲ失スルヨリ公訴ヲ時効ニ罹ラシメ否ラサル
 モ犯人逃走證據湮滅ノ害ヲ生ス可シ乃チ法律ハ此不都合ヲ去リ必罰ノ責ヲ舉
 ケシメンカ爲メ檢事過チテ無辜ニ對シ公訴ヲ提起實行スルモ猶ホ且ツ賠償ノ
 責ナシト規定シタルナリ

第三、裁判所書記ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ調書其他訴訟記録ヲ作ルヲ以テ其
 本務ト爲スモノニシテ被告人ニ對シ治罪處分ヲ爲スノ權ナシ隨テ其處分ノ爲
 メ被告人ニ損害ヲ加フルトナシ然レモ訴訟記録ヲ作ルニ當リ或ハ文字ヲ誤記
 脱漏スル等ノ事アリテ爲メニ被告人ニ損害ヲ加フルトナシトセス此場合ニ於
 テ其損害賠償ノ責ニ任セサル可カラズトセンカ書記タル者實ニ困惑ヲ極ムル

ニ至ラシ例ハハ判事カ被告人ヲ訊問スルニ當リ書記ハ傍ニ在リテ其問答ヲ錄取スルニ止マリ自ラ被告人ニ向テ問ヲ發スルノ權ナシ況ヤ判事ニ對シテハ決シテ問ヲ發スル等ノ事ヲ許ヌ可カラヌ裁判所ノ威嚴ニ關スレハナリ去レハ書記ニ於テ多小判事ノ問又ハ被告人ノ答ニ付キ疑義アルモ之ヲ質スニ由ナキヲ以テ己ムヲ得ヌ云々ノ意義ナル可シト判斷シ之ヲ錄取セサル可カラス然ルニ其錄取スル所ニ過誤アリシヲ原因トシ賠償ノ責ニ任セシムルハ書記ヲ責ムルヲ頗ル嚴酷ニ過クルモノト謂フ可シ法律ハ書記ニ對シ其過誤ヲ避ケ得ルノ方法ヲ許與セザレハナリ

第四、 執達吏ハ書類ノ送達ヲ爲スニ止マルモノニシテ假令其送達ニ過誤アルモ被告人ニ損害ヲ加フルヲナカル可シト信ス故ニ詳説セヌ

第五、 司法警察官ハ犯罪ヲ捜査シ又現行犯ノ場合ニ於テハ假ニ豫審處分ヲ行フモノナリ其犯罪ノ捜査ニ付テハ被告人ニ對シ直接ニ損害ヲ加フルヲ殆ト之ヲナル可シト雖モ假豫審ニ付テハ過テテ無辜ヲ逮捕シ又ハ逮捕セシムル等ノ事ニ依リ被告人ニ損害ヲ加フルヲナシトセヌ然レモ前段判事檢事ニ付テ説示

シタルト同一ノ理由アルヲ以テ法律ハ賠償ノ責ニ任セシメヌ

第六、 巡查憲兵卒ハ令狀ヲ執行シ又現行犯ノ場合ニ於テハ被告人ヲ逮捕シ及ヒ司法警察官ノ手足トナリテ其捜査ノ職務ヲ補助スルモノナレハ被告人ニ對シ直接又ハ間接ニ損害ヲ加フルヲ固ヨリ之アル可シト雖モ司法警察官ニ於ケルト同一ノ理由アルヲ以テ賠償ノ責ニ任セシメサルナリ

以上説示シタル如ク官吏ノ過失ニ因リ被告人ニ損害ヲ加ヘタルハ懲戒上ノ責罰ヲ科スルハ格別被告人ニ對シテハ賠償ノ責ヲ負ハシメサルヲ本則トス然レモ法文ニ明言スル如ク刑法上ノ罪ヲ犯シ又ハ故意ヲ以テ被告人ニ損害ヲ加ヘタル場合ハ固ヨリ賠償ノ責ヲ免カル、トヲ得ヌ

官吏カ刑法上ノ罪ヲ犯ストハ例ヘハ程式規則ヲ遵守セヌシテ被告人ヲ逮捕監禁シ又ハ陵虐ノ所爲ヲ加ヘ或ハ故ナク審理ヲ遷延シ又ハ賄賂ヲ受ケ若クハ恨ヲ挾ミテ陷害シ又ハ訴訟記録ヲ偽造スル等是ナリ總テ是等ノ所爲アランカ社會ハ其公益ヲ害セラレ被告人ハ其私權私益ヲ害セラレ乃チ社會ニ公訴權生シ被告人ニ私訴權生スルカ故ニ前ニ處分ヲ爲シタル官吏ハ新ニ被告人ト爲リ前

被告入タリシ者ハ新ニ民事原告人ト爲リテ賠償ヲ要求スルコトヲ得ヘキヤ論
 ヲ俟タサル所ナリトス
 官吏カ前ニ揭ケタル如キ刑法上ノ罪ヲ犯サ、ルモ故意ヲ以テ被告人ニ損害ヲ
 加フヘキ處分ヲ爲シタルルハ亦其賠償ノ責ヲ免カレシムルノ理由ナシ蓋シ官
 吏職務上ノ過失ハ之ヲ宥恕ス可キノ理由アルモ其職務外ノ所爲ニ付テハ嚴ニ
 制裁ヲ加ヘサル可カラヌ假令外形上ハ職務上ニ關スルカ如クナルモ其私意ニ
 出ルモノハ則チ一個人ノ資格ヲ以テ行ヒタルモノナレハ普通法ヲ離レテ特別
 ノ保護ヲ與フ可キニ非ス殊ニ公權ヲ假リテ私意ヲ逞シフシ職務ヲ汚瀆スルノ
 尤甚シキモノナリ是レ其刑法上ノ罪ヲ犯シタル場合ト同シク賠償ノ責ニ任セ
 シムル所以ナリ

官吏カ賠償ノ責ニ任ヌ可キ場合ニ於テハ何レノ裁判所ニ其要求ヲ爲ヌ可キカ
 法律ハ此點ニ付キ何等ノ規定ヲモ爲サ、ルヲ以テ普通一般ノ法則ニ從ヒ管轄
 權ヲ有スル裁判所ニ其要求ヲ爲ヌ外ナシト解釋セサル可カラヌ
 私訴ハ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ爲ヌモ又ハ民事裁判所ニ爲ヌモ被害者ノ

隨意ナリ官吏ノ犯罪ニ付テ特例ヲ設ケルノ理由ナク又實ニ法律ハ之カ特例ヲ
 設ケタルコトナシ故ニ其犯罪ニ因テ被告人ニ損害ヲ加ヘタル場合ニ於テハ被告
 人ハ其官吏ニ對シ公訴ノ起ルヲ待テ之ニ附帶スルコトヲ得ヘク又別ニ民事裁判
 所ニ出訴スルコトヲ得ヘシ

官吏カ故意ヲ以テ被告人ニ損害ヲ加フルモ其所爲犯罪ト爲ラサルルハ刑事裁
 判所ニ公訴ノ起ル可キ理ナキヲ以テ被告人ハ民事裁判所ニ出訴セサルヲ得ス
 之ヲ要スルニ常人ニ對スル場合第十三條 第四項ト異ナリ官吏ニ對シテハ本案事件ヲ
 管轄スル刑事裁判所ニ要償ノ訴ヲ爲ヌコトヲ得サルモノトス然ル所以ノモノハ
 若シ之ヲ許スルハ奇怪ナル景狀ヲ呈シ遂ニ裁判所ノ威嚴ヲ傷クルニ至ルノ恐
 レアレハナリ今一例ヲ舉クレハ現ニ本案事件ヲ審判スル判事ニ對シ要償ノ訴
 ヲ爲ヌトセハ其判事ハ一面ニ於テハ被告人ト爲リ他ノ一面ニ於テハ裁判官ト
 爲ルノ奇觀アラシキ裁判所構成ノ一員タル檢事及ヒ裁判所書記ニ付テモ亦殆
 ト之ト異ナラヌ一面ニ於テハ檢事書記トシテ其職務ヲ行ヒ他ノ一面ニ於テハ
 被告人ト爲リテ答辯ス此ノ如クニシテ法廷ノ威嚴ヲ保ツコトヲ得サルハ明白ナ

リ執達吏司法警察官又ハ巡查憲兵卒ニ至リテハ裁判所外ノ官吏ナルヲ以テ被
 告人トシテ法廷ニ立タシムルモ敢テ判事檢察事等ニ於ケルカ如キ不都合ナキニ
 似タリ然レモ是等ノ官吏ハ皆本案事件ニ關係シ各其職務ヲ行ヒタルモノナレ
 ハ之ヲ本案事件ノ法廷ニ立タシムルハ事情ニ於テ宜シキヲ得タルモノト云フ
 ヘカラス殊ニ司法警察官ノ如キハ檢察ノ職務ヲ補助シタルモノナレハ之ヲ被
 告人トスレハ檢察ヲ被告人トスルト大差ナク間接ニ裁判所ノ威嚴ヲ傷クルヲ
 免カレヌ是レ法律カ常人ニ對スル要償ノ協合ト殊別シ官吏ニ對シテハ本案事
 件ノ關係スル裁判所ニ要償ノ訴ヲ爲スコト許サ、ル所以ナリ

第二節 常人ノ責任

茲ニ所開ル常人トハ告訴人、告發人、民事原告人ノ三者ヲ指ス是等ノ者ハ或ハ直
 接ニ或ハ間接ニ公訴私訴ニ干與スルモノニシテ其干與ノ爲メ被告人ニ損害ヲ
 加ラルコトナシトモモ乃チ法律第十三條ヲ以テ其責任ヲ規定シテ曰ク
 「被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發
 人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損

害ノ償ヲ要スルコトヲ得
 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若
 クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ
 民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害
 ノ償ヲ要スルコトヲ得

右第一項第二項ハ告訴人、告發人、民事原告人ノ三者ニ普通ナル責任ヲ規定シ第
 二項ハ民事原告人ニ限ル特別ノ責任ヲ規定シタルモノナリ今法律カ是等ノ常
 人ニ責任ヲ負ハシメタルハ何等ノ理由ニ基キタル歟ヲ按スルニ告訴告發ハ犯
 罪アリタルコトヲ當該官吏ニ申告シ以テ公訴ノ提起ヲ促スノ効力アリ私訴ハ已
 ニ起リタル公訴ニ附帶スルモノナレハ公訴ノ提起ヲ促スモノト云フ可カラザ
 ルモ被害事件ヲ證明シ以テ間接ニ公訴ヲ維持シ其補助ヲ爲スモノニシテ其効
 力ハ率口告訴告發ノ上ニ在リト云フヲ得ヘシ已ニ此ノ如キ効力アリトスル上
 ハ其告訴告發又ハ私訴ヲ爲ス者ニ責任ヲ負ハシム可キハ當然ナリ若シ此責任
 ヲ辭セント欲セハ初メヨリ告訴告發又ハ私訴ヲ爲ス可カラズ然ルニ之ヲ爲シ

ナカテ責任ヲ免カレントスルモ條理上決シテ之ヲ許ス可キニ非ス
 惡意ヲ以テ告訴告發ヲ爲スハ即チ不實ノ事ヲ構造シ被告人ヲ罪ニ陷レントス
 ルモノニシテ刑法ノ所謂誣告罪ヲ犯スモノナリ已ニ罪ヲ犯ス公訴私訴之ニ
 因テ生ス可ク乃チ被告人ハ犯罪者タル告訴人告發人ニ對シ私訴ヲ爲シ賠償ヲ
 要求スルコトヲ得ヘキハ勿論ノ事ナリトス民事原告人カ公訴以外ノ不實ノ事ヲ
 構造スル場合ニ於テモ其事一ノ犯罪ヲ組成スルキハ亦誣告罪成立ス可キヲ以
 テ被告人ニ要償ノ權アルハ言フ俟タズ假令其事ノ犯罪ト爲ラサルモ惡意ヲ以
 テ其申立ヲ爲シ之ニ因リテ被告人ニ損害ヲ加フル上ハ渠レ其賠償ノ責ニ任セ
 サル可カラズ

告訴人等ニ惡意ナク單ニ過失ニ因リテ被告人ニ損害ヲ加ヘタル場合ニ付テハ
 法律ハ區別ヲ立テ其過失ノ重大ナル場合ニ限り賠償ノ責ニ任セシメ其輕少ナ
 ル場合ニ於テハ此責ヲ免カレシメタリ抑過失ニ因リ他人ニ損害ヲ加フル者ハ
 其過失ノ輕重如何ヲ問ハズ等シク賠償ノ責ニ任セシムルヲ普通ノ法則トス然
 ルニ告訴告發及ヒ私訴ニ付テハ普通ノ法則ニ反シ右ノ如ク區別ヲ立テタルモ

ノハ果シテ何等ノ理由アリテ然ル乎思フニ左ノ二者ノ外ニ出テサル可シ
 第一、法律ハ常人ニ對シテ告訴告發ヲ爲ス可シ又私訴ヲ提起ス可シト命令セ
 ス之ヲ爲スト否トハ一ニ其選擇スル所ニ任セタリ去レハ被害者ニシテ告訴ヲ
 爲シ私訴ヲ提起セントスルカ又被害者ニ非サル者ニシテ告訴ヲ爲サントスル
 片ハ先ツ其事件ノ犯罪ト爲ルヤ否其犯人ハ何人ナルヤ等ヲ十分ニ取調ヘ而シ
 後其手續ヲ爲ス可キヲ相當ノ順序ナリトス然ルニ十分ニ取調ヲ爲サントスル
 モ常人ニ於テ固ヨリ能シ得ヘキニ非サルヲ以テ其取調ハ常人ノ力ノ及フ所ニ
 限ラサルヲ得ヌ已ニ其力ノ及フ限り取調ヲ盡シ告訴等ヲ爲スモ後日ニ至リ反
 證出テ、被告人無罪ト爲ルコトアラン此場合ニ於テハ告訴等ヲ爲シタル者ニ過
 失アルコトハ爭フ可カラサルモ其過失タル頗ル宥恕ス可キモノニ屬ス渠レハ其
 及フ限りノ力ヲ盡シタルモノナレハナリ是ヲ以テ輕忽ニ告訴ヲ爲スカ如キ過失
 ノ重大ナルモノヲ除ク外法律ハ之ヲ寬待スルヲ相當トス其方ハ他ナシ賠償ノ
 責任ヲ免カレシムルニ在リ

第二、法律ハ告訴告發ヲ爲ヌ可キコトヲ常人ニ命令セサルモ犯罪發覺ノ速ナラ

刑 事 訴 訟 法

1106

シテ欲スルヨリ成ル可ク常人ニ於テ之ヲ爲スヲ望メリ然ルニ今告訴人告
 發人ニ輕小ノ過失アルモ猶ホ賠償ノ責アリトセハ自然告訴告發ノ數ヲ減シ犯
 罪發覺ノ便ヲ失フニ至ラン去レハ告訴告發ノ數ヲ多カラシメンニハ告訴人告
 發人ノ責任ヲ輕クスルヲ必要トス是レ之ヲ第二ノ理由トス

法律ハ過失ノ輕重ニ因リ責任ノ有無ヲ定メタルモ何レノ場合ニ於テハ過失ヲ
 重ト爲シ又輕ト爲ス可キ乎ヲ定メサルノミナラス其輕重ノ相判ル、標準ヲモ
 示スナシ是レ其過失ノ模範千種萬態ニシテ一々列擧スルヲ能ハサルハ勿論
 惣ニ其標準ト爲ス可キニ三ノ場合ヲ例示セハ反テ拘泥ノ弊ヲ生スルヲ慮リ
 テ然ルナリ故ニ其輕重ノ區別ハ事實裁判官ニ於テ情理ヲ參酌シテ之ヲ判定セ
 サル可カラヌ

告訴人告發人ニ重大ナル過失アルモ其過失カ損害ノ原因ト爲ラサルハ決シ
 テ賠償ノ責ニ任セシムルヲ能ハス例ハ被告ノ誰タルヲ明示セシテ單
 ニ云々ノ犯罪アリト申告シタルニ止マルル如キ是ナリ此場合ニ於テ其申告
 ニ基キ檢事ニ於テ被告人某ニ對シテ公訴ヲ提起シタリトセンニ其被告人某ハ檢

刑 事 訴 訟 法

第一編 第四卷

公訴私訴ニ干關シタル者ノ責任

1107

事ノ爲メニ始メテ被告人ナリト指名セラレタルモノナレハ其受ケタル損害ノ
 賠償ヲ告訴人告發人ニ要求スルノ理由ナシ某ト告訴人告發人トハ直接ノ關係
 ナラレハナリ但告訴人告發人ニ於テ被告人ノ氏名ヲ指示セサルモ其人ノ誰タ
 ルヲ知リ得ヘキ事項ヲ舉示シタルルハ即チ其人ヲ指シタルト同一ナルヲ以
 テ重大ナル過失アレハ其責ニ任セサル可カラヌ

又檢事ニ於テ已ニ被告人某ニ對シテ公訴ヲ提起シタル後被害者右某ニ對シテ私訴
 ヲ爲ス場合モ亦前ニ同シ被害者ニ如何ナル過失アルモ被告人ノ受ケタル損害
 ノ原因ハ檢事ノ起訴ニ在ルヲ以テ被告人ヨリ被害者ニ對シテ賠償スルヲ得サ
 ルナリ

諸法律カ告訴人告發人又ハ民事原告人ニ惡意若クハ重過失アル場合ニ於テ被
 告人ニ對シテ賠償ノ責ニ任セシムルニ付テ往々疑ヲ容ル、者アリ其言ニ曰ク常
 人告訴告發ヲ爲スモ之ニ因リテ公訴提起セラル、ナシ其公訴ヲ提起スル者
 ハ常ニ檢事ニシテ檢事ハ告訴告發ニ竊索セラレヌ隨意ニ之ヲ取捨スルノ權ヲ
 有ス去レハ告訴人告發人ニ惡意若クハ重過失アルモ直接ニ被告人ニ損害ヲ加

ニ公訴ヲ提起シタルニ在リト謂ハサル可カラズ然ルニ檢事ニハ責任ヲ負ハシ
 メスシテ訴訟ノ遠因タル告訴人告發人ニ責任ヲ負ハシムルハ解ヌ可カラズ殊
 ニ檢事カ已ニ公訴ヲ提起シタル後其公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲シタル民事原告
 人ニ責任ヲ負ハシムルハ實ニ奇怪ナリト謂フ可シト此言一應其理アルカ如シ
 然レモ雖某ハ云々ノ罪ヲ犯シタリ其證據ト爲ル可キ事物ハ云々ナリト申立テ
 殊ニ惡意ヲ以テ豫メ證據ト爲ル可キ事物ヲ偽造シ巧ミニ虛稱ノ事實ヲ申告ス
 ルニ於テハ檢事タル者之ニ誤ラレサルヲ得ヌ法律上ニ於テヨソ檢事ハ告訴告
 發ニ羈束セラレサルモ事實上ニ於テハ往々羈束セラレ、ヲ免カレヌ是レ余カ
 前ニ告訴告發ハ公訴ノ提起ヲ促スノ効力アリト言ヒタル所以ナリ已ニ事實上
 此効力アリトセハ其効力ヲ生シタルノ本源タル告訴人告發人ニ責任ナシト爲
 ス可カラズ民事原告人ニ付テモ亦然リ事實上公訴ノ補助ヲ爲シ被告人ニ對ス
 ル嫌疑ヲ一層甚深ナラシメタル上ハ其責ニ任セシムルヲ相當ナリトス尤モ法
 文ニ言ヘル如ク訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失

ニ出テタル片ニ限り賠償ノ責任アルモ其告訴告發又ハ私訴カ訴訟ノ原由ト爲
 ラサル片即チ公訴ノ提起ヲ促シタルモノニ非ヌ又公訴ノ補助ヲ爲シタルモノ
 ニ非サル片ハ告訴人告發人民事原告人ハ被告人ニ對シ何等ノ責任ヲモ負ハサ
 ルハ論ヲ俟タサル所ナリトス
 第三項ノ規定ハ第一項第二項ノ規定ト大ニ其趣ヲ異ニシ民事原告人私訴ニ付
 キ不當ノ上訴ヲ爲シ因テ被告人ニ損害ヲ加ヘタル片其賠償ノ責ニ任ヌ可キト
 ヲ規定シタルモノナリ蓋シ上訴ハ法律カ訴訟關係人ニ與ヘタル所ノ權利ナリ
 去レハ民事原告人ノ上訴ニシテ正當ナランニハ縱令之カ爲メ被告人ニ損害ヲ
 加フルコトアルモ被告人ハ民事原告人ニ對シ賠償スルコトヲ得ヘカラス何トナレ
 ハ民事原告人ハ正當ニ其權利ヲ行ヒタルモノニシテ被告人ノ權利ヲ侵害シタ
 ルモノニ非サレハナリ然レモ民事原告人ノ上訴不當ナルニ於テハ是レ法律ノ
 與ヘタル權利ヲ行ヒタルモノニ非ヌシテ權利ヲ濫用シ以テ被告人ノ利益ヲ害
 シタルモノナレハ其賠償ノ責ニ任セシメサル可カラズ是レ此第三項ノ規定ア
 ル所以ナリ

民事原告人不当ノ上訴ヲ爲スルハ之カ爲メ其對手タル被告人ニ於テ多少訴訟費用ヲ要スルニ至ル可シ故ニ其費用ハ民事原告人ニ負擔セシムルヲ當然ナリトス然レモ此訴訟費用負擔ノ外尙ホ損害ノ賠償ニ任セシムルハ普通民事ノ訴訟ニ於テ決シテ見サル所ナリ然ルニ私訴ノ上訴ニ限リ此規定ヲ爲シタルモノハ普通民事ノ訴訟ト異ナリテ私訴ノ上訴ノ爲メ被告人ノ未決拘留ヲ長クスルヲアリ即チ直接ニ大ナル損害ヲ加フルヲ以テナリ

公訴ノ裁判ニ對シ檢事又ハ被告人ヨリ上訴ヲ爲シ私訴ノ裁判ニ對シ民事原告人ヨリ上訴ヲ爲シタル場合ニ於テハ假令被告人長ク未決拘留ヲ受クルニ至ルモ是レ公訴裁判ニ對スル上訴ノ爲メニシテ民事原告人ノ上訴ニ基クモノニ非ヌ故ニ民事原告人ノ上訴不當ナルモ被告人ハ之ニ對シ賠償ヲ求ムルヲ得ヌ又公訴ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ爲ス者ナク單ニ民事原告人ノミ私訴ノ裁判ニ對シ上訴ヲ爲シタル場合ニ於テハ公訴ノ裁判コ、ニ確定シ私訴ハ公訴附帶ノ關係ヲ離ル可シ隨テ被告人ハ其私訴ノ上訴ノ爲メ未決拘留ヲ長クセラル、トナシ去レハ此場合ニ於テモ亦民事原告人ニ對シ賠償ヲ求ムルヲ得サルハ勿

論ナリトス

然ラハ第三項ノ規定ヲ適用ス可キハ如何ナル場合ニ在ル乎余ヲ以テ之ヲ觀ルニ此場合ハ現行法律中惟一アルニ過キヌ即チ民事原告人ヨリ忌避ノ申請ヲ爲シタルニ之ヲ不當ナリト宣言スル決定アリ然ルニ民事原告人此決定ニ服セス抗告ヲ爲シタリ此場合ニ於テハ第四十三條ニ從ヒ其抗告ノ裁判アルマテ辯論ヲ中止セサル可カラヌ而カモ私訴ノ辯論ノミナラス公訴ニ付テノ辯論ヲモ中止セサル可カラヌ隨テ此間被告人ハ空シク未決拘留ノ苦ヲ受クルニ至ル故ニ民事原告人ノ抗告不當ナリトシテ棄却セラル、ハ被告人ニ對シ賠償ノ責任セシムルヲ相當トス立法者ハ此希有ナル場合ヲ豫想シテ此ク規定シタルモノナランカ

以上說示シタルカ如ク告訴人告發人又ハ民事原告人ニ賠償ノ責任アル場合ニ於テハ被告人ハ何レノ裁判所ニ其賠償ヲ要求スルヲ得ヘキ乎告訴人等ニ對シ誣告ノ公訴起リタルハ其公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ訴求スルヲ得ヘキモ此他ノ場合ニ於テハ民事裁判所ニ訴求スルヲ當然ノ事ナリトス然ルニ第十

三條第四項ニ

「要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得」ト規定シ本案訴訟ノ繫屬スル刑事裁判所ニ訴求スルモ亦被告人ノ隨意ナリトセリ

今此規定ノ主旨ヲ按スルニ一ニ被告人ノ便利ヲ計リタルニ外ナラサル可シ其刑事裁判所ハ現ニ本案事件ヲ審理スルモノナレハ告訴告發及ヒ私訴ハ其當ヲ得タルモノナルヤ否ヤ又其當ヲ得サルモノトスレハ違ハ是レ告訴人等ノ故意若クハ過失ニ出タルヤ又其過失ハ重大ナルヤ否ヤ等ヲ取調ヘ之ヲ判定スルハ實ニ容易ノ業ナル可シ又被告人ニ於テモ其被害ノ事實ヲ證明スルニ付キ困難ヲ感スルコトナカル可シ若シ必ス民事裁判所ニ訴求ス可キモノトセハ獨リ舉證上困難ナルノミナラヌ時日ト費用トヲ要シ其不便言フ可カラス是ヲ以テ此特別ノ便利ヲ與ヘ以テ被告人ヲ保護シタルモノナリ
右要償ノ訴ハ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得ルモ法文ニ云ヘル如ク本案事件ノ判決以前ニ於テセサル可カラス是レ刑事裁判所ニ於テ本案事件ニ付

刑 事 訴 訟 法

刑 事 訴 訟 法

キ判決ヲ下シタル上ハ其事件ノ關係ヲ免カル、カ故ニ最早其事件ニ附着スル要償ノ訴ヲ受ク可キ理由ナク又其名義ナキヲ以テナリ左レハ被告人ニ於テ本條ニ從ヒ告訴人等ニ對シ要償スルノ權利アルコトヲ認ムルハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アル以前ニ於テ豫メ要償ノ申立ヲ爲シ置クヲ要ス即チ自分ハ結局無罪免訴ト爲ル可シ若シ不幸ニシテ刑ノ言渡ヲ受クルニ至ルモ本訴訟ノ原由タル告訴人等ノ惡意又ハ重過失ニ出テタルモノニシテ自分ハ爲メニ云々ノ損害ヲ被レリ故ニ本案ノ判決ト同時ニ告訴人等ニ於テ賠償ス可キ旨ヲ言渡サレンコトヲ請求スト申立テ置ク可シ若シ豫メ此申立ヲ爲シ置カスシテ本條ノ判決ヲ受クルニ至リタルハ民事裁判所ニ訴訟ヲ提起スルノ外ナシトス
被告人豫メ要償ノ訴ヲ爲シタルハ裁判所ハ如何ニ之ヲ處置ス可キ乎法律ハ此點ニ付キ何等ノ規定ヲモ爲サス然レモ一ノ訴訟タル上ハ之ニ關シテ相當ノ審理手續ヲ盡サ、ル可カラス思フニ此訴ハ犯罪ニ原因スルモノニ非サルハ勿論ナルモ人ノ行爲ニ因リ生シタル損害ノ賠償ヲ要ムルノ點ハ私訴ト異ナルコトナシ故ニ私訴ニ關スル規定ヲ之ニ適用シ裁判所ハ私訴ト同一ノ手續ヲ爲スヲ

相當ナリトス即チ對手人タル告訴人告發人又ハ民事原告人ヲ此訴ノ被告人トシテ關係セシメ雙方ノ辯論ヲ聽キ而シテ後本案事件ノ判決ト同時ニ其判決ヲ爲シ若シ其取調未タ充分ナラサルハ公訴判決ノ後ニ於テ其判決ヲ爲ス可シ而シテ其請求金額百圓以下ナルモ區裁判所之ヲ裁判シ百圓以下ナルモ地方裁判所之ヲ裁判スルヲ得ヘク又其裁判ニ對スル上訴ノ如キモ亦私訴ノ例ニ依ル可シ

第五章 期間ノ計算

期間ハ官吏カ或ル手續ヲ爲スニ付キ差支ナカラシメンカ爲メニ與ヘタルモノト訴訟關係人ニ請求辯護等ノ準備ヲ爲スヲ得セシメンカ爲メニ與ヘタルモノト此他裁判所ニ出頭スル前豫メ私用ヲ辯スルノ猶豫アラシムル爲メニ與ヘタルモノ等ノ別アリト雖モ要スルニ此設ハ裁判ノ延滞ヲ妨クヲ以テ其主タル目的トヌ去レハ期間ハ總テ嚴重ニ之ヲ守ラシメ敢テ超過スルヲナカラシム可シ就テハ法律上其計算方ヲ一定シ以テ解釋ノ區々ニ涉リ事柄ノ如何ニ依リ長短ノ差異ヲ生スルカ如キ不都合ナカラシムルヲ要ス是レ第十五條ノ規定アル所以

ナリトス

第十五條ニ曰ク

「此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラヌ但時効ノ期間ハ此限ニ在ラス
一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ」

此規定ニ依レハ時ヲ以テ計算スル期間ト日ヲ以テ計算スル期間ト其起算點ヲ異ニスルヲ知ル可シ何カ故ニ此差アル乎思フニ時ヲ以テ計算スル期間ハ豫審ニ於ケル被告人ノ召喚第六十九條又ハ豫審公判ニ於ケル證人ノ呼出第一百十五條又ハ檢事カ豫審ノ記録ヲ檢閱シ還付スル場合第六十八條等事ノ急速ヲ要スルカ否ラサルモ幾多ノ時間ヲ要セサル場合ナルヲ以テニ十四時若クハ四十八時ト云ヘルカ如ク時ヲ以テ期間ヲ定メ而シテ即時ヨリ之ヲ起算セシメタルモノナリ尤モ此場合ニ於テモ分秒ノ如キ時ニ滿タサルモノハ

之ヲ除去シ例ハ被告入今日午前八時三十五分二十秒ニ召喚狀ノ送達ヲ受ケ
 タリトセハ明日ノ午前九時マテニ出頭スルヲ以テ足レトス必シモ其午前八
 時三十五分二十秒ニ出頭スルヲ要セス何トナレハ右ノ三十五分二十秒ハ八時
 ノ部ニ屬スルモノニ非スシテ九時ヲ形成スルノ分子タリ而シテ分子ハ時ニ非ス
 シテ其端數タルニ過キサレハナリ乃チ前例ノ場合ニ於テハ午前九時ヨリ起算
 シ二十四時ニ滿ルヲ以テ其期間ト爲ス可キモノトス
 日ヲ以テ起算スル期間ハ此法律カ通例用ユル所ノモノニシテ此期間ニハ初日
 ヲ算入セスシテ翌日ヨリ起算ス然ル所以ノモノハ其初日タル必ス其幾分ヲ輕
 過シ一日ニ滿タサルノミナラス若シ殘餘ノ期間ヲ算入ス可シトセハ時ヲ以テ
 計算スル期間ト差異ナキニ至リ別ニ此計算方ヲ設クルノ必要ナカル可キヲ以
 テナリ

期間計算ノ起點ハ前述ノ如シ而シテ其終點ハ如何ト云フニ時ヲ以テスルモノハ
 例ハ二十四時ノ期間ナレハ其初點ヨリ起算シ二十四時ニ滿ルヲ以テ其終點
 トシ日ヲ以テスルモノハ例ハ三日ノ期間ナレハ初日ヲ除去シ第二日ヨリ起

算シ第四日ノ滿ルヲ以テ其終點ト爲ス可シ若シ其終點ニ當ルノ日時休暇ニ當
 ルルハ之ヲ算入セス其翌日ヲ以テ終點ト爲ス可シ蓋シ休暇ノ日ハ公務ヲ執ラ
 サルヲ通例トスルカ故ニ期間計算上ニ於テハ其日ハ之ナキモノト看做スヲ相
 當トス殊ニ大勅令節ノ日ノ如キハ國民羣ヲ祝賀ス可キ日ナルニ拘ハラズ裁判
 所ニ出テ或訴訟手續ヲ爲シ例ハ上訴申立書ヲ差出サハル可カラストセンカ
 祝日タルノ實安クニカ在ル故ニ休暇ノ日ハ通例ノ休暇タルト臨時ノ休暇タル
 ト又全國一般ノ休暇タルト一地方ノ休暇タルトニ論ナク總テ之ヲ期間ニ算入
 セサルモノト爲シタリ
 然レモ休暇ノ日ニシテ期間ノ中間ニ介スル場合ニ於テハ仍ホ之ヲ期間ニ算入
 セサル可カラヌ何トナレハ其日ハ公然事ヲ行フ可キモノニ非ストスルモ其次
 日以下ニ於テ事ヲ行フヲ得ヘク隨テ訴訟關係人ノ權利ヲ害スルコトナケレハ
 ナリ

法律ハ時効ノ期間ヲ右計算方ノ例外ニ置キタリ其理由ハ前ニ時効ノ事ヲ説ク
 ニ當リ辯明シタルヲ以テ今復タ贅セス

二二八

借期間ノ計算ニ時ヲ以テスルト日ヲ以テスルトノ外月ヲ以テシ又年ヲ以テスルモノアリ時効ノ期間ノ如キ即チ是ナリ去レハ其月ト云ヒ年ト云フハ幾許ノ日數ニ相當スル乎法律ハ一年ト稱スルハ曆ニ從ヒ一月ト稱スルハ三十日ナリト明言セリ蓋シ年ニハ正閏ノ別アルモ僅ニ一日ノ差アルニ過キサルヲ以テ計算ノ便宜ヲ謀リ曆法ニ依ラシメタルモノナリ之ニ反シ月ナルモノハ曆法ニ依レハ或ハ三十一日ノモノアリ三十日ノモノアリ或ハ二十八日二十九日ノモノアリ僅々タル日數中ニ於テ其月ノ大小如何ニ依リ一日乃至三日ノ差ヲ生シ訴訟關係人各自ノ間ニ於テ公平ヲ欠クノ虞アリ因テ彼此相折中シテ三十日ト定メタルモノナリ此他一日ト稱スルハ二十四時云々トノ規定アルモ遺ハ事ノ序ニ言及ホシタルマテニテ其實之ヲ規定スルノ必要ナシ何トナレハ前已ニ說示シタル如ク初日ヲ算入セサルノ結果トシテ一日ノ期間モ常ニ二十四時以上ニ涉ル可ク決シテ二十四時ニテ滿了スルヲナケレハナリ

以上說キタル所ハ此法律ノ各條ニ規定シタル一般ノ期間ニ關ス是ヨリ特別ノ期間即チ路程ノ遠近ニ應シ特ニ附加スル猶豫期間ノ事ヲ說示ス可シ

第十六條ハ左ノ如ク規定シタリ曰ク

「此法律ニ定メタル期間ニ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得」

蓋シ此猶豫期間ナルモノハ裁判所遠隔ノ地ニ在ル者裁判所ニ出頭シ又ハ書類ノ往復ヲ爲スニハ勢ヒ數日若クハ數十日ヲ費サ、ルヲ得ス一般ノ期間ノミニテハ其應ニ爲スヘキヲ爲スヲ得シテ遂ニ其權利ヲ行ヒ義務ヲ盡スヲ能ハサルニ至ルヲ以テ特ニ之ヲ附加シタルモノナリ去レハ通常人カ旅行シ又ハ書類ノ送致ヲ爲スニ十分ナル餘裕アラシムル爲メ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フルト爲シタリ而シテ八里未滿ナルモ三里以上ナルキハ亦此端數ニ付キ更ニ一日ノ猶豫ヲ與ヘ以テ八里ニ滿サルヲ僅々數町ニ過キサルモノニ對シ嚴ニ過クルノ不都合ヲ避ケタリ

法律ハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フト云ヒ海陸二路アル場合ニ於テハ其孰レニ依テ計算スルモ差支ナキカ如ク見ユルモ其意ハ決シテ然ルニアラス苟

シモ陸路ノ就ク可キモノアル上ハ其海路ヨリ甚々遠キニ拘ハラヌ仍ホ陸路ニ依テ計算ス可ク唯航海セサル可カラサル場合ニ限り其海上ノ部分ノミ法定ノ割合ヲ以テ計算ス可キモノトス何トナレハ人々固有ノ足以テ跋涉ス可キ陸路アルニ拘ハラヌ必ス乗船航海ス可シト強ユ可キノ理アラサレハナリ

陸路ニ付テモ亦前ニ同シク正道ト間道トアルモ必ス正道ニ依テ計算ス可ク間道如何ニ近キモ之ニ依テ計算ス可キニ非ス強テ間道ニ就カシム可キノ理ナキヲ以テナリ

海路ノ一里ハ之ヲ陸路ノ一里ニ比スルニ殆ト其三分ノ一弱ニ當ル然ルニ海陸路共ニ八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フルカ故ニ海路ニ依ル者ハ陸路ニ依ル者ヨリモ多クノ猶豫ヲ得ヘシ然ル所以ノモノハ陸路ハ何時ニテモ旅行シ得ヘキモ海路ハ船舶ニ依ラサル可カラヌ而シテ船舶ノ出入ハ一般ニ就テ觀ルニ日々ニ之アルモノニ非サレハ陸路ト同一ノ割合ニテハ不十分ナル可シ因テ殆ト三倍ノ割合ト爲シタルモノナリ

右ノ如ク海路ニ付テハ多クノ猶豫ヲ與ヘタルモ猶ホ場所ニ依リ此猶豫期間ノ

ミニテハ不十分ナルコトアル可シ隱岐ノ如キ小笠原島ノ如キ航海ノ不便ナル又其度數ノ尠少ナル場所ニ付テハ特別ノ規定ナカル可カラヌ但シ法律ハ一々各地ニ付テ規定ヲ爲スコトヲ得ヌ又此ク煩雜ナル規定ヲ爲ス可キモノニ非サルヲ以テ右等ノ場所ニ付テ特ニ附加期間ヲ定ムルノ權ヲ裁判所ニ與ヘ以テ適宜ノ處置ヲ爲サシム是レ第二項ノ設アル所以ナリトス

猶期間ハ前ニ述ヘタル如ク主トシテ裁判ノ延滞ヲ防ク爲メニ設ケタルモノナレハ正當ノ故ナクシテ之ヲ徒過シタル者ニ對シテハ相當ノ制裁ヲ加フルコトヲ必要トス否ラサレハ人々怠慢ニシテ之ヲ遵守セサルニ至ル可シ因テ被告人豫審ノ召喚期日ニ出頭セサレハ勾引狀ヲ發スルコトヲ許シ公判ノ呼出期日ニ出頭セサレハ關席判決ヲ爲シ又保釋責付中呼出ヲ受ケテ其期日ニ出頭セサレハ其保釋責付ヲ取消ス等はレ其期日徒過ノ制裁ナリ又證人鑑定人通事ニシテ呼出ノ期日ニ出頭セサルハ罰金ヲ言渡シ證人ニ對シテハ別ニ又勾引狀ヲ發スルコトヲ許シタルモ亦其期日徒過ノ制裁ナリトス此他訴訟殊ニ上訴ヲ爲スノ期間ヲ徒過シタル者ニ付テハ第十七條ヲ以テ其制裁ヲ規定シタリ同條ニ曰ク

「此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間ヲ經過シタルトキハ特別ノ場
合ヲ除外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ」

左レハ控訴上告又ハ抗告ヲ爲スノ權アル者ニシテ其上訴ノ期間ヲ徒過シタル
片ハ制裁トシテ失權ヲ來タシ復タ其上訴ヲ爲スコ能ハサルニ至ル蓋シ期間内
ニ上訴ヲ爲サ、ル者ハ原裁判ニ服從シタリト看做シ得ヘキモノナレハ此制裁
ヲ付シタルハ當然ノ事ト謂フ可シ
法律ハ「特別ノ場合ヲ除外」ト云ヒ以テ期間ヲ徒過スルモ失權ヲ來タサ、ル場
合アルコト認メタリ其場合ハ他ナシ天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メ一旦
上訴期間ヲ經過スルモ其旨ヲ説明シタル片ハ期間ヲ經過シタルト因リ失ヒタ
ル權利ヲ回復スルコト得ル場合ニシテ第二百四十六條ニ規定シタルモノ即チ
是ナリ又第七十三條及ヒ第二百七條ニ依レハ重罪公判ニ付スル豫審決定又
ハ公判ノ開席判決ニ付キ被告人ニ送達スル旨渡書ニ其旨渡ニ對シ抗告又ハ故
障ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載セサル片又公判ノ對席判決ニ付キ裁判
長ヨリ其判決ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ告知セサル

片ハ更ニ正式ニ從ヒ送達又ハ告知アルマテ其期間ノ經過ヲ停止ス此二個ノ場
合モ亦本條ノ所謂ル特別ノ場合ニ相當スルモノト謂フヲ得ヘシ尙ホ是等ノ特
例ニ付テハ後ノ上訴等ノ編章ニ於テ詳説スル所アル可シ

第六章 書類ノ送達

書類ノ送達ハ其送達ヲ受クル者ノ權利義務ニ關係スルヲ以テ其方法ヲ鄭重ニ
シ敢テ過誤アルコトナキヲ期ス可シ然レモ偏ニ其鄭重ヲ望ム片ハ自然訴訟ノ延
滞ヲ來タシ又其費用ヲ増加スルヲ免カレヌ例ヘハ送達方法ノ最モ確實ナルハ
本人ニ送達スルニ若クモノナシサリトテ必ス本人ニ送達ス可シト定ムル片ハ
送達毎ニ其所在ヲ搜索セサル可カラヌ若シ本人忌避スル所アリテ其所在ヲ確
マヌ片ハ之ヲ搜索スル爲メ許多ノ日時ト費用トヲ要スルヤ必然ナリ乃チ法律
ハ鄭重ニ過キス粗漏ニ失セス公益私益ヲ害セサルノ程度ニ於テ送達ノ方法ヲ
定メサル可カラヌ

送達ノ方法ハ民事訴訟ニ於ケルト刑事訴訟ニ於ケルト其間差異アル可キノ理
ナシ而メ民事訴訟法ハ已ニ其第三百三十六條以下ヲ以テ詳細ニ送達ノ事ヲ規定

シタリ去レハ今又此法律ニ於テ故ラニ規定ヲ爲スノ必要ナシ因テ第十九條ヲ以テ

「書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス」

ト明言シ以テ重複ニ涉ルヲ避ケタリ

然レモ法律ハ民事訴訟法ノ規定ヲ適用スト記セシテ之ヲ準用スト云ヘリ是レ他ナシ民事訴訟法ノ規定中全ク之ヲ刑事ニ適用ス可カラサルモノアレハナリ例ヘハ同法第三百十八條第一項ニ訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス下アリ此規定ハ公訴附帶ノ私訴關係人ニ送達スル場合ニ適用スルコトヲ得ヘキモ公訴ノ被告人ニ對スル送達ニハ之ヲ適用ス可カラス何トナレハ民事上ノ利益ニ付テハ法律上代理人トシテ本人ニ代ル可キモ刑事ニ付キ其被告人ヲ代理ス可キ理アラサレハナリ故ニ公訴ノ被告ニ對スル送達ハ訴訟能力者ニ對スル送達ノ規定ニ從ハサルヘカラス法文ニ所謂準用トハ其適用ス可キ性質ノモノハ之ヲ適用ス可ク否ラサルモノハ然

ラストノ意ナリト知ル可シ

又法文ニハ「此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ」トアリ所謂別ノ規定トハ第七十六條第三項ニ召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ下アリテ民事訴訟法ニ於テハ郵便ニ依リテ送達ヲ爲サシムルコトヲ許シタルモ召喚狀ニ付テハ必ス執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシム可シト定メタルカ如キモノ是ナリ茲ニ注意ヲ要スル事アリ此法律ニ於テ書類ヲ檢事ニ送達ス可キコトヲ定メタルモノ多シ此場合ニ於テモ亦民事訴訟法ノ規定ニ依ラサル可カラサル乎思フニ檢事ハ原告ト爲リテ公訴ヲ提起實行スル者ナルモ又同時ニ公益ノ代表者トシテ訴訟ニ關係スル者ナリ去レハ通常民事ノ訴訟ニ於ケル原告ト同視ス可キニ非ス第七十六條ニ公判ハ判事檢事裁判所書記出廷シテ之ヲ爲スモノトス下アル如ク檢事ハ判事及ヒ裁判所書記ト同シク法廷ヲ構成スルニ關ク可カラサルノ職員タリ果シテ然ラハ檢事ニ爲ス可キ送達ハ執達吏ヲ用ユルヲ要セス又郵便ニ依ル可キモノニ非ス殊ニ其人ノ住居タル私宅ニ於テ其同居ノ親族雇人ニ送達シ若クハ其他ノ市町村長ニ對シ送達ノ手續ヲ爲スカ如キハ條理上決シ

ヲ許ス可キ事柄ニ非ス故ニ此法律中特ニ明文ナシト雖モ檢事ニ爲ス可キ送達ハ裁判所書記普通公文ノ往復規定ニ從ヒ檢事局ニ向テ之ヲ爲ス可キモ其下解釋モサレ可カラヌ

借檢事ヲ除ク外訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニハ本人ニ出會ヒタル地又ハ其住居等ニ於テ其手續ヲ爲ス可キモノナルモ若シ其住居遠隔ノ地ニ在ルル殊ニ他ノ裁判所ノ管轄地内ニ在ルルノ如キハ一々囑託ノ手續ヲ爲ス等非常ニ不便ヲ感スルコトアル可シ管ニ不便ナルノミナラズ之カ爲メニ徒ニ日時ト費用トヲ要ス可シ因テ最初ノ一回ハ自己ヨリ得テ送達ノ地ニ在ル者ニ付テハ執達吏ヲ派遣シ又ハ管轄地外ナレハ先方ノ地ノ裁判所書記ニ囑託ス可キモ次回以後ハ送達ニ付テハ簡便ノ方法ヲ取ラサル可カラヌ法律ハ乃チ此方法トシテ第十八條ノ規定ヲ爲セリ曰ク

「訴訟關係人ハ裁判所ノ在ノ地ニ住セサルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ届出ツ可シ否ラサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス」

故ニ訴訟ノ現ニ屬スル裁判所々在ノ地ニ住セサル者ハ最初ノ一回ハ自己所
在ノ地ニ於テ送達ヲ受ク可キモ爾後ハ裁判所々在ノ地ニ假住所ヲ選定シテ之
ヲ裁判所ニ届置カテ受ク可カラヌ此義務ヲ盡サ、ル者ハ送達ヲ受クルノ權利ヲ
拋棄シタルモノト看做シ別ニ送達ヲ爲サ、ルモ決シテ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ
許サ、ルコトナラズ

住居所ノ選定ハ訴訟關係人ノ爲メニハ輕カラサル義務ニシテ而カモ前條ノ如
キ制裁ヲ付シアルヲ以テ此義務ハ如何ナル場合如何ナル時期ヨリ生スル乎ヲ
考究スルヲ必要ナリトス

先ツ場合ニ付テ法文ヲ按スルニ裁判所々在ノ地ニ住セサルトキ「下」アリ因テ裁
判所々在ノ地ト否ラサルトハ區別ヲ明ニセサル可カラヌ思フニ裁判所建設ア
ル地ニハ必ス何市何町村ト稱スル大名アリ此大名ヲ同シフスルノ地ハ即チ裁
判所々在ノ地ナリト解スルヲ允當トス若シ其小名即チ字等ニ因テ之ヲ限ラン
カ所在ノ地ト稱スルモノ極メテ狹隘ニ失シ送達上不便ナキニ拘ハラヌ假住所
選定ハ義務ヲ負ハシムルニ至リ法律ノ主旨ニ背反ス可シ例ヘハ東京地方裁判

所在ノ地下箱スルハ東京市内全部ニシテ麹町區及重洲町三丁目ニ限ラサル
 ハ勿論麹町區内ニモ限ラサルモノト解ス可シ此ノ如ク解スルハ場所ニ依リ
 裁判所々在ノ地ハ却テ裁判所管轄ノ地ヨリ廣大ナル結果ト爲ルヲナシトセヌ
 例ハ下谷區裁判所管轄ノ地ハ下谷淺草等ノ數區ニ過キサルニ其所在ノ地ハ
 東京市内全部ト爲ルカ如シ然レモ是レ決シテ異シム可キモノニ非ス訴訟ノ關
 屬スル裁判所ノ大審院ナルト東京控訴院ナルト東京地方裁判所ナルト將タ下
 谷麹町等ノ區裁判所ナルトヲ問ハヌ其訴訟關係人東京市内ニ住スル上ハ送達
 ニ關シ彼此便不便アル可キノ理ナクハナリ
 次ニ時期ニ付テハ法律上明文ヲ欠クモ無論訴訟ニ關係シ若クハ關係セシメラ
 レタル時ニ於テ此義務ヲ盡ヌ可キモノト解セサル可カラヌ即チ各訴訟關係人
 ニ就テ之ヲ言ハ
 第一被告人ハタトモ公訴ノ起リタルヨリ覺知スルモ未タ此義務ヲ負ハヌ召喚
 狀又ハ呼出狀ヲ受ケル等公然ノ手續ニ因リ起訴アリタルヨリ覺知シタル時ニ
 於テ始メテ此義務ヲ生ヌ可シ若シ直チニ拘引又ハ拘留セラレタルハ監獄ニ

就テ送達ヲ爲ヌ可キカ故ニ別ニ假住所ヲ選定セシムルノ必要ナシ但タ爾後釋
 放セラレ又ハ保釋責付ヲ受ケタルハ此義務ヲ盡サハル可カラヌ
 第二民事原告人ハ自ラ進シテ私訴ヲ提起スルモノナレハ其提起ト同時ニ此義
 務ヲ盡ヌヲ要ス其告訴ト共ニ私訴ノ申立ヲ爲スモ未タ公訴ノ起ラサル上ハ必
 シモ假住所ヲ選定スルニ及ハヌ公訴ノ起リタル旨ノ通知ヲ受ケタル時ニ於テ
 其手續ヲ爲ヌヲ以テ足レリトス第三若カ私訴ニ參加スルニ付テモ亦同シ
 訴訟關係人一旦甲裁判所々在ノ地ニ假住所ヲ選定シタルト否トヲ問ハヌ其訴
 訟事件乙裁判所ニ移リタルハ假ヘハ第一審裁判所ノ裁判ニ對シ控訴スル者ア
 リ而シテ控訴裁判所々在ノ地ニ任居ヲ有セサルハ第一審裁判所ヨリ控訴裁判
 所ニ至ル路程ノ猶豫期間内ニ於テ更ニ控訴裁判所々在ノ地ニ假住所ヲ選定セ
 サル可カラヌ
 借假住所ハ元ト送達ヲ受ケル爲メニ選定セシムルモノナレハ尙クモ其假住所
 ニ送達ヲ付ケルノ權利ヲ有スル者ヲ置クニ於テハ本人必シモ此ニ在ルヲ要
 セサルナリ即チ旅店等ヲ以テ假住所ト爲シ其主人等ニ送達ヲ受ケルノ權利ヲ

委任の職に就くは其の職に就くべき者を選任する者怠慢をシテ本人を轉送せしむるも本人ハ裁判所ニ對シテ苦情を訴ふるべし又得たるハ言狀煥々スルニ非ざる可キ也
假住所選定ノ義務ハ訴訟關係人ニ限リ其他ノ者ニ及ハス故ニ告訴人告發人ハ勿論誰人鑑定人ト雖モ假住所ヲ選定スルベシ要セサルナリ

第七章 書類ノ調製

官吏タル者訴訟關係人タルト時タテ其他ノ者タルト時同ハス此法律ニ從ヒ書類ヲ調製スルニ付テハ法律上其ノ一般ノ程式ノ規定ヲ以テ其書類ノ有効無効ニ付テ他日爭論ノ生ズルヲ防止スルヲ要ス第二十條第二十一條ハ即チ之カ爲メニ設ケタルモノナリ
先ツ第二十條ニ於テハ
「官吏公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記シ且テ署名捺印ヲ每葉ニ與印ス可シ若シ官署公署ノ印ヲ用ユルコト能ハザル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ其規定ニ背キタルトキハ其書類ノ効ナカク可シ」
此ノ規定ニ從ヒ

官吏公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スル能ハザルトキハ官吏公吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ
ト規定シ書類ヲ作リタル本人ノ署名捺印ヲ以テ官吏公吏其他ノ者ニ普通ナル程式ト爲シ別ニ官吏公吏ニ付テハ種々ノ程式ヲ設ケタリ
蓋シ書類ノ真正ナルハ本人ノ自ラ之ヲ證明スルヨリ確實ナルモノアラズ而シテ本人ノ證明ハ其自ラ署名捺印スルニ若クモナシ是レ署名捺印ヲ普通ノ程式ト爲シタル所以ナリ然レモ官吏公吏ニ非サル者ハ眼ニ一丁字ナク自ラ署名スルベシ能ハサルモノアル可ク又印ヲ有セサルモノモアル可シ故ニ常人ニ付テハ此程式ノ履行ヲ強エルベシ能ハス乃チ官吏公吏ノ面前ニ於テスル場合ハ官吏公吏代署シ其事由ヲ記載スルヲ以テ足レリトスルモ其面前ニ於テセサル場合ハ立會人ヲシテ代署シ其事由ヲ記載セシム
官吏公吏ノ作ル可キ書類ニハ其所屬官署公署ノ印ヲ捺用セシム是レ其一人ノ資格ニ非スシテ官吏公吏ノ資格ヲ以テ作リタルヲ認證セシメン爲メナリ

而シ其書類ハ公文書タルハ實ニ此程式ノ上ニ存ス然レモ犯所證據
 ノ場合ノ如キハ其印ヲ携帶セサルヲ以テ之ヲ押用スルニ由ナシ故ニ此等ノ場
 合ニ於テハ其事由ヲ記載スルヲ以テ足レトス
 書類ヲ作りタル年月日ハ本人ノ在職中ナルトノ證ト爲ルノミナラス或ハ時效
 中斷ノ證ト爲リ又裁判書ノ如キハ上訴期間起算點ノ證ト爲ル等總テ他ノ事柄
 ニ大關係ヲ有スルヲ以テ必ズ其記載ヲ欠ク可カラズ又其場所ノ如キモ管轄地
 内ニ於テ作りタルカ又處分ヲ爲シタル當時直チニ作りタルカヲ證スル等ノ必
 要ナルヲ以テ是レ亦其記載ヲ欠クコトヲ得ズ又書類ノ紙數ニ葉以上ナルハ其每
 葉ニ契印セシムルハ其書類ノ分割ス可カラサルコトヲ表示シ兼テ他日餘紙ヲ
 其中間ニ挿入シ若クハ其順序ヲ變更シ爲メニ書類ノ効用ヲ薄弱ナラシムルノ
 虞ナク又シシムル爲メナリ所謂契印トハ甲葉ヨリ乙葉ニ懸ケ乙葉ヨリ丙葉
 ニ懸ケ一々其綴合シタル部分ニ押印スルヲ謂フ
 官廳公文書非サル者ハ作ル可キ書類ニ付テハ年月日場所ヲ記載シ每葉ニ契印
 スルヲ要スルハ明文ナシ然レモ年月日ノ如キハ其書類ヲ作り者ノ權利ニ關係

ヲ有スル場合抄カラス例ハ上訴申立書ノ如キハ其年月日ノ記載ニ依テ法定
 ノ期間内ニ申立ヲ爲シタリヤ否ヤヲ判知ス可キモ若シ其記載ヲ闕クハ期間
 内ナリヤ將タ期間經過後ナリヤ分明ナラサルカ爲メ遂ニ申立ノ效ヲ生セサル
 コトアラン故ニ明文ナキモ此ノ如キ場合ニ付テハ必ズ其記載ヲ闕ク可カラズ
 借法律ハ官吏公文書カ前述ノ程式ニ從ハスシテ書類ヲ作りタルハ制裁トシテ
 書類ノ全体ヲ無効ナリト爲セリ是レ太甚タ嚴ニ過クルカ如シト雖モ畢竟右ノ
 程式ハ書類ノ一分ニ關セシテ其全部ニ關スルモノナレハ其一分ヲ有效トシ
 他ノ一分ヲ無効トスル等一書類ニ就テ分割スルコト能ハサルニ由ル
 官吏公文書ニ非サル者其書類ニ署名捺印セサルハ之ヲ無効ト爲ス可キ乎法律
 ハ此點ニ付キ何等ノ制裁ヲモ規定セズ然レモ是レ其書類ヲ有效ナリトスルノ
 意ニ非サル可シ元來署名捺印ナキモノハ何人カ之ヲ作り何人カ其責ニ任ス可
 キ乎ヲ知ルコト能ハサルモノナレハ之ヲ反古紙ト看做スノ外ナク其無効ナルコ
 トハ明言スルニ及ハサルヲ以テ法律ハ默々ニ附シタルモノナル可シ
 次ニ第二十一條ヲ以テ

官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ原本正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ
 文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス
 可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字体ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ
 此規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ効ナカル可シ
 一規定シ書類中幾分ノ文字ヲ變更増減スルニ付テノ程式ヲ示シタリ蓋シ官吏
 卜常人トテ問ハス書類ヲ作ルニ付キ或ハ書損ヲ爲シ或ハ誤脱行字アルヲ免カ
 レヌ此等ノ場合ニ於テ一々改メテ書類ヲ作ラシメン乎徒ニ時間ヲ費シ手數ヲ
 煩ハスノ不便アリ左リトテ隨意ニ増減變更スルヲ許サシカ詐僞行ハレ易ク
 隨テ書類ノ信用ヲ薄フスルニ至ラン是レ此規定ノ必用ナル所以ナリ
 法律ハ文字ノ改竄ヲ嚴禁セリ改竄トハ即チ描改ニシテ今之ヲ許スルハ其文字
 ノ本体不分明ト爲リ如何ナル文字ヲ如何ナル文字ニ改メタルカヲ鑑別シ難キ
 ニ至ラン因テ書損又ハ衍字ニ係ル分ハ之ヲ削除シ誤脱シタルルハ挿入ス可ク
 決シテ甲字ヲ乙字ニ描改スルヲ許サハルナリ而シテ文字ヲ挿入セントスルニ
 其文字數多ニシテ甲乙二行間ニ之ヲ挿入スル餘地ナキルハ欄外ニ記入ス可キ

モノトス總テ文字ヲ挿入削除シ又ハ欄外ニ記入シタルルハ其本人ノ手ニ出テ
 タルヲ證スル爲メ本人其部分ニ認印スルヲ要ス又削除ノ場合ニ於テハ讀得
 ヘキ様根原ノ字体ヲ存シ置キ尙ホ且ツ其數ヲ記載スルヲ要ス根元ノ字体ヲ存
 セシムルハ之ヲ全ク塗抹スルルハ原字幾許アリタリヤ詳ナラス隨テ詐僞ノ行
 ハルヲ防カンカ爲メニス其數ヲ記載セシムルモ亦本人カ朱線若クハ墨線ヲ
 施シ僅ニ一二字ヲ削除シタルニ他人其線ヲ引キ延ハシ以テ他ノ文字マテモ削
 除シタルカ如ク裝フノ詐僞ヲ防カンカ爲メニシタルモノナリ書入及ヒ欄外ノ記
 入ニ付テハ法律ハ其字數ヲ記載スルヲ命セサルモ是レ亦他人カ文字ヲ追補
 スルノ恐レアリ故ニ又文字ヲ記載スルヲ相當トス
 文字ノ増減變更其程式ニ背クルハ止タ其増減變更ノ部分ヲ無効トシ書類全体
 ヲ無効トセス是レ不法ノ點ハ一分ニ過キサルト以テナリ然レモ其増減變更ノ
 部分ニシテ書類中最モ必要ナル事項ニ關スルルハ一分ノ無効延テ全部ノ無効
 ヲ來タスナシトセス例ヘハ判決主文ニ重禁錮ノ三字ト年ニ處スノ四字ノ間
 ニ一字アリテ全ク塗抹シアル場合ノ如キ其原字ハ一ナリシ乎將タ二三、四又ハ

五六ノ字ナリシ乎知ル可カラヌ面カモ此文字ハ判文中最モ必要ナルモノニシ
テ之ナケレハ刑期ヲ定ムルコト得ヘカラス因テ判決全部ヲ無効トセサル可カ
ラヌ

第八章 法律及フ所ノ區域

本章ハ便宜上之ヲ三節ニ分テ法律及フ所ノ時、法律及フ所ノ人、法律及フ所ノ地
如何ヲ考究ス可シ

第一節 法律及フ所ノ時

此法律ハ刑法ヲ實地ニ運用セシムルヲ以テ其主旨ト爲スモノナレハ此法律及
フ所ノ時ハ即チ刑法及フ所ノ時ト同一ナル可キカ如シ然ルニ刑法第三條ニ「法
律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスコトヲ得ヌ」トアルニ拘ハラヌ此法律ハ第二十
二條ヲ以テ

「此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス」
ト明言シ全ク刑法ト反對ノ規定ヲ爲シタルハ果シテ如何ナル理由ニ出ラタル

乎是レ蓋シ此二法律ノ性質自ラ然ラサルヲ得サルモノアルニ由ラスンハアラ
ヌ

蓋シ刑法ハ主法ナリ根本法ナリ如何ナル所爲ヲ罪トシ如何ナル刑ヲ以テ之ヲ
罰ヌ可キ乎ハ實ニ此法律ノ定ムル所ニ係ル而シテ罪ト云ヒ刑ト云ヒ其ニ將來ニ
向テ定ム可キモノニシテ既往ノ所爲ヲ罪トシ之ニ刑ヲ科スルカ如キハ條理上
決シテ許容ヌ可キモノニ非ス若シ此法律ヲシテ既往ニ溯ルノ效力ヲ有セシメ
シカ昨日正當ニ行ヒタル所爲モ今日ハ罪ト爲リ刑罰ノ制裁ヲ受クルニ至ル事
態此ノ如クナランニハ人々其進退ニ窮シ行爲不行爲一々其撰擇ニ迷ハサルヲ
得ヌ是レ社會ノ安寧ヲ保テ其發達ヲ謀ル所以ニ非サルナリ故ニ法律豫メ正條
ヲ設ケテ罪ト刑トヲ定ムルニ非サレハ何等ノ行爲ト雖モ之ヲ罰セサルコトシ
行爲不行爲一ニ各人ノ撰擇ニ任セ將來ノ法律ヲ以テ之ヲ制裁セサルコト爲シ
タリ又一旦法律ヲ以テ罪ヲ定メタル場合ト雖モ其刑ヲ重クスル將來ノ法律ハ
其効力ヲ既往ニ及ホスコトヲ得セシメヌ是レ舊法ノ刑輕カリシカ故ニ犯シタル
モ初ヨリ重刑ヲ以テ之ニ臨ミタランニハ犯サヌシテ已ミタルモ亦知ル可カラ

ニ殊ニ其重クシタル部分ハ舊法ノ豫メ定メサル所即チ正條ナキモノナレハ前掲ノ場合ト同シク之ニ對スル制裁ヲ及ホス可キノ條理ナケレハナリ要スルニ刑法ヲ既往ニ及ホスルハ必ズ人ノ既得權即チ其所爲ニ付キ刑罰ヲ受ケヌ又ハ既定ノ刑ヨリ重キ刑ヲ受ケサルノ權換言スレハ新定ノ刑罰ニ對抗スルノ權ヲ害ス可キヲ以テ其頒布以前ノ犯罪ニ及ホスヲ得ヌト定メタルモノナリ此刑事訴訟法ハ助法ナリ手續法ナリ之ヲ既往ニ及ホスモ決シテ人ノ既得權ヲ害スルコトナシ裁判所ノ管轄ニ付テ之ヲ觀ルニ舊法ニ依レハ甲地ノ管轄ニ屬ス可キ事件ヲ新法改メテ乙地ノ管轄ト爲スモ被告人毫モ利害ヲ感スルコトナカル可シ何トナレハ甲地ニ於テ裁判ヲ受ケルモ乙地ニ於テ裁判ヲ受ケルモ其地ノ異ナルカ爲メニ罪ノ有無ニ關係ヲ及ホスノ理ナケレハナリ又訴訟手續ニ付テ之ヲ觀ルモ亦全ク同一ナリ舊法ノ或ル手續ヲ廢止シ又ハ新ニ或ル手續ヲ増設シタリトテ無害ノ者忽チ有罪ニ變スル等ノ事アル可カラヌ況ヤ舊法ノ手續不完全ニシテ事實發見ニ便ナラヌトシテ之ヲ改正スルニ仍ホ其不安全不便ナル舊法ノ手續ニ依ラントスルハ寧ロ被告人ニ害アルモ決シテ其利益ト爲ルコトナ

カル可シ或ハ舊法ノ不完全ナルニ乘シ俾ニ罪責ヲ免カレンコトヲ圖ル者アル可ク乃チ是等ノ者ニ對シテハ新法ヲ及ホスヲ不利トセン然レモ是レ元ト不正ノ希望ニ係ルヲ以テ新法之ヲ遂ケシメサルハ却テ條理ニ適スルモノニシテ之ヲ正當ナル既得權ヲ害スルモノト謂フ可カラス世人動モスレハ新法ニ於テ時効ノ期間ヲ伸長スル場合ニ付テ疑ヲ懷ク者アリト雖モ是レ深ク事理ヲ究メサルニ坐ス要スルニ希望ヲ害スルト既得權ヲ害スルト二者同一ナラサルコト覺ラハ萬疑自ラ氷釋ス可シ然レモ上訴期間ノ改正ニ付テハ一概ニ前論ヲ適用ス可カラス舊法ノ上訴期間短少ニ過タルモノト爲シ更ニ之ヲ伸長シタル場合ニ於テハ固ヨリ新法ニ依ラシム可キモ之ニ反スル場合ニ於テハ特ニ舊法ノ期間ヲ與フルカ又ハ特別ノ期間ヲ定ムルヲ相當トス例ハ控訴ノ期間五日ナレハ此法律ノ規定未タ其申立ヲ取急クニ及ハヌト信シ徒ニ三日ヲ經過シタルニ忽然新法出テ、其期間ヲ二日又ハ三日ト改メ直チニ之ヲ適用セハ訴訟關係人タル者過失ナキニ拘ハラヌ上訴ヲ爲スコトヲ得サルニ至ル可シ蓋シ上訴ハ一ノ權利ナリ左レハ新法ヲ以テ

之ヲ害ス可キニ非ス因テ新舊ニ法交渉ノ事件ニ限リ特別ノ規定ヲ爲スヲ必要トスルナリ

前述ノ理由アルヲ以テ此法律ハ刑法ニ反シ其頒布以前ニ係ル犯罪事件ニ付テモ之ヲ適用スルヲ原則ト爲スモ其頒布以前ニ於テ已ニ當時ノ法律ニ從ヒ或ル手續ヲ爲シタルルハタトモ其手續タル新法ノ規定ト相容レサル所アルモ之ヲ無効ト爲ス可キノ理大ク又實際上其手續ヲ無効トシ更ニ新法ノ手續ヲ爲スノ必要ナシ例ヘハ舊法ニ於テ豫審ヲ必要トシタルニ新法ハ一切豫審ヲ行ハサルトト故メタリトセシニ已ニ舊法ニ從ヒ行ヒタル豫審ノ處分ヲ無効ナリトスルルハ當ニ訴訟關係人各自ノ利益ト爲ル可キ證據ヲ失フノミナラス證人鑑定人ノ如キ更ニ召喚セラル、等ノ煩勞ヲ免カレヌ是レ前掲法條第二項ヲ以テ舊法ニ背カサル以前ノ手續其效アリト明言シタル所以ナリ
然レモ舊法ノ手續ヨリ直チニ新法ノ手續ニ移ルコト能ハサル場合ニ於テハ勢ヒ舊法ノ手續ヲ無効トシ更ニ新法ノ手續ヲ行ハサル可カラヌ例ヘハ管轄裁判所指定ノ申請ノ如キ此法律ニ於テハ書類ニ依リ裁判ヲ爲スノ規定第三十ナニ新

三四〇

法出テ、口頭辯論ヲ必要ナリトシタルルハ已ニ書類ノ取調ヲ爲シタルニ拘ハラス一切舊手續ヲ無効トシ更ニ口頭辯論ノ新手續ヲ行ハサルヲ得サルノ類是ナリ

第二節 法律及フ所ノ人

此法律ハ刑法ヲ運用スルノ手續法ニシテ刑法ト同シク内國公法ノ一部タリ故ニ内國ニ居住スル者ニ對シテハ之カ規定ヲ及ホス可キヲ通例トス然レモ此點ニ付テ二三ノ例外アリ左ニ之ヲ説示セン

天皇ハ神聖ニシテ侵ス可カラヌ是レ帝國憲法第三條ノ明言スル所ニシテ假令此明文ナキモ理ノ當ニ然ルヘキ所ナリトス左レハ天皇ニ於テ如何ナル所爲アラセラル、モ決シテ刑法ヲ及ホシ得ヘキニ非ス隨テ此刑事訴訟法ヲモ及ホスコトヲ得サルハ言ヲ竣タヌ

帝國憲法第五十二條ニ依レハ帝國議會ノ議員ハ議會ニ於ケル意見及ヒ表決ニ付テハ院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ左レハ其言論ノ誹毀侮辱等ニ涉ルコトアルモ刑法上ノ犯罪トシテ之ヲ處罰スルコトヲ得ス隨テ其所爲ヲ犯罪トシ此刑事訴訟

法ヲ之ニ及ハズト得ザルナリ
 刑法第四條ニ曰ク「此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ論ズ可キ者ニ適用スル
 一ヲ得ズ」蓋シ陸海軍ハ最モ紀律ノ嚴肅ナルヲ要スルヲ以テ各特別ナル刑法
 ノ設アリ故ニ普通刑法ヲ之ニ適用セサルモノト爲シタリ已ニ普通刑法ヲ適用
 セス之カ手續法タル此刑事訴訟法ヲモ適用ス可カラサルハ當然ノ事トス乃チ
 此法律第二十三條ヲ以テ此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ
 適用スル一ヲ得ズト規定シタリ
 所謂陸海軍ノ法律ヲ以テ處分ス可キ者トハ陸海軍軍法會議ノ管轄ニ屬スル
 者はナリ其種類ハ左ノ如シ
 第一、陸海軍人此名稱中ニハ將校下士卒ハ勿論陸海軍出任ノ文官陸海軍ニ從事
 スル軍屬及ヒ陸海軍所屬ノ諸生徒ヲ包含ス
 第二、歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ニシテ召集中ニ係ル者
 第三、俘虜降人
 第四、軍人ニ非スト雖モ陸戰合圍ノ地ニ於テ陸海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者

此他軍中若クハ陸戰合圍ノ地ニ於テ專任判士ヲ以テ構成シタル軍法會議ハ常
 人ノ犯シタル普通ノ罪ヲモ管轄スル一ヲ得ヘシ
 以上ハ陸海軍治罪法ノ規定スル所ニシテ又明治十八年第十二號布告第三條ニ
 依レハ敵前軍中陸戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ
 犯シタル常人ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スル一ヲ許セリ
 故ニ軍人ハ勿論常人ト雖モ上ニ掲ケタル場合ニ於テハ陸海軍ノ法律ニ依テ處
 分セラル可キヲ以テ此刑事訴訟法ヲ其犯罪事件ニ及ボス一ヲ得ザルナリ
 然レモ常人軍人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル場合ニ付テハ明治十七年第十二號布
 告ノ規定アリ該規定ニ依レハ普通裁判所ニ於テ其犯ヲ逮捕シタルルハ一應其
 被告タル軍人ヲ審問シタル上證據書類ト共ニ之ヲ其被告ノ所屬廳又ハ陸海軍
 檢察官ニ送致ス可キモノトス乃チ此場合ニ於テハ逮捕審問ノ手續ニ限リ此法
 律ノ規定ヲ軍人ニモ及ボス可シ之ヲ惟一ノ例外トス
 要スルニ天皇ハ主權者ニシテ其裁可公布シ給ヘル法律ノ羈絆ヲ受ケサセラル
 可キ者ニ非サルヲ以テ此法律ニ規定シタル一切ノ事項ハ如何ナル場合ト雖モ

決シテ之ニ及ホヌコトヲ許サス之ニ反シ帝國議會ノ議員ハ單ニ其議會ニ於ケル
 言論ニ付キ罪責ヲ負ハサルノミ其他ノ犯罪ニ付テハ固ヨリ普通ノ人ト異ナル
 コナキヲ以テ被告人トシテ此法律ヲ之ニ及ホヌコトヲ得ヘシ加之此法律中普通
 ノ人ニ對スル處分即チ證人鑑定人ト爲シ又ハ其家宅ヲ搜索シ物件ヲ差押フル
 等ノ處分ニ付テ規定シタル所ハ悉ク之ニ及ホヌ可シ此末段ノ點ハ彼ノ陸海軍
 ノ法律ヲ以テ處分セラルル可キ者ニ付テモ亦同一ナリ但議員ノ逮捕ニ付テハ帝
 國憲法第五十三條ニ兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關ル罪ヲ除ク外
 會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セラルルコトナシトアルニ依リ例外ノ場合ノ
 外ハ直チニ此法律ニ從テ逮捕スルコトヲ得サルハ言ヲ竣タス
 以上ハ内國公法ニ就テ此法律及フ所ノ人如何ヲ講究シタルモノナリ今ヤ更ニ
 眼ヲ轉シテ國際公法ノ規定如何ヲ觀察センニ外國ノ使臣即チ外交官ハ其名稱
 ノ如何ニ拘ハラス駐在國ノ裁判權ニ服從セサルヲ通則トス故ニ帝國駐在ノ外
 國使臣ニシテ帝國內ニ於テ罪ヲ犯スコトアルモ此法律ニ依テ之ヲ處分スルコトヲ
 得ス管ニ其犯罪ニ付テ處分スルコトヲ得サルノミナラス家宅搜索物件差押等普

通ノ人ニ對スル處分モ亦之ニ及ホヌコトヲ得サルモノトス乃チ外國ノ使臣ハ特
 約ヲ用キス當然治外法權ノ下ニ立ツ者ナリ
 今日外交上ノ慣例ニ依レハ獨リ外國ノ使臣ノミナラス其隨行員及ヒ家族ニ至
 ルマテ一體ニ治外法權ノ下ニ立ツ者ト爲ス故ニ使臣ト同一ノ取扱ヲ爲サハル
 可カラヌ
 又軍艦ハ其所在ノ如何ヲ問ハス獨リ其本國ノ法權ニ服シ敢テ他國ノ支配ヲ受
 ケサルヲ通義トス故ニ外國ノ軍艦帝國ノ領海内ニ碇泊中其乘組員罪ヲ犯スコ
 トアルモ我法律ヲ之ニ及ホヌコトヲ得ス前ニ例示シタル如キ普通ノ人ニ對スル處
 分ニ付テモ亦同シ
 右ノ外彼我ノ條約ヲ以テ治外法權ヲ認メタル外國ノ臣民ニ付テモ亦我法律ヲ
 以テ之ニ臨ムコトヲ得ヌ
 然ラハ則チ彼ノ治外法權ノ下ニ立ツ者ニ對シテハ一切此法律ノ規定ヲ及ホヌ
 コト能ハサル乎否必シモ然ラヌ家宅搜索物件差押等ノ處分ハ彼ノ承諾アレハ此
 法律ニ從ヒ之ヲ行フモ妨ナシ又能動ノ所爲即チ告訴告發ヲ爲シ私訴ヲ提起ス

ル等彼ヨリ進シテ行フ所ノモノニ付テハ必ズ此法律ノ規定ニ從ハシム可シ彼
若シ之ニ從フコトヲ拒ムルハ我亦其所爲ヲ否認シ之ヲ排斥シテ可ナリ

第三節、法律及フ所ノ地

此法律ハ帝國裁判權ノ及フ所ノ土地ニ及フモノナリ即チ地理學上ノ一邦國タ
ル日本ハ勿論其領海其軍艦其軍隊ノ占領スル地及ヒ其治外法權ヲ有スル地ニ
及フ可シ

故ニ日本内地ニ居住スル者ハ勿論其領海即チ港灣内内海及ヒ沿岸海上ニ或ル
部分内ニ碇泊スル船舶ノ乗組員ハ内國人タルト外國人タルトヲ問ハヌ又被告
人タルト否トニ論ナク總テ此法律ニ從テ一切ノ處分ヲ受ケサル可カラヌ又動
産不動産ニ付テモ其所有主ノ何人タルト將タ其何レノ地ニ住スルトヲ問ハヌ
苟モ日本内地ニ在ルモノハ此法律ニ規定シタル處分即チ搜索差押等ノ處分
免カレ、コトヲ得ヌ但前節ニ掲ケタル外國使臣以下治外法權ノ下ニ立ツ者及ヒ
其者ノ居住スル場所并ニ其現有スル財産ニ付テハ此法律ヲ及ホスノ限リニ在
ラス

茲ニ注意ヲ要スル一事アリ外國公使館等ニ侵入シ搜索スルコトヲ得サルハ右ニ
説ケル如クナルモ是レ其土地ヲ以テ外國ノ土地ト看做スカ爲メニ非ス畢竟其
居住人ノ身体ヲ侵ス可カラサルノ結果タルニ過キササルノミ其土地ハ依然トシ
テ帝國ノ所領タリ左レハ其土地内ニ於ケル内地人ノ犯罪トシテ之ヲ處分ス可
キハ言フ埃タヌ

我軍艦及ヒ我軍隊ノ占領スル場所ニ於テハ我主權ノ行ハル、コト固ヨリ論ナキ
モ訴訟及ヒ裁判ニ關シテハ陸海軍ノ法律ノミ常ニ其適用ヲ見ル可ク此普通法
タル刑事訴訟法ハ殆ト是等ノ場所ニ當行セラル、コトナカル可シ
外國ノ土地ニハ其國ノ主權行ハル、コト以テ我法律ヲ及ホスコト能ハサルモ我國
ニ於テ治外法權ヲ有スル土地ニ付テハ彼國ノ主權ヲ侵害セサル限ハ我法律ハ
及ホスコトヲ得ヘシ清國及ヒ朝鮮國ニ對シテハ我カ居留人民ハ治外法權ノ下ニ
立ツヲ以テ其犯罪ハ一ニ我法律ニ從テ處分ス乃チ居留人民ニシテ罪ヲ犯スル
ハ我當該官吏ニ於テ之ヲ逮捕シ審判スルハ勿論居留人民ノ家宅ヲ搜索シ其財
物ヲ差押ヘ又證人鑑定人トシテ之ヲ召喚スル等總テ内地ニ於ケルト同一ノ處

分ヲ爲スヲ得ヘシ然レモ彼國人及ヒ彼國居留ノ外國人ニ對シテハ我法律ヲ及ホスヲ得ヌ彼國若クハ他國ノ主權ヲ侵害スレハナリ

第九章 親屬ノ意義

第四十條ニ依レハ判事ハ自身又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルルハ其職務ノ執行ヨリ除外セラレ若シ親屬ノ關係アルニ拘ハラス裁判ニ干與スルルハ其裁判ハ即チ法律ニ違背スルモノナルヲ以テ無効ニ歸スルヲ免カレヌ又第百二十三條ニ依レハ民事原告人及ヒ被告人ノ親屬ハ證人ト爲ルヲ得ヌ故ニ若シ之ヲ證人トシ其證言ニ依テ裁判ヲ爲サンカ此裁判モ亦無効ト爲ルヲ免カレ難シ此他第百四條第二項第百五十九條第二百二十七條第二項第三百二條第五號等ニ於テ特ニ親屬ニ付キ規定スル所ノモノアリ左レハ法律ニ於テ親屬ト稱スルハ如何ナル者ナル乎ヲ一定スルヲ必要トス若シ之ヲ一定セザルルハ解釋區々ニ涉リ毎ニ紛爭ヲ生スルノ恐アリ是ヲ以テ第二十四條ハ

「此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定ニ從フ」

刑 事 法 律

ト明言シ以テ刑法ノ親屬例ヨリ其儘此法律ニ適用スルヲト爲シタリ今刑法ノ規定ヲ觀ルニ

「第百十四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

- 一 祖父母父母夫妻
- 二 子孫及ヒ其配偶者
- 三 兄弟姊妹及ヒ其配偶者
- 四 兄弟姊妹ノ子及ヒ其配偶者
- 五 父母ノ兄弟姊妹及ヒ其配偶者
- 六 父母ノ兄弟姊妹ノ子
- 七 配偶者ノ祖父母父母
- 八 配偶者ノ兄弟姊妹及ヒ其配偶者
- 九 配偶者ノ兄弟姊妹ノ子
- 十 配偶者ノ父母ノ兄弟姊妹

第百十五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼

父母嫡父母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾孫玄孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異
父異母ノ兄弟姉妹同シ

養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

トアリ故ニ直系ニ於テハ上高祖父母ノ尊屬親ヨリ下玄孫ノ卑屬親ニ至ルマテ
傍系ニ於テハ兄弟姉妹ノ近親ヨリ從兄弟姉妹ノ遠親ニ至ルマテ又姻屬ニ付テ
ハ子孫ノ配偶者ヨリ伯叔父母ノ配偶者ニ至ルマテ及ヒ配偶者ノ高祖父母ヨリ
其伯叔父母ノ傍系親ニ至ルマテ又此法律上ノ親屬トシ其他ハ民法上親屬又ハ
姻屬ノ關係アルモ之ヲ親屬ト看做スコトナシ是レ其親等ノ遠サカルニ從ヒ相互
ノ情誼自ラ輕微ト爲リ敢テ他人ト異ナラサルニ至ルカ故ニ刑法上罪責免脱等
ノ原由同註第七十五條ト爲スニ足ラスト認メタルニ由ル
此刑事訴訟法ニ於ケルモ亦然リ假令判事又ハ證人ニシテ被告人ト再從兄弟姉
妹タル等種メテ疎遠ナル血統ノ關係アルモ相互ノ間情交自ラ薄カル可キヲ以
テ其罪ヲ曲庇スル等ノ虞殆ト之ナシ隨テ之ヲ其職務ヨリ除斥シ又ハ其證言ヲ
捨ルノ必要アルヲ見ス故ニ刑法ノ例ニ倣ヒ親屬ト稱スル者ノ區域ヲ陝隘ニセ

第二編 裁判所

裁判所ノ構成及ヒ權限ハ裁判所構成法ニ詳細ナル規定アリ今其概要ヲ說示シ
併セテ刑事訴訟ニ關係スル他ノ官吏即チ檢事裁判所書記司法警察官及ヒ執行
官吏ノ事ニ付キ一言ヲ費ス所アラントス

普通刑事ノ裁判所ヲ別テ四種ト爲ス區裁判所地方裁判所控訴院及ヒ大審院是
ナリ

第一區裁判所 此裁判所ハ最下級ノ裁判所ニシテ單獨判事ニテ裁判ヲ爲ス
其權限ハ左ノ事件ニ付キ第一審ノ裁判ヲ與フルニ在リ

(イ) 違警罪

(ロ) 本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單
ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪

(ハ) 刑法第二編第一章ヲ除キ其他ノ輕罪ニシテ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加
シ若クハ附加セサル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其

情(ロ)ニ擧ケタル刑ヨリ重キ刑ニ處スルヲ要セスト認メ地方裁判所
若キハ其支部ノ檢察廳ヨリ區裁判所ニ移付シタル輕罪

右(イ)ニ記載シタル輕罪逮捕罪ニ當然此裁判所ノ權限ニ屬スルモ(ハ)ニ記載シ
タル輕罪ハ檢察ノ移付ニ依リ始メテ其權限ニ屬ス可シ即チ檢察ノ見込如何ニ
依リ或ハ此裁判所ニ於テ裁判ヲ爲シ或ハ地方裁判所ニ於テ裁判ヲ爲ス等權限
不定ノ嫌ナキニ非ス然レモ其本性質トシテハ地方裁判所ノ權限ニ屬スルモノ
トス唯檢察ノ移付アリタル場合ニ限り便宜上變則トシテ此裁判所之カ裁判ヲ
爲スニ過キサルノミ

右ノ如ク(ハ)ニ記載シタル事件ハ固ト便宜上其權限ヲ此裁判所ニ屬シタルモノ
ナルヲ以テ實際際際裁判所ニ裁判セシムルヲ不便ナリトスル場合ニ於テハ檢
事ハ其犯罪ノ情狀如何ニ拘ハラヌ此裁判所ニ移付スルヲナキヲ要ス例ヘハ小
田原ノ犯罪ニシテ其被告人横濱ニ住居スルモハ横濱地方裁判所檢察ハ之ヲ直
チニ其裁判所ニ訴テ可シ殊更ニ小田原區裁判所ニ移付スルニ於テハ被告人ヲ
小田原ニ護送スルカ又ハ同地ニ之ヲ召喚スル爲メ時日ト手續トヲ要スルノミ

ナラス同區裁判所ノ裁判ニ對シ控訴スル者アルハ再ヒ之ヲ横濱ニ護送シ若
クハ召喚セサル可カラヌ此ノ如クナレハ事件ノ移付ハ寸益ナクシテ大不利アリ
決シテ之ヲ苟クモスルヲナカル可シ前例小田原ノ犯罪ニシテ被告人亦小田
原ニ在ル場合ノ如キハ即チ同地區裁判所ニ裁判セシムルヲ便利ナリトスルカ
故ニ此ノ如キ場合ニ限り移付ノ手續ヲ爲ス可キモノトス

第二、地方裁判所 此裁判所ハ合議裁判所ノ最下級ニ位スルモノニシテ其中
ニ一若クハ二以上ノ刑事部ヲ置キ區裁判所ノ權限及ヒ大審院ノ特別權限ニ屬
セサル重罪輕罪ニ付キ第一審ノ裁判ヲ爲シ又區裁判所ノ決定ニ對スル抗告ヲ
裁判スルヲ以テ其權限ト爲ス

第三、控訴院 此裁判所ハ中級ノ合議裁判所ニシテ一若クハ二以上ノ刑事部
ヲ其中ニ置ク其權限ハ地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴及ヒ其決定ニ對
スル抗告ヲ裁判スルニ在リ是レ控訴院ノ名稱アル所以ナリ然レモ右ノ外此裁
判所ハ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付キ地方裁判所ノ爲シタル判決ニ對ス
ル上告ヲモ裁判スルカ故ニ此場合ニ於テハ上告裁判所ト爲ル可ク隨テ名實相

適セザルノ結果ヲ生ス可シ當ニ此不都合アルノミナラス大審院ノ外數箇ノ上告裁判所現今ハ七箇所アルニ依リ彼此ノ判決區々ニ出テ法律ノ解釋其統一ヲ得難ク甚シキハ控訴院カ上告ニ付キ法律ノ意ハ云々ナリト解釋シ以テ下級裁判所ヲ羈束スルニ拘ハラヌ他ノ控訴ニ付テ同一ノ解釋ヲ取リタル判決ハ大審院ノ爲メニ破毀セラル、ノ奇觀ヲ呈スルニ至ラン余ハ此裁判所ニ上告ヲ判決スルノ權ヲ與ヘタル立法者ノ意ハ果シテ何レニ在ルカヲ知ルコト能ハス

第四大審院 此裁判所ハ最上級ノ合議裁判所ニシテ亦一若クハ二以上ノ刑事部ヲ其中ニ置ク其權限ハ控訴院ノ第二審判決ニ對スル上告及ヒ其決定ニ對スル抗告ヲ裁判シ又特別權限トシテ刑法第一編第一章第二章ニ記載シタル重罪及ヒ皇族ノ犯シタル禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ第一審トシテ終審トシテ裁判スルニ在リ

以上裁判所構成法ニ規定シタル裁判所ノ外尙ホ裁判權ヲ行フ官署アリ左ノ如シ

第一東京地方裁判所管内小笠原島及ヒ伊豆七島ニ於テハ區裁判所ノ裁判權ニ

屬スル事件ハ裁判所設置マテ島吏之ヲ取扱ヒ而シテ其訴訟手續ハ便宜之ヲ取扱フコトヲ許ス 裁判所構成法施行條例第十二條

第二樺戶空知釧路ノ三集治監ノ囚人罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ルモノ、裁判ハ司獄官吏之ヲ行フ 同條例第十四條、明治十八年第四十二號布告

第三清國及ヒ朝鮮國ニ於テハ駐在領事ハ輕罪違警罪ノ裁判ヲ爲シ及ヒ重罪ノ豫審ヲ行フ其重罪ノ公判ハ長崎地方裁判所ニ於テ之ヲ開ク 同條例第十五條、明治二十一年勅令第一七號

右ノ如ク普通ノ犯罪ヲ裁判ス可キ官廳ヲ設置シタルモ元來裁判官廳ハ自ラ事件ヲ取テ裁判ス可キモノニ非サルヲ以テ別ニ其官廳ニ向テ訴訟ヲ提起シ且ツ臨時公益上必要ナル處分ヲ請求スル所ノ官吏ヲ置カサル可カラズ是レ各裁判所ニ檢事局ヲ附置シ檢事ヲシテ請求處分ヲ擔當セシムル所以ナリ

檢事ノ職ハ大審院ノ檢事總長、檢事、控訴院ノ檢事長、檢事、地方裁判所ノ檢事正、檢事及ヒ區裁判所ノ檢事ノ數者ニ區別シ各、其附置セラレタル裁判所ノ權限ニ屬スル事件ニ付キ請求ノ職務ヲ執行セシム而シテ區裁判所檢事ノ職務ニ限リ其裁

判所管轄内ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官ニ於テ之ヲ行フコトヲ得ヘク又司法大臣ハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村長ニ檢事代理ヲ命シ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得ルモノトス

三五六

清國及ヒ朝鮮國駐在領事裁判所ニ付テハ副領事警察官若クハ書記生ヲシテ檢事ノ職務ヲ行ハシムル旨明治二十一年勅令第七十一號第二條ニ明文アルモ小笠原島伊豆七島及ヒ樺戸空知釧路ノ藥治監ニ於ケル裁判ニ付テハ何人ヲシテ檢事ノ職務ヲ行ハシムル可キ乎法律命令ノ之ヲ規定シタルモノナシ尤モ小笠原島ニ付テハ明治二十二年勅令第三十五號ニ島廳官吏ヲシテ檢事ノ職務ヲ行ハシムル旨規定シアリタルモ裁判所構成法施行條例ハ復タ此ノ如キノ明文ヲ置カス故ニ今日ハ伊豆七島等ニ於ケルト同シク此點不分明ナルニ至レリ左レハ是等ノ地ニ於テハ檢事ノ職務ヲ行フ者ナクシテ可ナル乎島吏及ヒ司獄官吏ハ自ラ事件ヲ取テ裁判スルコトヲ得ヘキ乎余ハ其島吏及ヒ司獄官吏ノ中ニ就キ檢事ノ職務ヲ行フ可キ者ヲ定メ之ヲシテ訴求處分ヲ行ハシムル方穩當ナリト信ス然レハ是レ固ク法律命令ノ規定スル所ニ非サルヲ以テ島吏及ヒ司獄官吏カ自

ラ事件ヲ取テ裁判シ又其裁判ニ付キ檢事ノ職務ヲ行フ可キ者ノ立會ナキモ之ヲ違法ノ裁判ト爲スコトヲ得サルヤ勿論ナリトス
右例外ノ場合ヲ除ク外檢事公訴ヲ提起シ而シテ判事之ヲ裁判スルニ於テハ以テ刑事訴訟ノ目的ヲ達ス可ク因テ裁判所中其他ノ官吏ヲ置クノ必要ナキカ如シ然ルニ法律ハ各裁判所ニ裁判所書記ヲ置キ而カモ之ヲ裁判所構成ニ必要ナル職員ト爲セリ
裁判所書記ノ職務中往復會計其他ノ庶務ハ裁判ニ關係ヲ有セサルヲ以テ茲ニ之ヲ説クコトヲ止メ其職務ノ一タル記録殊ニ訴訟記録ヲ作ルコトニ付テ一言ス可シ
凡ソ訴訟手續ニ付テハ其豫審ニ關スルト公判ニ關スルトヲ問ハス一々之カ記録ヲ作ラサル可カラス豫審ニ於テ被告人及ヒ證人ヲ訊問スルモ其問答ノ次第ヲ記録ニ留メ置カサルルハ他日其被告人ノ陳述證人ノ證言ヲ證據ト爲スニ由ナカラン臨檢搜索等ニ因テ發見シタル犯罪ノ情況等ニ付テモ亦同シ是レ第九十二條ニ於テ豫審判事臨檢搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁

判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ
 云々ト規定シタル所以ナリ
 又公判ニ於テモ其法廷ニ現ハレタル陳述辯論其他百般ノ手續ヲ錄取シ置カサ
 ルルハ他日上訴アリタル場合ニ於テ上訴裁判所ハ是等ノ事ヲ知ルコト能ハス隨
 テ上訴ノ當否ヲ判スルコト能ハサルノ不都合ヲ生セン此他再審ノ訴又ハ特赦ノ
 申立アリタル場合ニ於テモ原訴訟手續ヲ審查スルノ必要アリ故ニ第七十六
 條ヲ以テ公判ハ判事檢察裁判所書記出廷シテ之ヲ爲スモノトス下規定シ又第
 二百八條ヲ以テ裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左ノ事項其他一切ノ訴訟手續
 ヲ記載ス可シ云々ト規定シタル所以ナリ

書記ノ裁判所構成ニ必要ナルハ前述ノ如シト雖モ法律ハ豫審ニ付テ例外ヲ設
 定裁判所外ニ於テ急速ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルハ立會人二名アル
 ヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルハ其監獄ノ官吏一名ヲシテ立會ハ
 シル可シ第九十二條ト規定シ以テ書記ノ立會ナキモ通常人二名ノ立會若クハ監
 獄ノ官吏一名ノ立會ヲレハ則チ足レト爲シタリ是レ必シモ書記ノ立會ヲ要

サトスルハ急速ノ際處分ニ着手スルコト能ハス錄取シ得ヘキ證據モ之ヲ錄取
 セスシテ徒ニ其湮滅スルニ任セ逮捕シ得ヘキ被告人モ之ヲ逮捕モスシテ隨意
 ニ逃走スルコト得セシムル等ノ不都合ヲカサシメンガ爲メニシタルモノナリ
 此例外ノ場合ヲ除クノ外書記ノ立會ナクシテ爲シタル豫審公判ノ處分ハ其ニ
 違法ナルヲ以テ決シテ其効力ヲ生ズルコトナシトス

清國及朝鮮國領事裁判所ニ付テハ前掲勅令第三條ニ書記ノ職務ハ領事館審
 記生若クハ其他ノ館員之ヲ行フノ明文アルモ小笠原島伊豆七島及ヒ樺戶空知
 釧路ノ築港監ニ於ケル裁判ニ付テハ何人カ書記ノ職務ヲ行フ可キ乎ノ規定ナ
 シ左レハ前段檢察ノ職務ニ關シテ說示シタル如ク訴訟記録ヲ作ル者ナキモ違
 法トスルノ限ニ在ラサル乎余ハ若ク信スルコト能ハス何トナレハ右ノ特別裁判
 所ノ裁判ニ對シテ被告ヨリ上訴ヲ爲スコトナシトセス若シ上訴ヲ爲シタル場合
 ニ於テ訴訟記録ノ見ル可キモノナキハ何ニ由テ其上訴ノ當否ヲ判定スルコ
 ト得ヘキ乎故ニ其官署附屬ノ吏員ヲシテ書記ノ職務ヲ執ラシメサル可カラズ
 ト信ス

二六〇
檢事ハ前已ニ述ヘタルカ如ク訴訟處分ヲ擔當スルモノナレハ其公訴ヲ提起スルノ前ニ在テハ殊ニ綿密ナル搜查ヲ遂クルヲ要ス然ルニ檢事ノ員數固ヨリ限リアリ普ク之ヲ全國各地ニ配置スルコトヲ得ヌ是ニ於テ乎其耳目ト爲リ其手足ト爲リ以テ搜查ノ職務ヲ補助スル者アルヲ必要トヌ是レ司法警察官ノ設アル所以ナリ

裁判所構成法第八十四條ニ司法警察官ハ檢事ノ職務上其ノ檢事局管轄區域内ニ於テ發シタル命令及ヒ其檢事ノ上官ノ發シタル命令ニ從テ司法省又ハ檢事局及内務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域内ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ前項ノ命令ヲ受ケ及之ヲ執行スル者ヲ定ムトアリ今此條ニノミ依ルルハ司法警察官ト爲ル可キ者ハ司法省ト内務省又ハ檢事局ト地方官廳ト協議シテ定メタル者ニ限ル可ク又其者ハ必ス行政警察官中ヨリ選擇ス可キモノ、如シ果シテ然ラシカ其員數自然夥多ナルコト能ハスシテ搜查普及ノ目的ヲ達スルコト能ハス因テ本法ニ於テハ特ニ司法省内務省又ハ檢事局地方官廳ノ協議ヲ要セス法律上當然司法警察官トシテ搜查ノ事ニ任ヌ可キ者ヲ定

メタリ七條^四左レハ本法ハ此規定ヲ以テ構成法ヲ無用ニ歸セシメタルノ觀ナキニ非サルモ其意ハ決シテ然ルニ非ス構成法ハ專ラ檢事ニ附屬シ常ニ主トシテ搜查ニ從事ス可キ司法警察官ノ事ヲ定メ本法ハ之ニ異ナリテ本務ノ傍ラ臨時事ニ從テ可キ司法警察官ノ事ヲ定メタルモノニ過キヌ此ニ法並行ハレテ相俾ラサルモノト解セサル可カラヌ

借本法ニ於テ司法警察官ト爲ス者ニ二種アリ一ハ檢事ト同一ノ權ヲ有スル者一ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ク可キ者はナリ

甲種ニ屬スル者ハ東京ニ於テハ警視總監他ノ地方ニ於テハ其行政長官トヌ是等ノ官吏ハ一般行政警察ニ付テハ内務大臣ノ指揮ヲ受クルモ地方行政警察ニ付テハ其長官ト爲ルノ地位ニ立ツモノナレハ假令行政警察ノ力豫防スルコト能ハスシテ犯罪ヲ生シタルニ因リ便宜上直チニ司法處分ニ移ルコトヲ得セシムルモ自ら輕微ナル事件ニ干渉シテ處分ヲ爲ス可キモノニ非ス國事犯兇徒聚衆等一地方ノ安寧秩序ヲ害スル犯罪ニ付テノミ司法警察ノ處分ヲ爲スヲ適當トヌ法律ノ意モ亦蓋シヨ、ニ在リテ存ス

一 警視總監、警視總監補、是等ノ官吏ハ元ト警察事務ノ爲メニ設ケタルモ
 ノ外ニハ行政警察ト共ニ司法警察ノ事ニ任ヌルハ當然ニシテ實際上又最モ便
 宜トナル所ナリ
 二 憲兵將校下士、是等ノ官吏ハ主トシテ軍事警察ノ爲メニ設ケタルモノナ
 ルモ今日ノ法制ニ於テハ前掲ノ官吏ト共ニ行政司法ノ兩警察ニ與ラシム是レ
 亦便宜ヲ計ル所ナルニ外ナク
 以上ノ官吏ハ警察專任ノモノナレバ司法警察ニ付テモ主トシテ其事ニ當ラサ
 ル味カテ
 三 島司
 四 郡長
 島司ハ離島中重要ナル場所ニ置キ郡長ハ一郡若クハ數郡ニ置キ各其地方長官
 ノ次位ニ立テ行政事務ヲ承掌セシム乃チ是等ノ官吏ハ其島内郡内ノ安寧秩序
 ヲ保持ス可キ責任アルモノナレバ安寧秩序ヲ妨害スル犯罪アルニ當リ機敏ノ

處分ヲ爲サシムルヲ相當トス是レ之ヲ司法警察官ト爲シタル所以ナリ
 五 林務官、茲ニ所謂ル林務官トハ總テ林務ニ關スル官吏ヲ指シタルモノニ
 シテ彼ノ官名ナル林務官ノミヲ指シタルモノニ非ヌ而シテ之ヲ司法警察官ト爲
 シタルハ山林ニ關スル犯罪即チ官林盜伐ノ如キモノニ付キ其處分ヲ爲サシム
 ルヲ便利トシ且必要トスルニ由ル故ニ法文ニ依レバ林務官ハ一般ノ犯罪ニ付
 テモ亦司法警察官ト爲リ捜査及ヒ假豫審ノ處分ヲ行フコトヲ得ヘキカ如クナル
 モ右立法ノ精神ヲ酌ミ以テ其處分ヲ爲スハ山林ニ關スル犯罪ニ限ルモノト解
 釋スルヲ相當トス
 六 市町村長、是レ自治市町村ノ吏員ニシテ其職務トスル所ハ恰モ郡長ノ郡
 ニ於ケルト同シク唯大小輕重ノ區別アルノミ乃チ市制第七十四條町村制第六
 十九條ニ於テ是等ノ及吏ハ法律命令ニ從ヒ司法警察補助官タルノ職務ヲ管掌
 スト下定メ以テ其市町村ノ安寧秩序ヲ妨害スル犯罪ニ付キ障礙ノ處分ヲ爲サシ
 ムコトヲ望ミ本法其意ヲ承ケテ茲ニ之ヲ司法警察官ノ中ニ列シタル所以ナリ
 右ノ外官吏及吏ニ非ヌシテ司法警察ノ職務ヲ行フ可キ者アリ船長是ナリ第四

十八條曰「海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ」
 蓋シ海船内ニハ憲法司法警察官ノ乘込居ルモノナキヲ以テ第一現行犯罪アル
 モ急速ニ處分ヲ爲スヤ得ザル等ノ不都合アリ在レハ此不都合ヲ除キ以テ事
 ノ急ニ應ジシメシカ爲メ船長ヲ以テ假シ司法警察官ノ地位ニ立タシム船長ハ
 船内ノ安寧秩序ヲ保持スルノ責任アルモノナリ
 朝鮮國領事館ニハ警部ヲ附置ス故ニ警部ニ於テ專ラ司法警察ノ職務ニ任ス可
 清國領事館ニハ警部ノ設ナシ其他小笠原島伊豆七島及ヒ樺戶空地釧路ノ三
 集治監ニ於ケルモ特ニ警察官ヲ置カズ故ニ是等ノ場所ニ於テハ館員島吏又ハ
 司獄官吏適宜ニ司法警察ノ職務ヲ行フ可キモノトス
 捕獲事及ヒ司法警察官犯罪ヲ捜査シタル上ニテ檢事ヨリ公訴ヲ提起スルヤ裁
 判所ニ之ヲ受ケテ審理ヲ盡シ書記ハ其所分手續ニ付テ記録ヲ作ラザル可カラ
 ス而シテ裁判所ヲ終局ノ裁判ヲ下シ各審級ヲ經若クハ經スシテ其裁判所確定
 スルヤヨ、ニ刑事訴訟ノ手續全ク其終ヲ告ク可シ然レテ刑事訴訟ノ大目的ハ
 其裁判ヲ實地ニ執行スルニ在リ左レハ特ニ執行官吏ヲ設ケ以テ其事ニ任セシ

メザル可カラズ
 執行官吏ハ其執行ス可キ裁判ノ種類ニ從ヒ常ニ同一ナラザルモ毎ニ主トシテ
 其執行ノ事ニ干渉ス可キモノヲ檢事トス裁判所構成法第六條檢事ノ職務ヲ舉
 示シタル中ニ「判決ノ適當ニ執行セラル、ヤヲ監視シ云々」下アリ又本法第三百
 二十條ニ刑ノ執行ハ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ
 受ケタル裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ。罰金科料訴訟費用及ヒ沒
 收物品追徴金ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ。破産又ハ廢棄ス可キ沒收
 物品ハ檢事之ヲ處分ス可シ下アリ左レハ刑ノ執行ハ檢事之ヲ指揮シ之ヲ監視
 ス可シ而シテ實地ニ執行ヲ掌ル者ハ死刑以下自由刑ニ付テハ司獄官吏財産刑
 ニ付テハ執達吏監視ニ付テハ警察官トス刑法附則監視則
 又無罪免訴ノ場合ニ於テ未決勾留ヲ受ケタル被告人ヲ放免スルニハ檢事ヨリ
 監獄ニ指揮シテ其執行ヲ爲サシム可シ
 又裁判所ノ決定命令ニシテ執行スヘキモノハ檢事之カ指揮ヲ爲スヲ相當トス
 令狀ニ付テハ本法第七十六條ニ召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾

引狀、拘留狀ハ、巡査憲兵卒ヲシテ執行セシムルノ明文アリ、即チ執達吏、巡査憲兵卒ハ、實地令狀ヲ執行スルノ職ニ任ズルモノナリトス。以上裁判所及モ裁判事務ニ關係スル官吏及吏ノ組織等ヲ略述シタリ、因テ是ヨリ法律ノ本文ニ移リ、裁判所ノ管轄ニ付キ講究スル所アラントス。

第一章 裁判所ノ管轄

本章ハ便宜ノ爲メ、假ニ之ヲ三節ニ分チ、第一節ニハ法定ノ管轄、第二節ニハ管轄ノ指定、第三節ニハ管轄ノ移轉ヲ説示セン。

第一節 法定ノ管轄

法律ハ裁判所ノ管轄ヲ別テ事物ニ因ル管轄、人ノ身分ニ因ル管轄、土地ニ因ル管轄ノ三トス。事物ニ因ル管轄トハ、犯罪ノ種類ニ關スル管轄ニシテ、本編ノ首ニ辯シタル如ク、速審罪及ヒ二月以下ノ禁錮百圓以下ノ罰金ニ該ル可キ犯罪ハ、區裁判所ノ管轄トシ、此餘ノ輕罪重罪ハ、地方裁判所ノ管轄トシ、又刑法第二編第一章第二章ニ記載シタル重罪ハ、大審院ノ管轄トシタルモノ是ナリ。人ノ身分ニ因ル管轄トハ、禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ罪ニシテ、皇族ノ犯シタルモノハ、大審院ノ管

轄トシタルモノ是ナリ。此ニ種ノ管轄ハ、裁判所構成法ニ之ヲ規定シ、本法ハ土地ニ因ル管轄ヲ規定シタルニ過キス。

第二十五條ニハ

「犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ、裁判所構成法ノ規定ニ從フ

管轄ヲ異ニスル數箇ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時、ハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス」

トアリ。此第一項ニ付テハ、別ニ説示ス可キナシ、但前述ノ如ク、人ノ身分ニ因ル管轄モ亦固ヨリ裁判所構成法ノ規定ニ從フ可キモノナルニ、因リ、法文犯罪ノ種類ノ下及ヒ人ノ身分ノ六字ヲ加フルヲ以テ、立法上其當ヲ得タリト爲ス。尤モ此増補ナキモ、實際上不都合ナキカ、如クナルモ、第二項ノ規定ハ、身分ニ因ル管轄ニ付テモ適用ス可ク之ヲ取除ク可キノ理由ナシ、是レ後ノ立法者ノ爲メニ、一言ヲ附スル所以ナリ。

法律已ニ犯罪ノ種類ニ應シ各、其管轄裁判所ヲ定メタル上ハ、裁判所各、其管轄ヲ恪守シテ、決シテ他人ノ裁判所ノ管轄ヲ侵スヤアル可カラヌ、假令上級ノ裁判所ト

雖モ初メヨリ下級裁判所ノ管轄ニ屬スルコト判然タル事件ニ付テハ之ヲ受理シ
 之ヲ管轄スルノ權ナシトス然ルニ法律ハ此本則ニ付キ例外ヲ設ケ同一ノ被告
 人ニ對シ同時ニ訴アリタル場合ニ限リ下級裁判所管轄ノ事件ヲ上級裁判所管
 轄ノ事件ニ併合シ裁判スルコトヲ許シ否事併合裁判ス可キモノト爲シタリ
 此例外法ハ純粹ナル數罪俱發ノ場合ニ於テノミ適用セラル可シ例ハ氏名詐
 稱ノ罪ト強盜罪ト俱ニ發覺シ而シテ甲罪ニ對シテハ其管轄ナル區裁判所ニ公訴
 起リ乙罪ニ對シテハ其管轄ナル地方裁判所ニ公訴起リタル場合ノ如キ若シ偏
 ニ本則ニ從ハシメンカ同一ノ被告人ニ對シ同時ニ區裁判所ト地方裁判所トニ
 於テ審理ヲ爲スコト能ハサルカ故ニ勢ヒ一方ノ審理ヲ前ニシ其裁判ノ落着スル
 ヲ待テ更ニ他ノ一方ニ於テ審理裁判ヲ爲サ、ルヲ得ス然ルキハ徒ニ手續ト費
 用トヲ増スノミナラス自然裁判ノ延滞ヲ來タシ而カモ結局ハ甲乙二罪ノ中一
 ノ重キ刑ヲ執行スルニ止マル得ル所毫モ之ナクシテ失フ所極テ多シ因テ法律
 ハ此不都合ヲ避ケンカ爲メ其數罪ノ管轄ヲ上級裁判所ニ併合セシメタルナリ
 然レモ上級裁判所カ下級裁判所ノ事件ヲ併合スルハ兩裁判所孰レモ第一審裁

判所トシテ公訴ヲ受ケタル場合ニ限ラサル可カラヌ前例強盜罪ニ付キ已ニ地
 方裁判所ノ裁判アリ其裁判ニ對シ控訴ヲ爲ス者アリテ事件現ニ控訴院ニ繫屬
 スルニ際シ氏名詐稱罪ノ公訴區裁判所ニ起ルモ控訴院ハ此區裁判所ニ繫屬ス
 ル事件ヲ併合スルコトヲ得ス是レ他ナシ控訴院之ヲ併合スルコトヲ得ルトセハ氏
 名詐稱罪ニ付テハ一審ノ裁判ヲ經スシテ直チニ二審ノ裁判ヲ受クルコト爲リ
 法律カ一般ニ事實覆審ノ路ヲ開キタル旨趣ニ反スルニ至レハナリ又區裁判所
 ノ與ヘタル氏名詐稱罪ノ裁判ニ對シ地方裁判所ニ控訴ヲ爲シタル場合ニ於テ
 同裁判所ニ強盜罪ノ公訴起ルキモ亦此二事件ヲ併合スルコトヲ得ス一ハ前裁判
 ニ對スル不服ノ訴ニシテ一ハ全く新ナル訴ナレハ性質上之ヲ併合スルニ由ナ
 キノミナラス強テ之ヲ併合センカ其裁判ハ一回ニ於テハ二審ノ裁判ト爲リ一
 回ニ於テハ一審ノ裁判ト爲ル等柄整相容レサルノ結果ヲ生ス可シ故ニ此例外
 法ハ一審ノ事件ニ限リ適用セラル可キモノト爲サ、ル可カラヌ
 上級裁判所ハ下級裁判所ニ對シテハ第二審ノ裁判所ナルモ事件併合ノ場合ニ
 於テハ下級裁判所管轄ノ事件ニ付テハ一審トシテ裁判ヲ爲ス可ク決シテ二審

トシテ裁判ヲ爲スヨリ得ヌ是レ前ニ述ヘタル如ク覆審ノ路ヲ塞クニ至レハナ
 ヲ且ツ第二百四十四條ニ裁判所地方裁判所ニ於テハ被告事件區裁判所ノ管轄ニ
 屬スルモノト認メタル所ト雖モ第一審ノ判決ヲ爲ス可シ下アリテ彼此其場合
 ヲ異ニスルモ法律ノ意ハ下級裁判所管轄ノ事件ニ付キ直チニ二審ノ裁判ヲ爲
 スコトヲ許ササルニ在ルヤ明瞭ナリトス
 借上級裁判所カ下級裁判所管轄ノ事件ヲ併合スルニ付テハ如何ナル手續ヲ爲
 ス可キ乎法律ハ此點ニ付キ何等ノ規定ヲモ爲サスト雖モ已ニ上級裁判所ニ於
 テ重キ事件ノ公訴起リタルガ爲メ下級裁判所ニ於ケル輕キ事件モ上級裁判所
 ノ管轄ニ歸ス可キモノト爲リタル上ハ即チ下級裁判所ハ其受ケタル輕キ事件
 ニ付テ管轄權ヲ失ヒタルモノト云ハサル可カラズ左レハ下級裁判所ハ右ノ理
 由ヲ以テ或ハ檢事被告人ノ申立ニ因リ或ハ職權ニ因リ管轄ニ非サルノ裁判ヲ
 爲シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可ク檢事ハ之ヲ上級裁判所ノ檢事ニ移シ該檢事ニ
 於テ併合ノ手續ヲ爲ササル可カラズ
 右例外ノ場合ヲ除キ本則トシテハ重罪及ヒ重キ輕罪ハ常ニ地方裁判所ノ管轄

ニ屬シ輕キ輕罪及ヒ違警罪ハ常ニ區裁判所ノ管轄ニ屬スルコト已ニ前ニ説示シ
 タル所ノ如シ然ルニ地方裁判所ト云ヒ區裁判所ト云ヒ其數或ハ數十或ハ數百
 ニ上ルヲ以テ其中ニ就テ特ニ管轄權ヲ有スルモノヲ定メサル可カラズ若シ之
 ヲ定メサルニ於テハ數十數百ノ裁判所互ニ管轄ヲ爭フカ否ラサレハ自己ノ專
 屬ニ非サルヲ口實トシ管轄ヲ否認スルノ不都合ヲ生ス可シ是レ別ニ土地ニ因
 ル管轄ノ規定アル所以ナリ
 第二十六條ハ此管轄ヲ規定シテ曰ク
 「同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及
 ヒ公判ノ管轄ナリトス」
 ト故ニ土地ニ因ル管轄ハ犯罪ノ地ト被告人所在ノ地トノニアルコトヲ知ル可シ
 第一犯罪ノ地ニハ證據物件存在スルコト他ノ地ノ比ニ非ヌ又證人モ多ク存在ス
 可キカ故ニ此地ヲ以テ豫審公判ノ管轄ト爲スハ審理上極メテ便利トスル所ナ
 リ加之此地ニ於テ裁判ヲ爲シ其公衆ノ面前ニ於テ刑罰ヲ言渡サンカ其效用最
 モ著大ナル可シ是レ此地ヲ以テ管轄ト定メタル所以ナリ

然レ是管轄ハ必ス犯罪ノ地ニ限ルモノト定ムルハ實際上種々ノ不便アルヲ免カレヌ若シ犯罪ノ地不分明ナラシカ假令犯罪アリタルコトノ確證アルモ檢事ハ公訴ヲ起スニ由ナク隨テ裁判所モ處分ヲ爲スト能ハス空ク袖手傍觀シテ犯人ヲシテ法網ヲ免カレシムルニ至ル可シ又犯罪ノ地分明ナルニモセヨ必ス其地ニ於テ審判ス可シトスルハ遠ク數十里ノ外ニ遁逃シ若クハ居住スル被告人ヲ召喚シ又ハ護送セシメサル可カラヌ其被告人ノ爲メニ不利益ナルハ勿論官モ亦爲メニ手數ト費用トヲ要スルニ至ル故ニ重大ナル犯罪ニ付テハ格別輕微ナル犯罪ニ付テハ便宜ニ從ヒ處分スルコトヲ得ルノ方法ヲ設ケサル可カラヌ是レ犯罪ノ地ノ外被告人所在ノ地モ亦管轄ナリト爲シタル所以ナリ人或ハ曰ハシ舊治罪法ハ犯罪ノ地ノミヲ以テ管轄ト定メ而シテ犯罪ノ地分明ナラサルハニ限り被告人逮捕ノ地ヲ以テ管轄ト定メタリ蓋シ管轄ノ地數个所アルハ數个ノ裁判所同一事件ニ付キ共ニ訴ヲ受ケ而カモ互ニ其訴ノ他ニ起リタルコトヲ知ラサルヨリ各別ニ裁判ヲ爲シ基シキハ甲裁判所ハ有罪トシ乙裁判所ハ無罪トスル等其裁判相抵觸スルノ不都合アルヲ免カレヌ故ニ管轄ハ何レ

ノ場合ニ於ケルモ之ヲ一个所ニ限リテ畢竟裁判ノ信用ヲ失墜セサシメシカ爲メナリ然ルニ新法ハ管轄ヲ二个所ト爲シ犯罪ノ地ノ裁判所モ被告人所在ノ地ノ裁判所モ等シク管轄權ヲ有シ其間優劣ナシトスルヲ以テ舊立法者カ願慮シタル二个裁判所抵觸ノ不都合ヲ生ヌ可シト此言一應其理アルカ如シ然レ是等ノ不都合ハ實際容易ニ生ヌルモノニ非ス今被告人所在ノ地ニ於テ檢事カ公訴ヲ提起セントスルヤ捜査上ノ必要ヨリ必ス犯罪ノ地ノ檢事ニ照會スル所アル可シ而シテ犯罪ノ地ニ於テ已ニ公訴起リタル場合ハ勿論同地ニ於テ公訴ヲ提起スルヲ便利ナリトスルハ同地ノ檢事ヨリ被告人所在ノ地ノ檢事ニ其旨ヲ回答ヌ可シ然ルハ被告人所在ノ地ニ於テ公訴ノ起ルコトアル可カラヌ假令雙方ノ檢事豫メ照會等ヲ爲サ、ルヨリシテ雙方ニ公訴起リタリトスルモ犯罪ノ地ニハ臨檢ヌ可キ場所訊問ヌ可キ證人又ハ差押フ可キ物件等多クハ存在ヌ可キヲ以テ被告人所在ノ地ノ裁判所ハ是等ノ處分ヲ犯罪ノ地ノ裁判所ニ囑託ヌ可シ又犯罪ノ地ノ裁判所ヨリハ被告人ニ對スル令狀ノ執行呼出狀ノ送達等ヲ被告人所在ノ地ノ裁判所ニ囑託ヌ可キニ因リ互ニ他ノ一方ニ公訴ノ起リタル

知ルニ至ルヤ必然ナリ左レハ何レカ一方ノ裁判所ハ第二十七條ニ依リ管轄權ヲ專有シ他ノ一方ハ之ヲ喪失スルコト爲ルカ故ニ雙方共ニ裁判ヲ爲スル決シテ之ナカル可シ畢竟舊法ノ規定ハ杞憂ニ過キタルモノニシテ而カモ前述ニ如キ不便アリ故ニ新法ノ規定ヲ以テ其當ヲ得タルモノト爲ス可シ況ヤ犯罪ノ地ハ同時ニ被告人所在ノ地ナルコト最モ多キニ居ルニ於テリヤ
 被告人所在ノ地ト稱スルハ其戶籍ノ在ルト否トニ拘ハラヌ現ニ被告人ノ寓居スル所ノ地ヲ謂フ彼ノ旅行ノ爲メ一時通過スル地ノ如キハ法律ノ所謂ル所在ノ地ニ非ス隨テ其地ノ裁判所ハ管轄權ヲ有セサルナリ人或ハ疑ハシ通過ノ地モ亦所在ノ地ニ相違ナシ唯其一時ニ止マルト多少永久ニ涉ルトノ差アルノ此差アルノ故ヲ以テ彼ト此ト別ツハ如何ト余ハ之ニ答ヘテ曰ハシ法律カ被告人所在ノ地ヲ以テ管轄ト定メタルハ前已ニ説示シタル如ク偏ニ事ノ便宜ヲ計リタルニ基ク然ルニ今一時通過ノ地ヲ以テ管轄ト爲スハ果シテ法律カ期以タル便宜ヲ得ヘキ乎恐クハ反テ不便ヲ招クノ根元タラン例ハ東京ニ於テ罪ヲ犯シタル者其身ヲ大阪ニ匿サンカ爲メ路ヲ東海道ニ取リテ逃走シ昨日

神奈川ニ宿シ今日ハ静岡ニ泊シ明日ハ宮ニ在リト假想セヨ昨日ニ在テハ神奈川ハ被告人所在ノ地ナリシモ今日ハ否ラス今日静岡ハ被告人所在ノ地ナルモ明日ハ否ラス宮ニ宿シ今日ハ被告人所在ノ地ナルモ明日ハ復タ其如何ヲ知ル可カラス然ルニ被告人カ一時其地ヲ通過シタルヲ以テ各地ノ裁判所管轄權ヲ得タリトセハ横濱静岡名古屋ノ各地方裁判所ニ公訴ヲ起シ裁判所其審理ニ著手スルモ之ヲ相當ノ處置ナリト認メサル可カラス此ノ如ク數ヶ所ニ於テ同一ノ事件ニ付キ起訴審判ノ手續ヲ爲スハ果シテ如何ノ便利アル乎横濱及ヒ静岡ノ地方裁判所公訴ヲ受ケテ直チニ被告人ニ對シ召喚狀ヲ發スルモ被告人已ニ其地ヲ去リタルヲ奈何セン名古屋地方裁判所カ公訴ヲ受ケルノ日ハ被告人最早大阪ニ到着シ居ルモ亦計ル可カラス然ルニ猶ホ是等ノ裁判所ニ管轄權アリトスルハ徒ニ無用ノ手續ト費用トヲ増サシメ加之裁判上ノ紛議管轄爭ノ如キヲ生セシメントスルモノニシテ毫モ事ニ益スル所ナシ故ニ此例示ノ場合ニ於テハ被告人未タ居テ大阪ニ定メサル以前ニ於テハ東京ノミヲ管轄ト爲シ已ニ大阪ニト居シタルハ大阪モ亦管轄ト爲ルモノト稱ス可キナリ

右邊へ來りタル如ク一罪ニ付テモ被告人犯罪ノ地ヲ去リテ他ノ地ニ寓居スル
 所ハ雙方ノ地ノ裁判所共ニ管轄權ヲ有スルコト爲ル可シ又被告人假令犯罪ノ
 地ヲ去ラサルモ繼續犯ノ如キハ初メヨリ其犯罪ノ地ニ个以上ノ裁判所ノ管轄
 ニ涉ルコトアル可シ又數罪俱發ノ場合ノ如キモ甲裁判所ノ管轄地内ニテ一罪ヲ
 犯シ乙裁判所ノ管轄地内ニ移リテ更ニ一罪ヲ犯スルハ甲乙共ニ管轄權ヲ有ス
 可シ此ノ如ク管轄裁判所數个アル場合ニ於テ萬一雙方ニ公訴起リタルハ孰
 レカ一方ヲシテ他ノ一方ニ管轄權ヲ讓ラシメサル可カラズ若シ相互ニ管轄モ
 シタルハ於テハ一罪ニ付テ二個ノ裁判アルカ否ラサルモ被告人が雙方ニ交呼
 出ス等ノ不便アリ因テ法律ハ第二十七條ヲ以テ
 一數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シ
 タル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
 一規定シ以テ豫審公判孰レニテモ最初ニ取調ニ著手シタル裁判所ヲ管轄トシ
 審理著手ノ後レタル裁判所ノ管轄權ヲ失ハシム是レ甲裁判所ノ審理著手乙ノ
 前ニ在ル上ニ事實ヲ知ルコト最モ詳密ナル可ク隨テ裁判ノ落着ヲ速ナラシムル

ノ區アレハナリ
 以上ハ一人ニテ罪ヲ犯シタル場合ニ付テノ管轄ヲ說示シタルノモ若シ數人共
 謀シテ一罪ヲ犯シタル場合ハ何レノ裁判所之ヲ管轄ス可キ乎法律ハ第二十八
 條ニ之ヲ規定ス曰ク
 一從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
 一數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公
 判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
 一裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯從犯
 ハ身分ノ如何ヲ問ハヌ大審院ニ於テ之ヲ管轄ス
 一從犯ハ豫備ノ所爲ヲ以テ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ニシテ其罪
 ハ幫助ノ所爲ニ因テ成立セム正犯カ其犯罪ヲ實行スルニ因テ始メテ成立スル
 モントス左レハ犯罪ノ地ハ正犯ニ付テモ又從犯ニ付テモ常ニ同一ナリト雖モ
 其所在ノ地ニ彼此相異ナルコト固ヨリ之アル可シ在東京ノ者正犯ト爲リ在横濱
 ノ者從犯ト爲リ浦和ニ於テ罪ヲ犯シタリトモシニ前數條ノ規定ニ從ヘハ正犯

裁判管轄東京又ハ浦和ニシテ從犯ノ裁判管轄ハ横濱又ハ浦和ナリトス若
シ正犯ニ對シテ浦和ニ於テ審理ノ著手アルハ從犯ヲ浦和ニ併合スルコ
ト得ルハ東京ノ審理著手浦和ノ審理ニ先シタルハ從犯ヲ浦和ニ併合スル
コト能ハス東京ハ犯罪ノ地ニ非ス又從犯所在ノ地ニ非ラレバ抑共犯ナルモ
必ハ犯罪ノ員數如何ニ多キモ其犯罪ノ罪ハ惟一ニシテニナシ故ニ其審判ハ
一个所ニ於テ受ルルヲ必要トス著手シテ之ヲ分割シ各所ニ於テ審判セシマンカ事實
發見ニ大不便アリ隨テ一方ノ裁判所ハ甲ヲ正犯ニシテ從犯ト認メ他方ノ裁
判所ハ之ニ反スル認定ヲ下スコトキテ保テ難シ因テ法律ハ一ハ事實ノ發見ヲ
便利ニシテ裁判ノ範圍ヲ防止セシメ爲メ從犯ハ其所在ノ如何ヲ問ハズ現
正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナラト定メタリ
正犯ハ孰レモ犯罪ノ實行ニ干與シ又ハ他ヲ教唆シテ犯罪ヲ實行セシメタルモ
シニシテ其間正犯ノ從犯ニ於ケルカ如キ主從ノ別ナシ故ニ審理上之カ併合ヲ
必要トスルモ前述正犯從犯ニ付テノ規定ニ依ラシムルコト能ハス因テ第三十七
條ノ旨趣ニ因リ最初審判ニ著手シタル裁判所ヲシテ併セテ正犯全員ヲ管轄セ

然レモ右ノ規定ハ常ニ一般ノ共犯ニ適用スルコト得ヌ大審院ハ特別權限ニ屬
スル皇族ハ犯罪ニシテ常人正犯皇族從犯ナルハ右ノ規定ニ依ラシメシカ皇族
ハ常人ト同ク區裁判所又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬セサル可カラヌ若シ然ラハ
法律カ皇族ノ身分ヲ重シシ特ニ大審院ニ管轄セシメタルノ旨趣ヲ貫徹スルコ
ト能ハス又皇族常人共ニ正犯ナル場合ニ於テモ區裁判所又ハ地方裁判所最初ニ
審判ニ著手シタルハ右ト同一ノ不都合アルヲ免カレヌ左リトテ皇族ト常人
ト其管轄ヲ異ニセシムルニ於テハ事實發見上不便アルハ前已ニ説示シタル所
ノ如シ因テ皇族常人共犯ノ場合ニ於テハ皇族ノ正犯タルト否トヲ問ハス皇族
ト同シク常人ヲモ大審院ノ管轄ニ屬セシム
共犯ハ之ヲ一个所ニ併合スルヲ以テ原則トスルモ是レ唯共犯ニ對シ同時ニ公
訴ノ起リタル場合ニ限ル若シ其中ノ或ル者ニ對シ已ニ裁判アリタル後其共犯
アルカヲ發見シタルハ必シモ前ニ或ル者ヲ裁判シタル裁判所ヲシテ審判セ
シムルコト要セス通常ノ管轄タル犯罪ノ地又ハ後ニ發見シタル被告人所在ノ

地ニ於テ管轄スルヲ相當ナリトス若シ徒ニ強文ニ拘泥シ此原則ヲ墨守セシカ
 率ロ寸毫ノ便利ナクシテ反テ許多ノ不都合ヲ生ス可シ例ヘハ正犯甲、從犯乙ト
 共ニ東京ニ於テ罪ヲ犯シ甲ハ長崎ニ潜匿シ乙ハ札幌ニ逃走シタリ甲ノ罪長崎
 ニ於テ發覺シ同地ニ於テ已ニ裁判ヲ受ケ確定シタリ後乙カ甲ノ從犯ナリシコ
 發覺スルニ長崎地方裁判所ハ管轄正犯甲ヲ管轄シタルニ因リ乙モ亦同裁判所
 ノ管轄ニ屬ス可シトモシカ犯罪ノ地ニモ非ス乙ノ所在地ニモ非ス即チ乙ニ對
 シテハ何等ノ因縁モナキ地ニ於テ管轄スルノ奇觀アルノミナラス遠ク札幌ヨ
 リ長崎ヲテ召喚シ護送スル等ノ大不便ヲ忍ハサル可カラヌ而カモ得ル便利ハ
 毫モ之アルコトナシ畢竟共犯ヲ併合スルハ兩者相對セシメテ之ヲ審理スル所之
 ハ最も事實ヲ發見スルニ便利ナルニ由ル然ルニ甲ハ已ニ裁判ヲ受ケ終リ復タ
 ヲシテ乙ノ共同被告人ト爲スト能ハス左レハ乙ノ審判ハ長崎ニ於テスルノ必
 要ナク犯罪ノ地タル東京又ハ乙所在ノ地タル札幌ニ於テ管轄セシムル方最も
 便利ナル可シ殊ニ皇族ト常人トノ關係ニ付テ之ヲ觀ルニ已ニ大審院ニ於テ皇
 族ノ犯罪ヲ裁判シタル後其共犯ノ疑アル常人ヲ大審院ニ管轄セシムルノ必要

何クニカ在ル故ニ曰ク共犯ヲ併合スルハ其共犯ニ對シ同時ニ公訴ノ起リタル
 場合ニ限ルト
 犯罪ノ場所陸地ニ非スシテ海船内ナル場合ニ於テハ以上説示シタル所ノ規定
 ヲ適用スルコト能ハス犯罪ノ場所ナル海船内ニハ裁判所ノ設アラザレハナリ乃
 チ法律ハ第三十一條ヲ以テ
 「海船内ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ着船シタル地ノ裁判所ヲ以
 テ其管轄ナリトス」
 ト規定シタリ蓋シ海船内ノ犯罪ニ付テハ前已ニ説示シタルコトアルカ如ク船長
 ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フカ故ニ現行犯ヲ發見シタル場合ナレハ假豫審ヲ
 行ヒ非現行犯ナレハ捜査ヲ爲シ而シテ其船定繫港ニ在レハ直チニ同港ノ檢事
 ニ事件ヲ送致シ又航海中ニ係レハ最初ニ着船シタル港ニ於テ其事件ヲ管轄セシムルヲ便
 キモノトス左レハ定繫港又ハ最初着船ノ港ニ於テ其事件ヲ管轄セシムルヲ便
 利ナリトス是レ此特別ノ規定アル所以ナリ
 海船内ノ犯罪ト雖モ必レモ其船内ニ於テ發覺セス隨テ船長カ何等ノ處分ヲ爲

二六三

又前ナク犯人ヲシテ乘陸セシタル後ニ至テ通常ノ官署ニ其犯罪發覺スルナラバ此場合ニ於テハ定製港等ヲ以テ管轄ト爲スノ理由ナキニ似タリ然レモ定製港及ヒ最初着船ノ地ハ殆ト犯罪ノ地ト同一視ス可キモノニシテ是等ノ場所ニ於テ其犯罪ノ證據多クハ存在ス可キノ望アルヲ以テ法律ハ仍ホ其地ヲ以テ裁判管轄ト定メタルモノナリ

以上ハ内地ノ犯罪ニ關スル裁判管轄ニ付キ法律ノ規定ヲ觀察説明シタルモノナリ此法律ノ規定ハ内地ト同視ス可キ外國ノ土地即チ我治外法權ヲ及ボス清國及ヒ朝鮮國ニ於ケル犯罪ニ付テモ亦之ヲ適用ス可シ乃チ例ヘハ朝鮮國京城ニ於ケル犯罪ニシテ其被告人同國元山ニ居住シ又ハ遼レテ内地ノ某所ニ歸リ來リタルハ京城駐在ノ領事モ元山駐在ノ領事又ハ内地某所ノ裁判所モ共ニ裁判權ヲ有ス可シニハ犯罪ノ地ニハ被告人所在ノ地ナレハナリ但被告人内地ニ歸リ來リタル場合ノ如キハ内地ノ裁判所專ラ之ヲ管轄スルヲ適當ナリトス

特別變則ノ裁判所タル領事廳ニ違ク之ヲ召喚シ若シクハ護送スルノ必要ナク且其召喚護送ハ實際上種々ノ不便アレハナキ

清國朝鮮國ヲ除キ他ノ外國ニ在テ罪ヲ犯シタル者ノ裁判管轄ハ何レノ裁判所ニ屬ス可キ乎犯罪ノ地ハ外國ナルヲ以テ其地ヲ管轄ト爲ス可カラサルハ勿論被告人所在ノ地ヲ管轄トスルモ渠レ依然外國ニ在ルハ之ヲ奈何トモスルヲ能ハズ因テ別ニ之ヲ裁判管轄ト定メタル可カラズ第二十九條ハ即チ之ヲ爲メニ設ケラレタルモノナリ

同條ニ依レハ内地ニテ被告人ヲ逮捕シタルハ其逮捕ノ地ニテ管轄ス是レ其地ハ即チ被告人現在ノ地ニシテ審理上最モ便宜ナレハナリ又外國政府ノ引渡ヲ受クル等其被告人ヲ送致シ來リタルキハ其送致ノ目的タル地ニテ管轄ス又關席判決ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人依然外國ニ在ルカ又ハ其所在不分明ナルニ因ルモノナルヲ以テ此場合ニハ被告人最後ノ住所ノ地即チ外國渡航前ニ居住シタル地ニテ管轄ス是レ其地ハ犯罪ニ關係ナク又被告人現在ノ地ニ非サルハ勿論ナルモ被告人其者ニ對シテハ幾分カ緣故ヲ有スルカ故ニ他ノ地ヨリ寧ロ此地ヲ管轄ト爲ス方適當ナリト認メタルニ由ルナラン

第二節 管轄ノ指定

第二編 第一章 裁判所ノ管轄

前節ニ説示シタルカ如ク法律ハ事物及ヒ土地ニ付キ裁判管轄ヲ定メタリト雖モ其定マリタル管轄裁判所ニ於テ裁判權ヲ行フコトヲ得サル場合アリ又其管轄裁判所ノ甲ナリヤ乙ナリヤヲ實際判別シ難キ場合モ亦之ナキニ非ス總テ是等ノ場合ニ於テハ其事件ヲ管轄ス可キ裁判所ヲ指定セサル可カラズ

裁判所構成法第十條ニ依ルニ管轄ヲ指定ス可キ場合ヲ別テ左ノ四箇ト爲ス

第一、權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且同法第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルカ

例ヘハ甲區裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニ付キ同裁判所ニ起訴セントスルモ同裁判所ノ判事被害者ナルカ又ハ被告人ノ親屬ナル等法律上其職務ノ執行ヨリ降斥セラレ可キ者ナルカハ到底同裁判所ニ於テ其事件ヲ裁判スルコト能ハス(法律上ノ理由)又ハ此ノ如キ法律上ノ支障アラサルモ兵亂洪水ノ如キ不可抗力ニ遭遇スルカハ甲區裁判所ニ於テ事務ヲ取扱フコトヲ得ス(特別ノ事情)左リトテ構成法第十三條ニ依リ之ニ代ル可キコトヲ定メラレタル乙區裁判所ニ起訴セント

スルモ是レ亦法律上ノ理由又ハ特別ノ事情ニ因リ同裁判所ニ於テモ裁判スルコトヲ得サル場合ニ於テハ檢事如何ニ起訴セント欲スルモ之ヲ奈何トモスルコト能ハス判事ノ轉免又ハ不可抗力ノ消散ヲ待タンカ其間ニ公訴ノ時効ニ罹リ消滅ニ歸スルノ結果ヲ生スルヲ免カレヌ故ニ他ノ裁判所ヲシテ特ニ其事件ヲ管轄セシメサル可カラズ

第二、裁判所管轄區域ノ境界明確サラナルカ爲メ其權限ニ付疑ヲ生シタルカハ此場合ハ實際數生ス可キモノニ非サル可シ何トナレハ裁判所管轄區域ハ必シモ行政區劃タル府縣郡及ヒ市町村ノ區域ト同シカラサルモ多クハ彼ノ一部分ト此ノ一部分トヲ合シ其區域ト爲ス而シテ府縣郡市町村ノ境界ハ今日ニ於テ明確ヲ欠クモノ殆ト之アルヲ見サレハナリ然レモ北海道ノ如キ土地ノ測量未タ普カラサル場所アル可ク又内地ニ於ケル深山ヲ以テ境界ト爲セルモノ、如キハ實際某ノ地ハ果シテ何府縣郡市町村ノ部分ナリヤ否ヤ判然タラサルモノ絶テ之ナシト云フ可カラズ隨テ犯罪ノ地ハ甲裁判所ノ管轄地内ナリヤ將タ乙裁判所ノ管轄地内ナリヤ明確ナラサルヲ以テ檢事起訴ヲ爲スニ躊躇スルコトアラ

此場合ニ於テハ管轄權ニ疑アル一方ノ裁判所ニ起訴スルモ管轄ニ非ストノ
 裁判ヲ受クルヤ知ル可カラス故ニ寧ロ起訴前ニ於テ管轄指定ノ申請ヲ爲シ以
 テ先ツ何レノ裁判所カ管轄ナリヤヲ決定セシムルヲ必要且便宜ナリトス
 第三、法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有
 スルハ
 法律ハ第二十七條ニ於テ數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初
 豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリト定メタルモ若シ甲乙二
 裁判所ニ於テ同時豫審又ハ公判ニ著手シタルハ時ニ前後ナキヲ以テ甲乙裁
 判所共ニ法律ニ從ヒ裁判權ヲ有スルモノト云ハサル可カラズ又甲裁判所ハ乙
 裁判所ヨリ先ニ豫審又ハ公判ニ著手シタルニモセヨ乙裁判所モ亦公訴ヲ受ケ
 而カモ管轄違ハ申立ニ對シ自ラ管轄ナリト判決シ且甲裁判所モ同權ナル判決
 爲シ其雙方ノ判決確定シタルハ一事件ニ付キ二箇ノ裁判所裁判權ヲ行フ
 事ト爲リ其極相抵觸スルニ箇ノ判決ヲ下ス恐アルノミナラス二重ニ訴訟手續
 ヲ行ヒ徒ニ日時ト費用トヲ要スルニ至ル故ニ何レカ一方ノ裁判所ヲ指定シ管

轄セシメサル可カラズ
 第四、二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セスト
 ノ確定判決ヲ受ケタルモ其裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキ事
 前號末段ニ反シ甲乙兩裁判所各公訴ヲ受ケナカラ共ニ管轄ニ非ストノ判決ヲ
 爲シ其判決共ニ確定シタルモ法律上其甲裁判所又ハ乙裁判所ニ於テ管轄ス可
 キ事件ナルハ假令他ノ裁判所ニ向テ更ニ起訴スルモ到底其效ナカル可シ又
 甲乙兩裁判所各管轄ナリト判決シタルモ上訴裁判所ニ於テ甲乙裁判所共ニ管
 轄ニ非スト判決シ其判決確定シタルモ其實上訴裁判所ノ判決不當ニシテ甲裁
 判所又ハ乙裁判所ニ於テ管轄ス可キ事件ナルハ亦更ニ他ノ裁判所ニ向テ有
 効ニ起訴スルヲ得ス故ニ眞實裁判權ヲ有スル一方ノ裁判所ヲシテ管轄セシ
 メサル可カラズ
 要スル以上四箇ノ場合ニ於テ其儘空シク捨置クハ或ハ抵觸スル數箇ノ裁
 判ヲ下メカ或ハ全ク裁判ヲ爲サ、ルコト爲リ公私ノ利益ヲ害スルニ至ルヤ必
 然ナリ故ニ檢事又ハ他ノ訴訟關係人ヨリ管轄指定ノ申請ヲ爲スコトヲ許シタリ

檢察官公益ノ代表者ナリ而シテ以上四箇ノ場合ハ何レモ公益ニ關係ナルヲ以テ
 檢察官常ニ管轄指定ノ申請ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レモ被告人ハ第三ノ場合ヲ除
 キ他ノ場合ニ於テ自己ノ利害ニ直接ノ關係ナシ否却テ公訴ヲ受ケサル方自己
 ノ利益ニシテ自ラ進シテ公訴ヲ受ケント主張ス可キノ理ナシ故ニ第一第二第
 四ノ場合ニ於テ管轄指定ノ申請ヲ爲スコトヲ得サルモノトス
 民事原告人ハ管轄指定ノ申請ヲ爲スコトヲ得ル乎法文ニハ檢察官其他訴訟關係人
 トアルヲ以テ民事原告人ニモ此申請ヲ爲スノ權アルカ如シ然レモ私訴ハ必ス
 已ニ起リタル公訴ニ附帶ス可ク獨立シテ私訴ヲ刑事裁判所ニ爲スコトヲ得サル
 點ヨリ之ヲ推論スルハ民事原告人ニ此權ナシト解釋セサル可カラヌ此ノ如
 キ解釋スルモ民事原告人ハ普通法ニ從ヒ民事裁判所ニ起訴スルノ權ヲ有スル
 ヲ以テ毫モ其利益ヲ害セラル、コトナシトス
 管轄指定ノ申請ニ付キ決定ヲ爲ス可キ裁判所ハ裁判所構成法ニ依レハ其各關
 係ノ裁判所ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所トス故ニ例ハハ麹町區裁判所ト下谷
 區裁判所ト管轄ヲ爭フ場合ニハ東京地方裁判所其申請ヲ決定ス可ク東京地方

裁判所ト横濱地方裁判所トノ間ニ管轄ノ爭アルハ東京控訴院ヲ以テ其決定
 ヲ爲ス可キ裁判所トス若シ東京地方裁判所又ハ其管轄内ナル區裁判所ト名古屋
 屋地方裁判所又ハ其管轄内ナル區裁判所ト管轄ヲ爭フハ東京控訴院及ヒ名
 古屋控訴院ハ共ニ雙方上級裁判所ニ非サルヲ以テ此場合ニ於テハ大審院ニ於
 テ決定ヲ爲サ、ル可カラヌ
 大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ハ必シモ重大ナル事件ニ關スルモ
 ノニ非サル可シト雖モ事件ニ控訴院若クハ其管轄内ナルニ裁判所ノ間ニ關係
 スルヲ以テ自然司法大臣又ハ檢察總長ノ通知スル所ト爲ルコト多カル可シ因テ
 此場合ニ於テハ當該檢察官等ノ申請アルヲ待タス檢察總長或ハ司法大臣ノ命ニ
 因リ或ハ職權ヲ以テ申請ヲ爲スコトヲ得ルモノト定ム是レ一日モ速ニ管轄ヲ定
 ヲ有効ノ判決ヲ爲サシムルノ便利ヲ謀リタルモノナリ
 管轄指定ノ申請ニ付テノ手續ハ極メテ簡單ニシテ第三十三條ノ規定アルニ
 過キヌ同條ニ曰ク

「管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付キ管轄權ヲ有ス

ル裁判所ニ其趣意書ヲ差出ス可シ
裁判所ハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

故ニ申請者ハ前掲第一乃至第四ノ場合中其一ニ該當スルヲ以テ管轄指定ヲ申請ストノ趣意書ヲ差出スヲ以テ足レリトス但其場合ノ一ニ該當スル事實ハ之ヲ説明スルヲ必要トズ例ヘハ第三第四中ノ二以上ノ確定判決アル場合ハ其判決ノ原本等ヲ差出スノ類ナリ

右申請ノ判決ハ所謂ル書類裁判ニシテ訴訟關係人ヲ呼出スコトナク隨テ口頭辯論ヲ用キス單ニ趣意書ニ依テ裁判ス尤モ場合ニ依テ關係アル裁判所ヨリ訴訟記録等ヲ取寄セルコトヲ妨ケス此ノ如ク書類ニ依リ裁判ヲ爲スモノハ畢竟訊問辯論ヲ爲サ、ルモ容易ニ申請ノ理由アルヤ否ヤヲ判知スルコトヲ得ヘク且何レノ裁判所ニ管轄セシムルモ訴訟關係人ノ利害ニ關係セサルニ由ル

第二節 管轄ノ移轉

法律已ニ裁判所ノ管轄ヲ定メタル上ハ裁判所又ハ訴訟關係人ノ都合等ヲ理由トシ之ヲ變更スルコトヲ許ス可カラズ然レモ法律ハ或ル場合ニ限り之ヲ變更シ

第二編 第一章 裁判所ノ管轄

甲裁判所ヨリ乙裁判所ニ其管轄ヲ移轉スルコトヲ許セリ此場合ヲ別テ二ト爲ス
第一ハ公安ノ爲メ管轄ヲ移轉スルモノニシテ第三十四條ニ之ヲ規定ス曰ク
「犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得」

例ヘハ犯罪ノ性質國事ニ關スルカ又ハ否ラサルモ其被告人タル者一地方ニ大勢力ヲ有スルニ因リ其地方ニ於テ裁判ヲ爲サシムルニ於テハ其黨類若クハ一般人民ノ奮激ヲ惹起シ其極裁判所ヲ震撃シ又ハ裁判官ヲ脅迫スル等ノ虞アリトモンカ兵力若クハ警察ノ力ヲ以テ鎮壓スルニ難カラサルモ是レ決シテ事ノ宜シキヲ得タルモノト謂フ可ラス寧ロ他ノ關係ナキ地方ニ移シテ裁判セシメ以テ其一地方ノ公安ヲ保持スルノ優レルニ若カス是レ此特例ノ設ケアル所以ナリ

此管轄ノ移轉ハ訴訟關係人ノ爲メニスルモノニ非スシテ偏ニ公安ノ爲メニスルモノナリ故ニ訴訟關係人ヨリ之ヲ申請スルコトヲ許サズ公安保持ノ上ニモ幾

分ノ責任ヲ有スル司法行政ノ長官タル司法大臣ヨリ大審院檢察總長ニ命令シ
 檢察總長ヲシテ大審院ニ其申請ヲ爲サシム可キモノトス
 大審院ニ於テ此申請ヲ受ケタルキハ果シテ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル
 恐アリヤ否ヤヲ判斷シ決定ヲ與フ可シ而シテ法律上ニ於テハ此申請ヲ許否ス
 ルハ大審院ノ權内ニ在ルヤ勿論ナルモ已ニ司法大臣ニ於テ紛擾危險ノ恐アリ
 ト認メタルモノナレハ實際上ニ於テハ必ス其申請ニ應シ管轄移轉ノ決定ヲ與
 フルナラシ

大審院カ決定ヲ與フルニ付テハ訴訟關係人ニ辯論ヲ爲サシメサルハ勿論其申
 立ヲモ聽カサルモノトス是レ其利害ニ關係セサレハナリ
 此管轄移轉ノ申請ハ前節ニ説示シタル管轄指定ノ申請ト同シク直近上級ノ裁
 判所ヲシテ之ヲ決定セシムル方最モ便利ナルカ如シ然ルニ法律ハ必ス大審院
 ニ於テ決定スルモノト定メタルハ他ナシ此第一ノ場合ハ一控訴院又ハ一地方
 裁判所管内ニテ甲ヨリ乙ニ其管轄ヲ移轉スルモ到底裁判ニ對シ紛擾危險ヲ生
 スルヲ免カレサルコトアレハナリ例ヘハ九州中何レノ地ニテ裁判セシムルモ此

危險ヲ免カレストスルハ寧ロ大區等遠隔ノ地ニ移轉スルヲ可トス而シテ大
 區等ニ移轉スルハ長崎控訴院ノ決定シ得ヘキ所ニ非ス是レ大審院ニ此決定ノ
 權ヲ與ヘタル所以ナリトス

第二ハ嫌疑ノ爲メ管轄ヲ移轉スルモノニシテ第三十六條ニ之ヲ規定ス曰ク
 「被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト
 能ハサル恐アルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコト
 ヲ得」

人或ハ疑ハン第四十一條ニ依レハ判事カ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足
 ル可キ情況アル場合ニ於テハ檢察其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ許
 セリ左レハ此忌避ノ方法ニ依リ嫌疑アル判事ヲシテ其事件ニ關係セシメサレ
 ハ可ナリ何ソ其事件ノ管轄ヲ他ノ裁判所ニ移轉スルヲ要センヤト此言一應其
 理アルカ如シ然レモ法律カ特ニ此管轄移轉ノ事ヲ定メタルハ一ニ判事ニ對
 シ嫌疑アルニ非スシテ判事全員ニ對シ嫌疑アル場合ヲ慮リタルニ由ル若シ此
 場合ニ於テ仍ホ忌避ノ方法ニ依ランカ本法第四十二條民事訴訟法第三十六條

第三項第三項ニ從ヒ上級ノ裁判所其裁判ヲ爲シ而シテ忌避ノ申請ヲ正當ナリトスルハ結局裁判所構成法第十條第一號前段ニ依リ更ニ管轄指定ノ申上級請ヲ爲スコト爲ラン此ノ如ク繁冗ナル手續ニ依ラシムルヨリハ寧ロ一直線ニ裁判所ニ對シ管轄移轉ノ申請ヲ爲サシムル方最モ簡便ナリトス是レ此特別ノ規定アル所以ナリ

此管轄ノ移轉ハ前第一ノ場合ニ反シ單ニ訴訟關係人ノ爲メニシタルモノナレハ其申請ヲ爲ス可キ者ハ管轄裁判所ノ檢事其他ノ訴訟關係人ニシテ大審院檢事總長ハ固ヨリ之ニ與カルコトヲ得サルナリ

然レモ訴訟關係人必シモ常ニ此申請ヲ爲スノ權ヲ有セス法律ハ或ル特別ノ場合ニ限リ此權ヲ與ヘス即チ第三十七條第二項ニ「民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付テ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ヌ」トアル是ナリ蓋シ民事原告人其裁判所ニ私訴ヲ爲シタルハ初メヨリ其裁判所ニ信用ヲ置キタルモノト看做サハル可カラス偏頗ノ嫌疑アル者ノ裁判ヲ請フノ謂ハレナケレハナリ已ニ信用

シテ私訴ヲ爲シナカラ中途ニシテ嫌疑アリト稱シ其裁判管轄ヲ移轉セソトス是レ實ニ專恣自儘ノ行爲ナレハ法律カ之ヲ許サハルハ固ヨリ其所ナリトス但民事原告人ノ所爲ニ非スシテ其裁判所ノ管轄ト爲リタル場合例ヘハ上告裁判所ノ判決ニ因リ移送セラレタル場合ノ如キハ常ニ此申請ヲ爲スコトヲ得ヘシ又被告人異議ノ申立ヲ爲サス甘シテ本案ノ辯論ヲ爲シタルハ是レ亦其裁判所ニ信用ヲ置キタルモノト看做ス可キヲ以テ同シク此申請ヲ爲スコトヲ許サハルナリ

此申請ノ手續及ヒ裁判ニ付テハ別ニ說明ヲ要スルモノナシ左ニ法文ヲ嚮示セ

第三十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ニ差出ス可シ裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日內答辯書ヲ差出スコトヲ得

裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

第三十九條 前條ノ申請ニ付キ管理權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ

其申請ヲ決定ス可シ

第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避回避

除斥トハ或ル人ガ或ル事件ニ關係シ職務ヲ執行スルコトノ禁制ヲ謂ヒ忌避トハ訴訟關係人ヨリ其人ガ事件ニ關係スルヲ拒否スルコトヲ謂ヒ回避トハ其人ガ自ラ其事件ニ關係スルヲ拒否スルコトヲ謂フ第一ノ禁制ハ法律ヨリ來ルモノニシテ絶對的ナリ第二第三ハ相對的ノ拒否ニシテ前者ハ他動ニ出テ後者ハ自動ニ出ツ其性質原因各々相同シカラサルモ其人ガ事件ニ關係セサル點ハ彼此異ナル所ナシ

第四十條ハ判事除斥ノ場合ヲ定メテ左ノ四個ト爲セリ

第一 判事被害者ナルハ

被害者ハ犯人ニ對シ決シテ好意ヲ懷クモノニ非ス其私情ノ激スルヤ成ル可ク犯人ヲ嚴罰センコトヲ望ムヲ普通トス左レハ判事如何ニ公平ヲ保タントスルモ不知不識普通ノ人情ニ制セラレ自然私意ヲ裁判ニ交フルコトナシトセス果シテ然ラハ被告人ノ不利益之ニ過クルモノアラヌ縱令判事ニ此憂ナシトスルモ世

人ハ其裁判ニ疑ヲ容ル、ヲ免カレサル可シ是レ被害者タル判事ヲ除斥シ其事
件ニ干與スルコトヲ許サ、ル所以ナリ

第二 判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルハ
但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルハト雖モ亦同シ

判事又ハ其配偶者ト被害者又ハ其配偶者ト親屬ナル場合ニ於テ判事ヲ除斥ス
ルハ判事自ラ被害者ナル場合ニ於テ之ヲ除斥スルト同一ノ理由ニ基ク其被告
人又ハ其配偶者ト親屬ナル場合ニ於テ之ヲ除斥スルハ全ク前ニ反シ親屬タル
者ハ道德上互ニ相容隱スルノ義務アリ且ツ人情トシテ互ニ其窮厄ヲ救ヒ利益
ヲ相計ルヲ常トス此ノ如キ者ヲシテ裁判ヲ爲サシム勢ヒ被告人ニ利益ナル裁
判ヲ爲スヲ免カレヌ否ラサルモ世人ハ必スヤ疑ヲ其間ニ容レン又他ノ一方ヨ
リ觀レハ判事ヲシテ進退維谷マルノ苦境ニ陥ラシムルモノト謂フ可シ是レ其
親屬又ハ其配偶者ノ被告事件ニ干與スルコトヲ禁シタル所以ナリ

婚姻ニ因テ身分上ノ關係ヲ生シタル者其婚姻ノ解除スルハ最早何等ノ關係
ナク全ク婚姻以前ニ復シ他人ト爲リタルモノナレハ此場合ニ於テハ除斥スル

ノ理由ナキカ如シ然レモ婚姻ノ解除シタルニ拘ハラヌ仍ホ相方間ニ關係ヲ遺存スルヲ常トス例ハハ妻死去シ婚姻之カ爲メニ解除スルモ其生子アルニ於テハ我ト亡妻ノ生家トノ關係ヲ絶ツコト能ハヌ我ヨリ親レハ亡妻ノ父母ハ即チ其外祖父母タルヲ依然タレハナリ故ニ亡妻ノ父母被害者又ハ被告人タルハ勢ヒ偏頗ニ涉ルコト免カレサル可シ縱令亡妻ニ生子ナカリシトスルモ其忌辰ニ當リテハ其父母兄弟等ヲ招キ共ニ祭典ヲ擧クル等ノ風俗アリテ其生家トノ關係ヲ全然斷絶スルコト稀ナリ因テ法律ハ前ノ姻族ニ付テモ仍ホ現在ノ姻族ト同シク除斥ス可キモノト定メタリ

第三 判事其事件ニ付キ證人鑑定人ト爲リタルハ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上代理人ナルハ

前ニ本案被告事件ニ付キ證人又ハ鑑定人ト爲リ供述又ハ鑑定ヲ爲シタル者ハ其供述鑑定シタル點ニ付テハ必スヤ前言ヲ固執ス可ク假令反證出ルモ容易ニ之ヲ翻ヘスコトナカル可シ然ラハ其者ヲシテ裁判ヲ爲サシムルモ到底公明正大ナルヲ望ミ難シ殊ニ判事其人ニ於テハ一方ニテ證人鑑定人ト爲リナカラ他ノ

一方ニテハ裁判官ト爲リ自身カ供述鑑定シタル所ノモノヲ心證ノ資料ニ供スルハ理ニ於テ許ス可カラサル事ナリトス左リトテ此場合ニ於テハ自身ノ供述鑑定ヲ採用ス可カラストセンカ必要ナル證據ノ現存スルニ拘ハラヌ故ナク之ヲ捨去リ遂ニ公益若クハ被告人ノ利益ヲ害スルニ至ル是レ前ニ證人鑑定人ト爲リタル者ヲシテ裁判ニ干與セシメサル所以ナリ

又判事カ被告人又ハ被害者ノ法律上代理人ナルハ假令彼此ノ間親屬ノ關係ナキモ元來交際信用等離ル可カラサルノ關係アリテ法律上代理人ト爲リタルモノニシテ殆ト親屬ト相擇フ所ナシ故ニ親屬ノ關係アル場合ト同シク其判事ヲ除斥ス

第四 判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタルハ

先入爲主ハ人ノ免カルコト能ハサル所ニシテ最初被告人ヲ有罪ナリト断定シタル者ハ後日反證ヲ發見スルモ仍ホ多クハ前説ヲ固持ス可シ乃チ豫審終結ニ於テ被告人ニ對シ犯罪ノ證據十分ナリトシ其事件ヲ公判ニ付スルノ決定ヲ爲シ

タル者公判ニ干與セハ更ニ又有罪ノ認定ヲ下スヲ殆ト必然ナリト謂フモ可ナ
 リ第一審ノ公判ニ干與シタル者第二審ノ裁判ニ干與スル場合モ亦同シク第一
 審ノ判決ヲ維持スルヲ勉ム可ク結局覆審ノ利益ヲ見サルニ至ル可シ是レ前
 ニ其事件ノ裁判ヲ爲シタル者ヲシテ後ノ裁判ニ干與セシメタル所以ナリ
 法律ハ豫審終結ニ干與シト記シテ豫審ニ干與シト言ハス蓋シ一旦豫審ニ於テ
 單ニ一部ノ處分ヲ爲シタル者ハ豫審終結ノ決定ヲ爲シタル者ト異ナリテ其事
 件ニ深キ關係ヲ有セス隨テ被告人ニ對シ不利益ナル心證ヲ形成シ容易ニ動カ
 サル者ト認ムルヲ得ス故ニ此者ヲシテ其公判ニ干與セシムルヲ妨クルノ
 理ナシ是レ故ラニ豫審終結云々ト記シタル所以ナリ
 此除斥ノ理由ハ上告裁判所ノ判事ニモ亦之ヲ適用ス可キ乎論者或ハ曰ハン上
 告裁判所ハ法律適用ノ當否ヲ鑑査スル所ニシテ事實ノ點ニ立入ルヲナシ已ニ
 事實ノ點ニ立入ルヲナシトセハ假令前ニ事實ノ裁判ヲ爲シタルアルモ之ヲ
 シテ更ニ法律ノ裁判ヲ爲サシムルモ何ノ不可カ之アラン事實ハ或ハ在クルヲ
 ヲ得ヘキモ法律ハ決シテ在クルヲ能ハス故ニ此法律ノ規定ハ事實裁判所ノ判

事ニ限り適用スルモノナリト解釋ス可シト此言一應其理アルカ如シ然レモ事
 實ノ問題法律ノ問題ト混合シ上告裁判所共ニ之ヲ裁判スル場合ナキニ非ス殊
 ニ法律ハ一般ニ規定ヲ爲シ上告裁判所ノ判事ヲ例外ニ置カス故ニ此規定ハ總
 テノ裁判所ニ適用ス可キモノナリト解釋セサル可カラズ且ツ法律ノ問題ニ付
 テモ前ニ裁判ヲ爲シタル者ハ勢ヒ其前説ヲ固執ス可ク若シ然ルハ新ニ五名
 又ハ七名ニテ裁判ヲ爲ス可キニ其實四名又ハ六名ノ新判事ニ一名ノ舊判事ヲ
 加ヘ裁判セシムルヲ爲リ構成法ノ精神ニ背クヲ免カレス因テ論者ノ言ハ到
 處採用ス可キモノニ非ストス
 除斥ノ原因アル判事ハ固ヨリ其事件ニ干與ス可カラサルハ勿論ナルモ萬一之
 ニ干與スルハ如何其裁判ハ法律ハ法律ニ違背スルモノナルヲ以テ後日上訴
 ニ依テ取消若クハ確認セラル、ヲ免カレス然ラハ訴訟關係人ハ上訴ニ依ルノ
 外其違法ノ點ヲ申立ルヲ得サル乎否々其裁判ノ無効ニ歸ス可キヤ明白ナルニ
 拘ハラス其下ルヲ待タサル可カラサルノ理ナシ故ニ法律ハ此場合ニ於テハ檢
 事其他訴訟關係人ヨリ其除斥ノ理由アル判事ヲ忌避スルヲ許セリ

除斥ノ原由ナシト雖モ判事カ被告人又ハ被害者等ト信友タリ若クハ深怨アリ
 テ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ場合ナシトセヌ法律ハ此場合ニ於
 テモ檢事其他訴訟關係人ヨリ其判事ヲ忌避スルヲ許セリ是レ法律自ラ其判事
 ヲ疑フニ非サルモ尙クモ當事者ノ疑ヲ受ケタル者ナレハ之ヲシテ其事件ニ干
 與セシメヌ以テ裁判ノ信用ヲ維持スルコトヲ得策トスレハナリ
 前述ノ如ク除斥ノ原因アル場合ト否トヲ問ハス忌避ノ申請ヲ爲スコトヲ許スモ
 其申請ヲ爲ス可キ時期ニ付テハ場合ニ依リ同一ナラス除斥ノ原因アル場合ニ
 於テハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得ルモ偏頗ノ恐アル
 場合ニ於テハ當事者其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セヌシテ判事ノ面前ニ於
 テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スル
 コトヲ得サルモノトス民事訴訟法第三十四條是レ一ハ法律ノ推定ニテ常ニ疑アリトスル場
 合ナルモノハ否ヲサルニ因ル且ツ當事者一旦甘ンシテ申立若クハ陳述ヲ爲シ
 ナカラ後日ニ至リ忌避ノ申請ヲ爲スカ如キハ實ニ專恣ノ所爲ニシテ道理上決
 シテ許容ス可キモノニ非ス是レ此區別アル所以ナリトス

忌避ノ申請及ヒ其裁判ノ手續ニ付テハ法律ハ民事訴訟法ノ規定ヲ適用ス可キ
 モノト定メタリ第四十條是レ此種ノ手續ハ訴訟ノ民事タルト刑事タルトニ依テ
 區別ノ生ヌ可キモノニ非ツレハナリ今左ニ民事訴訟法ノ規定ヲ舉示セン

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲
 スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳
 述ハ其疏明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對レ
 陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其後
 ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ疏明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避
 ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ヌ
 若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上
 級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコト

ヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述ブ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲ス

コトヲ得又其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス

コトヲ得

右法文明晰ニシテ別ニ説明ヲ要スルモノナシ而シテ此法律ハ別ニ第四十三條ヲ以テ左ノ規定ヲ爲セリ

「忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テ

ハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中

止スルコトヲ得」

蓋シ公判ノ辯論ヲ中止スルハ其判事疑ヲ受ケタルニ拘ハラス仍ホ其手續ヲ繼續セシムルハ事理總當ナラサルノミナラス若シ忌避ノ申請正當ナリト決スル

キハ前ニ爲シタル手續總テ無用ニ歸スルヲ以テナリ之ニ反シ豫審ノ處分ヲ繼續セシムルヲ本則ト爲シタルハ證據採取ノ處分ハ一日後レハ一日ノ審アリ急速ニ其處分ヲ爲スヲ必要トスレハナリ但實際急速ヲ要セサル場合ハ之ヲ中止スルモ妨ナシトス

忌避ノ外回避ナルモノアリ是レ當事者ヨリ忌避ノ申請ヲ爲サ、ルモ判事ニ於テ自ラ忌避セラル可キ原因アルコトヲ認ムルカ又ハ特別ノ事情アリテ其事件ニ干與スルニ忍ヒサルモ忌避申請ヲ管轄裁判所ニ申立テ以テ其事件ノ關係ヲ免ル、モノトス此回避ノ申立ニ付テハ右裁判所之ヲ裁判ス其判事カ名ヲ回避ニ轉リ難ヲ去テ易ニ就ク等ノ不都合ナカラシメンカ爲メナリ而シテ此裁判ハ固ヨリ訴訟關係人ノ申請ニ基クモノニ非サレハ其辯論ヲ聽クノ必要ナキハ勿論之ニ對シ不服ヲ申立ツルコトヲ許サ、ルハ言ヲ竣タサル所ナリトス

以上ハ判事ニ對スル法律上ノ除外及ヒ其忌避回避ノ事ヲ述ヘタルモノナリ總テ是等ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用スルモノトス總レ裁判所書記ハ有罪

罪ノ證據ト爲ル可キ圖書ヲ主トシ其他必要ナル記錄ヲ作ルモノナレハ其作

製上或ハ私意ヲ交ヘ故ラニ事實ニ相違スル記載ヲ爲スノ恐レアリ又少クトモ此嫌アルヲ免カレサレハナリ

茲ニ注意ス可キハ判事ニ付テハ除斥ノ原由四箇アルモ其中第四ノ原由即チ其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタリトノコトハ裁判所書記ニ適用ス可カラサルコト是ナリ蓋シ書記ハ裁判ヲ爲ス者ニ非サレハ前ノ意見ヲ固執スルナラントノ嫌疑アル可キ謂レナシ且ツ法文ニモ干與トアリテ立會トアラヌ而シテ書記ハ豫審公判ニ立會フニ過キサレハ此第四ノ原由ヲ書記ニ適用ス可カラサルヤ益々分明ナリトス

書記ニ對スル忌避ノ申請及ヒ其回避ノ申立ニ付テハ書記所屬ノ裁判所之ヲ裁判ス是レ判事ニ於ケルカ如ク上級裁判所ヲシテ裁判セシムルノ必要ナケレハナリ

檢事ニ付テハ其被告人又ハ被害者ト如何ナル關係ヲ有スルモ又他ニ如何ナル事情アルモ法律ハ之ヲ除斥スルコトナク又訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコト許サヌ是レ檢事ハ裁判所ニ對シ訴求ヲ爲スニ過キサレモノナレハ如何ニ被告ニ

利益若クハ不利益ナル請求ヲ爲スモ裁判所ハ決シテ之ニ羈束セラル、コトナク隨テ偏頗ノ處置アルモ之カ爲メ實害ヲ生スルコトナキニ由ル又忌避ヲ許ストセハ被告人タル者常ニ必ス其申請ヲ爲スニ至ル可シ訴訟關係人相互ニ忌避スルカ如キハ道理上決シテ許容ス可キモノニ非ス是レ檢事ニ付テハ除斥ナク又忌避ノ申請ヲ許サ、ル所以ナリ

然レモ檢事モ亦是レ普通ノ人ナレハ或ハ其父子兄弟等近キ親屬カ被告人タル場合ノ如キニ在リテハ其身其訴訟ニ關係シ有罪ノ論告等ヲ爲スニ忍ヒサルコトアラシ故ニ回避ノ申立ハ之ヲ許容スルヲ至當ナリトス然ルニ法律此點ニ付テモ何等ノ規定ヲ爲サ、ルハ敢テ其回避ヲ禁止スルノ意ニ非ス檢事ハ一體ナリトノ原則ニ依リ檢事中ニテ相互ニ交代スルコトヲ得ヘク而シテ其交代ニ付キ監督官ノ許可ヲ經ルハ格別特ニ裁判所ノ裁判ヲ受クルヲ必要トセス是レ法律カ其回避ニ付キ何等ノ規定ヲ爲サ、ル所以ナリ

第三編 犯罪ノ搜查、起訴及ヒ豫審

第一章 搜查

三〇八

我法律ハ下調處分ヲ別テ二ト爲ス捜査ト豫審ト是ナリ捜査トハ犯罪ノ原因、性質、方法、情狀、日時、場所、被害ノ景狀、多寡、被告人ノ氏名、年齢、職業、住所、身分、品行、前科ノ有無及ヒ證人其他證據物件ノ所在等總テ犯罪ニ關係アル事物ヲ取調ルヲ以テ其目的ト爲スモノニシテ之ヲ司法警察ノ處分ト稱ス此處分ハ要スルニ檢事ノ公訴ヲ提起實行スルノ資料ヲ得ル爲メニスルモノナレハ此權ハ公訴權ト終始相伴ヒ公訴權ノ生スルヤ捜査權モ共ニ生シ公訴權ノ消滅スルヤ捜査權モ共ニ消滅ス其關係恰モ影ノ形ニ於ケルカ如クナル可シ然ルニ佛國ノ法ニ於テハ司法警察ハ犯罪ヲ捜査シ其證據ヲ集取シ以テ其犯人ノ刑罰ヲ掌ル裁判所ニ交付スルモノナリトノ定義ヲ下シ尙クモ被告事件ヲ公判ニ付シタル上ハ司法警察ハ復タ之ニ干渉スルコトナキカ如ク規定シタルニ依リ我法律ノ所謂司法警察即チ捜査ノ權ヲ亦彼ト同シク證據ヲ集取シ被告人ヲ公判ニ付スルヲ以テ其限度ト爲シ爾後其處分權消滅ニ歸ス可シト解釋スル者ナシトセス是レ我司法警察ト彼司法警察トヲ同視スルニ由テ生スル誤認ニシテ固ヨリ探ルニ足サルモノトス

抑佛國ノ法タル捜査ト豫審トヲ區別セヌ下調處分ニ屬スルモノヲ總括シテ之ニ司法警察ノ名稱ヲ下セリ即チ彼司法警察中ニハ我司法警察ノ一分ト豫審トヲ包含スフオースタン、エリー、氏曰ク司法警察ハ裁判官ノ審理ニ先ツモノニシテ此警察ハ犯罪發覺ノ時ニ始マリ裁判官カ公訴ヲ受理シ自ラ其處分ニ著手スル時ニ至リテ終ルモノナリ(中略)又司法警察ノ全權ヲ有スル者ハ豫審判事ニシテ其他ハ檢事ト雖モ或ル場合ニ限り且ツ或ル制限ニ從フニ非サレハ司法警察ヲ行フコトヲ得ス云々オルトラン氏モ亦同一ノ旨趣ヲ開説セリ以テ彼司法警察ト稱スルモノ、如何ヲ知ル可シ

我法律ハ彼ニ反シ司法警察ヲ以テ判然豫審ト區別シ而カモ司法警察ハ公訴ノ提起實行ノ資料ヲ得ルヲ其主眼ト爲ストノ旨趣ニ依リ檢事ヲ以テ其本務官トシ豫審判事ノ如キハ此處分ニ與カラサルモノトス而シテ豫審ノ處分ハ豫審判事專ラ之ニ任シ有力ナル方法ヲ以テ證據ヲ集取スルコト爲セリ左レハ我法律ニ於テハ捜査即チ司法警察ノ處分ハ公力ヲ用キスシテ之ヲ執行シ其公力ヲ用ユルハ豫審ノ處分ニ限レリ此ノ如ク彼我ノ法律其精神ヲ異ニスルカ故ニ彼法ヲ

以テ我法ヲ解スルノ根據ト爲スヲ得ヌ乃チ公訴已ニ起リ裁判官自ラ其事件
ノ審理ニ著手スルニ至レハ司法警察復タ之ニ干渉スルヲ得ヌト解ス可カラ
ス

三〇

或ハ曰ク捜査ノ必要ハ公訴提起前ニ在リ一旦公訴ノ提起アリタル上ハ裁判官
其職權ヲ以テ總テノ證據ヲ集取ス可キニ因リ司法警察ハ其捜査ニ任スルヲ要
セヌ故ニ公訴ノ提起ヲ以テ司法警察終了ノ期ト爲スモ不當ニ非スト然リ裁判
官ハ其職權ヲ以テ證據ヲ集取スルヲ得ルハ勿論ナリ然レモ裁判官ニ此權ア
ルヲ憑ミ檢事タル者袖手傍觀ス可キニ非ス豫審ト公判トヲ問ハス公訴提起後
ト雖モ尙ホ十分ニ捜査ヲ盡シ新ナル證據ヲ發見セハ之ヲ集取シテ裁判所ニ提
出シ或ハ其集取ヲ裁判所ニ請求シ以テ公訴ノ維持ヲ強メサル可カラヌ故ニ余
ハ斷言ス曰ク我捜査即チ司法警察ハ佛法ト異ナリテ事件公判ニ移ルモ尙ホ其
處分權消滅スルヲナシ又佛法ト異ナリテ此處分ニ付キ公力ヲ用ユルヲ得ヌ
尙クモ人ノ權利ヲ侵害セサル限リハ公訴權消滅スルニ至ルマテ之ヲ執行スル
ヲ得ヘシト然レモ第二審ノ裁判アリタル上ハ復タ事實ノ點ヲ以テ其裁判ヲ

左右スルヲ能ハサルカ故ニ最早捜査ヲ爲スノ必要ナク又捜査ヲ爲スモ其效用
ナキニ因リ此裁判以後ニ於テ捜査ヲ爲ス可キモノニ非サルハ勿論ナリトス
前述ノ如ク捜査ノ權ハ公訴ノ權ニ伴フ可キモノナリトスル上ハ公訴ノ權生シ
タルハ捜査ノ權コ、ニ生シ乃チ其處分ニ著手ス可シ然ルニ犯罪アリテ公訴
ノ權同時ニ生シタルモ當該官吏其犯罪アリタルヲ覺知セサルニ於テハ此權
ヲ實行スルヲ能ハサルト同シク捜査ノ權モ亦當該官吏犯罪アリタルヲ覺知
シタルハニ非サレハ實際之ヲ執行スルヲ能ハサルヤ勿論ナリ此點ハ別ニ細論
スルノ要ナキモヨ、ニ一疑問トシテ研究セサル可カラサルモノアリ开ハ公訴
權停止ノ場合ニ於テハ捜査權モ亦隨テ停止ス可キ乎將タ捜査權ニ限リ之ヲ執
行ス可キ乎ノ疑問ナリトス

第一編ニ於テ既示シタル如ク公訴權停止ノ場合ニ三アリ今其第一ノ場合即チ
被害者ノ告訴ヲ要スル場合ニ付テ之ヲ考フルニ此場合ニ於テハ捜査權ヲモ停
止セサル可カラヌ蓋シ猥褻姦淫ノ罪及ヒ幼者ヲ略取誘拐スル罪ノ如キハ孰レ
モ一家内ノ隱蔽ニ係ルモノニシテ之ヲ摘發セハ爲メニ一家内ノ和合ヲ破リ被

害者ニ對シテ其損害ヲ重スルノミナラヌ一般ノ風俗ヲ壞ルノ基ト爲ルノ恐レアリ此ヲ以テ被害者等ノ告訴ナキ上ハ公訴權ヲ實行セズト定メナカラザルニ處分ハ之ヲ行フヲ妨ケズトスルモハ自然其事ヲ世ニ公ケニシ法律カ被害者ヲ保護シ其事ヲ秘密ニセントスル旨趣ニ反ス又脅迫ノ罪ノ如キ牛馬以外ノ家畜ヲ殺シタル罪ノ如キ其損害ノ生シタル乎否知ルヲ能ハサルニ定メテ損害者ヲシタルナラント臆測シ搜查ニ著手スルモ到底徒勞無益ニ屬ス可キノミナラス或ハ爲メニ人民ヲ煩ハヌヲナントセズ故ニ告訴ヲ要スル事件ニ付テハ其犯罪ノ性如何何ヲ問ハヌ被害者ノ告訴アルマテハ搜查ノ處分ヲ停止セザル可カラヌ

第二ノ原由即チ勅奏任官華族帶勳有位者ノ犯罪ニ付テハ上奏裁可アルマテ公訴權ヲ停止セザル可カラザルモ搜查ノ處分ハ之ヲ停止スルヲ要セス否必ス之ヲ實行セザル可カラヌ抑是等ノ者ノ犯罪ニシテ現行犯ナランニハ上奏ノ手續ヲ經スシテ直チニ處分ヲ爲スト得ルヲ以テ之ヲ逮捕シ訊問スル等嚴格ナル處分モ亦尙ホ之ヲ行フヲ得ヘシ左レハ搜查處分ノ如キ嚴格ナラザルモノハ

之ヲ行フヲ得ルヤ勿論ナリ而シテ其非現行犯ノ場合ニ於ケルモ公訴權實行ノ爲メ上奏ノ手續ヲ爲スニハ先以該事件ノ犯罪タルヲ右勅奏任官等カ被告人ナルコト等ヲ確メザル可カラヌ之ヲ確ムル爲メ諸般ノ取調ヲ爲スハ即チ搜查ノ處分ニ外ナラス以テ搜查ノ停止ス可カラザルコトヲ知ル可シ然レモ元來上奏裁可ヲ要スルモノハ勅奏任官等其人ノ身分ヲ重ニスルノ旨趣ニ出テタルモノナレハ搜查處分ヲ公ケニシ未タ裁可アラザルニ其人ノ品位ヲ傷クルカ如キ事ナキヲ要ス乃チ其搜查ハ秘密ニセザル可カラヌ

第三ノ原由即チ税關又ハ間税本分署ニ於テ犯罪者ノ處分ニ着手シタルハ搜查ノ處分ハ之ヲ行フノ必要ナシ犯罪者通告ノ旨ニ服從シタルハ公訴權消滅シ前ニ爲シタル搜查ハ一切無用ノ事ト爲ル可シ故ニ税關又ハ間税本分署ヨリ告發アルマテハ此處分ヲ停止ス可キモノナリトス

右第一第三ノ公訴權停止ノ場合ヲ除クノ外檢事及ヒ司法警察官ニ於テ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルハ直チニ搜查ニ著手ス可シ而シテ其犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料スルハ告訴告發ヲ受ケタル場合又ハ

現行犯准現行犯ヲ目録シタル場合最多キニ居ル可シ且ツ是等ノ場合ニ付テハ法律ノ規定ヲ要スル事項ナキニ非ス因テ法律ハ本章ヲ二節ニ分チ第一節ニ告訴告發ニ關スル規定ヲ爲シ第二節ニ現行犯ノ事ヲ規定シタリ

第一節 告訴及ヒ告發

告訴ハ被害者之ヲ爲シ告發ハ被害者以外ノ者之ヲ爲スノ別アリト雖モ犯罪事件ヲ官ニ申告シ以テ公訴ノ提起ヲ促スニ至リテハ二者ノ間殆ト差異アルナシ法律ハ概シテ此二者ニ付キ同一ノ規定ヲ爲シタリ
先ツ此告訴告發ニ付キ古來學者ノ論スル所ヲ觀ルニ其說三種ニ岐レタリ第一說ハ之ヲ禁止ス可シト云ヒ第二節ハ之ヲ命令ス可シト云ヒ第三說ハ之ヲ聽許スルニ止ム可シト云ヘリ我法律ハ本則トシテ第三說ヲ採用シ而シテ或ル者又ハ場合ニ付キ第二說ヲ例外トシテ採用シタリ

第一說ニ曰ク古昔希臘羅馬等ノ諸國ニ行ハレタル如ク公訴權人民ノ手ニ存スルモノトセハ被害者タルト否トヲ問ハス尙クモ犯罪事件ヲ申告スル者ハ身自ラ原告ト爲リテ其訴旨ヲ陳辯シ常ニ審理ニ干與シ犯罪ノ證據ヲ提出セザル可

カラス其責ヤ重且ツ大ナリ隨テ不實ノ申告ヲ爲ス者極メテ少ク弊害ノ生スルヲ稀ナリシ然ルニ今公訴ノ權ヲ官吏ノ手ニ移シ人民ノ告訴告發ヲ爲ス者ハ密ニ犯罪事件ヲ申告スルノミニシテ其人ハ證據ヲ提出シ申告ノ事由ヲ辯明シ常ニ審理ニ與カル等ノ事ナク決シテ原告タル大任ヲ負フコトナシ而カモ其申告ハ起訴ノ原由ト爲リ又多クハ犯罪ノ證據ト爲ル是ニ於テ平姦滑ノ徒ハ此ヲ以テ公安ヲ害シ私利ヲ營ムノ具ト爲シ誣告類ニ起リ良民其休安ヲ保ツコト能ハサルニ至ル危險ノ極ナリト謂フ可シ故ニ法律ハ須ラク告訴告發ヲ禁止スヘシト蓋シ此說タル頗ル一方ニ偏スルモノニシテ其當ヲ得サレハ深ク辯セスシテ明ナリ若シ告訴告發アレハ檢事必ス公訴ヲ起サ、ル可カラストセハ弊害ノ生スルコトアル可シト雖モ檢事ハ告訴告發ヲ取捨スルノ權ヲ有シ公訴ヲ起スト否トハ其公平ナル意見ニ任スモノトシ且ツ他ノ一方ニ於テ萬一其告訴告發ノ惡意若クハ重過失ニ出タルモノハ刑事上若クハ民事上ノ責ヲ免カレスト定ムル上ハ決シテ弊害ノ生スル虞ナカル可シ畢竟此說ハ絶對ニ過キタルモノト謂フ可シモシテスキウ巳ニ此說ヲ駁シテ言ハルコトアリ曰ク法官ニ於テ一ハ告訴人告發

人ノ品行及ビ其告訴告發ヲ爲スニ付テ如何ナル利益ヲ有スルヤヲ觀察シニハ其申告ノ材料タル證據ヲ取調ニ然ル後之ヲ取捨スレ其則チ可テリ何テ告訴告發ヲ禁止ス可クシヤ云々

第二説ハ全ク第一説ニ正反對ナルモノニシテ其説ニ曰ク犯罪ヲ發覺ハ現行犯ニ原由スルモノ少クシテ告訴告發ニ基クモノ多クナル可キ筈ナリ然ルニ實際未ダ必シモ然ラサルモノハ告訴告發ヲ以テ法律上ノ義務ト爲サス也此ハ人民ノ自由ニ任セタルニ職由ヒスニ付テ又抑人民ハ公益ノ爲メニ飽クテカラ蓋シ之ヲ害スル者アレバ相濟クテ之ヲ除去ス可キ道德上ノ義務ナルニ拘ハラヌ現ニ公安ヲ擾亂スル者アルコトヲ認知シテ官ニ申告セヌ官亦之ヲ責ムルコトナシトセハ終ニ一人ノ告訴告發ヲ爲ス者ナキニ至ルモ知ル可カラヌ蓋シ道德ノ命モサル所ナルモ法律ハ公益ノ爲メニ之ヲ命スルコトアリ況ヤ告訴告發ヲ爲シ以テ公益ヲ計ルハ道德ノ命スル所ナリ法律之ヲ命スル何ノ不可ナルコトカアラシ反對論者概モ之レ曰ク告訴告發ヲ以テ法律上ノ義務ト爲ヌ上ハ其制裁ヲ設ケ此義務ヲ盡クスル者ヲ罰セザルヲ得ヌ僅ニ告訴告發ヲ爲サハルノ故ヲ

以テ人ヲ刑罰ニ致ヌハ酷ナリト此説果シテ當ヲ得タリトセシカ何故法律ハ罪人鑑定人等ノ呼出ニ應シテ出廷セヌ又宣誓供述ヲ肯セサル者ヲ罰スル乎同シク是レ犯罪事件ニ付キ我カ知ル所ヲ官ニ申立ル者ナルニハ法律上ノ義務トシテ之ヲ缺ク者ヲ罰シ一ハ義務トセヌシテ制裁ヲ設ケヌ是レ如何ナル區別アリテ然ル事實ニ解ス可カラサルナリト此第二説モ亦極端ニ亦ルソ譏ヲ免カレヌ蓋シ情ト理トハ人類社會ニ欠ク可カラサルモノニシテ決シテ偏廢ス可キニ非ズ告訴告發ハ有罪ヲ罰シ公安ヲ保ツノ基ト爲ルカ故ニ人民タル者必ス之ヲ爲ス可シト云フハ理ナリ人間誰カ過ナカラシ萬一過テ法律ニ觸ル、モ訴テ以テ直ト爲スハ我カ忍ヒサル所ナリト云フハ情ナリ思フニ道德ハ情理二者ノ間ニ處シテ宜シキヲ得ルヲヨソ命令スルモ其一方ニ偏シテ他人ノ罪科ヲ許ク可シト命令スルモノニ非サル可シ左レハ告訴告發ハ道德上ノ義務ナリト斷定ス可カラヌ今道德上ノ議論ハ姑ク舍キ專ハラ公益ノ點ニ付テ之ヲ觀察スルニ告訴告發ヲ命令スルハ必シモ公益ト爲ラス反テ之ヲ害スルニ至ルコトナシトセス例ハ甲者アリ乙者ノ罪ヲ許ク乙者何ソ甲者ノ所爲ヲ快シトセンヤ是ニ於テ

乎報復トシテ甲者ノ罪ヲ討ク曰ク是レ法律ノ命令ニ從フナリト此ノ如ク人々互ニ其罪ヲ討ク之ヲ公益ヲ計ルモノナリト謂フ可ケンヤ且ツ告訴告發ヲ爲サ、ル者制裁トシテ刑罰ヲ科スルルハ一罪ノ爲メニ數罪ヲ生スルニ至ルキ必然ナリ例ヘハ劇場等多衆集會ノ場所ニ於テ一罪ヲ犯ス者アリ之ヲ目撃スル者幾百千人必シモ皆舉テ告發スルヲ期ス可カラズ若シ幾百千人告發ヲ怠リタルハ悉ハク人ヲ犯罪人トシテ處罰セサル可カラズ加之告訴告發ヲ怠慢ヲ以テ一ノ犯罪ト爲ス上ハ他人ノ怠慢ヲ知テ告發セサル者亦之ヲ犯罪人トセサル可カラズ此ノ如ク一犯罪ノ爲メ續々連及者ヲ生スルハ豈之ヲ公益ノ爲メニ利アリト謂フ可ケンヤ論者ハ證人鑑定人ニ對スル法律ノ規定ヲ擧ケテ告訴告發ヲ命令ス可キノ例證ト爲スモ是レ其當ヲ得タルモノニ非ス何トナレハ證言鑑定ノ義務ハ法律カ常ニ必ス命令スルモノニ非ス即チ犯罪ヲ見聞シタル者ハ進ンテ證言ス可シ特別ノ識能ケル者ハ進ンテ鑑定ス可シト命令シタルニ非スシテ裁判所ヨリ特ニ命セラレタル場合ニ於テ之ニ應ス可シト命令シタルニ過キス故ニ犯罪アルヲ知リタル者進ンテ告訴告發ス可シト一般ニ命令スルモノト同視

スルヲ得サルナリ、
第一說第三說共ニ探ルニ足ラズ其中間ニ在ルモノ即チ禁止モ爲サス命令モ爲サス一ニ人々ノ意ニ任ス可シト云ヘル第三說ハ最モ當ヲ得タルモノニシテ此說ニ付テハ非難ノ容ル可キモノナシ是レ我法律カ本則トシテ之ヲ採用シタル所以ナリ
舊律ニ依ルニ千名犯議ト稱スル一種ノ犯罪ヲ規定シ子孫カ父母祖父母ノ犯罪ヲ訴ハ妻カ夫ノ犯罪ヲ訴フルカ如キ皆之ヲ罰シタリ即チ當時ニ在リテハ或ル身分上ノ關係アル者ニ付テ告訴告發ヲ爲スヲ嚴禁シ幾分カ第一說ヲ採用シタルモノ、如シ然ルニ刑法ニ於テハ復タ是等ノ犯罪ヲ規定セサルノミナラス此法律ニ於テ至少第一說ヲ排斥シ一般ニ告訴告發ヲ爲スヲ許シタルヲ以テ子トシテ其父母ノ犯罪ヲ告訴告發スルモ妨ケナキト爲レリ今專ラ道徳ノ一點ヨリ觀察スルルハ舊律ノ規定寧ロ新法ノ規定ニ優レルカ如クナルモ新法ノ意ハ強テ子タル者ヲシテ其父母ノ犯罪ヲ告訴告發セシメントスルニ在ラス之ヲ爲スト否トヲ子タル者ノ良心カ指定スル所ニ任セタルニ過キス左レハ新法

ハ道德法ノ範圍内ハ侵入セザルヲ決シテ道德法ヲ蹂躪シタルモノト
 謂フ可カラズ
 第一説ハ新法全文之ヲ排斥シタルモノ第二説ハ機分カ之ヲ採用シタリ今其場合
 ヲ舉クレハ左ノ如シ
 第一ノ場合ハ第五十二條ニ之ヲ規定ス
 「官吏公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルモノト認知シ又ハ犯罪アリト思料シ
 タルトキハ速ニ其職務ヲ行フ他ノ檢事ニ告發ス可シ
 告發ハ官吏公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事
 實參考ト爲ル可キ事物ヲ添ヌ可シ
 此ノ如ク官吏公吏ニ對シ告發ノ義務ヲ負ハシメタルノ理由如何思フニ官吏公
 吏タル者ハ其主管ノ事務ニ付テ一切之責ニ任シ専心以テ其事務ヲ舉テ
 勉メサル可カラズ然ルニ其職務ヲ行フニ當リ其職務ニ密著ノ關係アル犯罪
 ルト認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル之ヲ告發シテ起訴ヲ促ス可ク或
 ハ故意ヲ以テ怠慢ニ因リ之ヲ賦過スルニ於テハ假令其事務一旦局ヲ結フモ到

底其職務ヲ行フノ旨趣ヲ達スルヲ能ハサル可シ例ヘハ民事裁判官ニ於テ民事
 訴訟法ノ審理中當事者ノ提出シタル證書ハ其偽造變造ニ係ルト顯然タリト認
 知シナカラ告發ヲ爲ス可ナク仍ホ其偽造變造ノ證書ヲ有效ノ證據ナリトシ之
 ニ依テ裁判ヲ下スモ可ナリトモ直者ヲ害シ曲者ヲ利スルノ惡結果ヲ生ス
 登記官吏カ登記ノ事務ヲ取扱フニ當リ登記請求者カ冒認販賣等ノ罪ヲ犯スニ
 相違ナシト思料シナカラ告發ヲ爲サス其偽登記ヲ爲スカ如キモ亦然リ故ニ是
 等ノ場合ニ於テハ義務トシテ必ス告發ヲ爲ス可キモノト定メタルモノナリ
 然レモ告發ノ義務ハ官吏公吏ノ身分ニ附着スルモノニ非スシテ其職務ニ附着
 スルモノナリ故ニ官吏公吏ニモモセヨ又其職務執行ノ際ニモモセヨ其職務ニ關係
 ナキ犯罪ニ係ルモノハ此義務ヲ有スルモノナシ例ヘハ登記官カ登記事務取扱中其
 登記若クハ其近傍ニ於テ殺傷盜奪等ノ犯罪アルト認知シタル場合ノ如キ之
 カ告發ヲ強要スルノ理由ナキヲ以テ法律ハ決シテ義務ヲ負ハシムルコトナシ右
 ニ舉示シタル法文ニ其職務ヲ行フニ因リト記シテ其職務ヲ行フニ當リト記セ
 サルハ即チ此區別ヲ示シタルモノナリ

官吏公吏告發ノ義務アル場合ニ於テ其義務ヲ盡サ、ルキハ如何ナル制裁ヲ加
フ可キ乎法律ハ別ニ之ヲ規定ヲ爲サスト雖モ事情ニ依リ相當ノ懲戒處分ヲ施
ス可シ是レ其惟一ノ制裁ナリ

第二ノ場合モ亦官吏公吏ニ告發ノ義務ヲ負ハシメタルモノニシテ其第一ノ場
合ト異ナルハ被ハ一般ノ官吏公吏ニ關シ此ハ特定ノ官吏公吏ニ關スルナリ是ナ
リ而シテ此第二ノ場合ヲ別テ二ト爲ス一ハ第五十八條第二項ニ之ヲ規定シ一
ハ第五十九條第二項ニ之ヲ規定ス

第五十八條第二項ニハ罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコト
ヲ知りタルトキハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事違警罪ニ付テハ
即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シトアリテ違ハ司法警察官及ヒ巡查憲兵卒カ
其職務ヲ行フニ當リ右輕罪違警罪ノ現行犯アルコトヲ認知シタル場合ニ於テ告
發ノ義務アリト爲シタルモノナリ畢竟司法警察官ハ犯罪捜査ノ職分アリ巡查
憲兵卒ハ司法警察官ニ非サルモ其手足ト爲リ以テ其捜査ノ職ヲ補助ス可キモ
ノナルカ故ニ現行犯アルニ當リ之ヲ默過ス可キニ非ス是レ告發ノ義務ヲ負ハ

シメタル所以ナラシ然レモ非現行犯ニ付テモ此等ノ官吏公吏ハ其犯罪ヲ默過
セシテ十分之ヲ捜査シ而シテ其結果ヲ巡查憲兵卒ハ司法警察官ニ報告シ司法
警察官ハ檢事ニ報告ス可キヤ勿論ナリ然ラハ現行犯ニ付テハ告發ス可ク非現
行犯ニ付テハ報告ス可シト云ヘルカ如キ區別ハ寧ろ之ヲ廢シ一様ニ出シム
ル方立法上其當ヲ得タルモノナランカ

法文ニ依レハ總テノ司法警察官ハ違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署即チ警
察官ニ告發ス可キモノトス然レモ警察署員タル警視警部警部補ニシテ自ラ即
決ノ處分ヲ爲ス可キモノ、如キ自ラ告發シテ自ラ處分ヲ爲スハ穩當ナラサル
ノミナラス別ニ告發ヲ爲サシムルノ必要アルヲ見ス故ニ法文ニ司法警察官ト
アルハ違警罪ノ場合ニ付テハ前掲以外ノ司法警察官即チ即決ノ處分ヲ爲スコ
ト得サル者ノミヲ指シタルモノト解釋スルヲ相當ナリトス

又第五十九條第二項ニハ其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ建補及ヒ告發ニ
付テハ調書ヲ作ル可シトアリ其第一項ニハ巡查憲兵卒被告人ヲ建補シタルト
キハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シトアリ左レハ巡查憲兵卒ハ必ス告發ヲ

爲ス可シトノ明文ナキハ右第三項ノ告發ニ付テ調書ヲ作ル可シトアル旨リ之ヲ推セル巡査憲兵卒ハ司法警察官ニ對シテ告發ヲ爲サシル可カラサルヤ疑ナシ而シテ此告發ハ書面ヲ以テ書スシテ必ス口頭ヲ以テス可キトモ亦自ラ明ナリ

第三ノ場合ハ常人ニ對シ告發又ハ告發ヲ爲ス可キト命シタルモノニシテ第六十一條ニ之ヲ規定ス即チ常人カ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯ニ付其被告人ヲ逮捕シタルルハ之ヲ司法警察官ニ引致スルヲ能ハサルルハ假ニ之ヲ巡査憲兵卒ニ引渡スヲ得而シテ巡査憲兵卒ニ引渡シタルルハ速ニ告發又ハ告發ヲ爲サシル可カラサルモノトス是レ蓋シ其犯罪ノ現行犯ニ係リ適法ニ逮捕シタルモノナルヲ以テ證明セシメンカ爲メ特ニ此義務ヲ負ハシメタルモノナリ今此理由ヨリ推セル被告人ヲ司法警察官ニ引致シタル場合ニ於テモ必ス其逮捕ノ事由ヲ説明セサル可カラサルヲ以テ亦自然告發又ハ告發ヲ爲サシル可カラサルモノトス以上三箇ノ場合ノ外告發告發ヲ義務ト爲シタルモノナシ明治十七年第三十二

就布告爆發物取締罰則第八條ニ依レテ該罰則ニ記載シタル重罪アルヲ以テ認知シナカラ警察官ニ告知セズ又ハ書ヲ被ラントスル者ニ告知セサル者ハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ストアリ其警察官ニ告知スルヲ命シタルハ純然タル告發ヲ命シタルモノニ非サルモ其性質ハ告發ノ義務ヲ負ハシメタルト異ナル所ナシ但書ヲ被ラントスル者ニ告知シタルルハ別ニ警察官ニ告知セサルモ該條ノ制裁ヲ受ケサルハ勿論ナリトス茲ニ告發告發ノ總論ヲ終ルニ臨ミ一言ス可キコトアリ收稅ニ關スル法律中往々告發者ニハ同法律ニ依リ犯人ニ科シタル罰金ノ一分ヲ給與スル旨ヲ規定シタルモノナリ此規定タルヤ單ニ政略上ヨリ論ズレハ右給與ヲ得ルノ目的ヲ以テ犯則事件ヲ告發スル者多ク生シ爲メニ脫稅者ヲ罰スルヲ得ルノミナラス間接ニ一般徵稅ヲ取締ト爲リ自ラ脫稅ヲ制止シ國庫ノ受ケ若クハ受ク可キ損害ヲ回復シ若クハ豫防スルノ利アリ而シテ告發者ニ賞金ヲ與フルモ是レ其犯則者ヨリ徵收シタル罰金ノ中ヨリ支給スルモノナレハナリ國庫ハ毫モ損失スル所ナシ故ニ此規定ハ其當ヲ得タルモノト如ク見ユ然レモ賞金ヲ得ンカ爲メニ

三二六

告發ヲ爲スルハ公益ノ爲メニ之ヲ爲スト日ヲ同シテ論ズ可カラズ其告發者ノ心情ヲ卑劣ナル實ニ之ニ過タルモノナク其心中德義ヲ存セザル未甚シテ罪ヲ可シ然ルニ國家之ヲ實與ス國家モ亦卑劣ノ譏ヲ免カレサル可シ若シ夫レ此ノ如キノ告發猶ホ公益ノ爲メニ之ヲ獎勵スルノ必要アリト言ハシカ何カ故ニ公益ニ大關係ナル犯罪ニ付テ之ニ同一ノ規定ヲ爲サ、ル乎古者大罪ヲ犯ス者アルハ實ヲ懸ケテ之ヲ索メタルノ例アリ今ヤ此例ヲ廢シ而シテ區々タル稅法上ノ犯罪ニ限リ此規定ヲ爲ス余ハ其何ノ故ナル乎乎解スルノ能ハス速ニ廢止セザレンヤ望ムヤ切ナリ

併告訴告發ハ何人ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ヘキ乎前ニモ屢陳ヘタル如ク告訴ハ被害者之ヲ爲シ告發ハ被害者ニ非サル者之ヲ爲ス別アルノモニシテ此兩者共ニ其之ヲ爲ス人ノ身分等如何ヲ論ゼザルナリ即チ未成年者禁治産者等ノ無能力者ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得ヘク又外國人ト雖モ之ヲ爲スノ權ヲ有ス第四十九條第五十三條ニ何人ニ限ラス云々ト明記シタルハ此意ヲ示シタルモノナリ畢竟犯罪ノ遠ニ發覺スルハ公ケノ利益大ナルニ因リ何人ニテモ犯罪ヲ認知シタ

ルハ早ク其レヲシテ官ニ申告セシメシカ爲メ其人ニ制限ヲ付セザルナリ

告訴ハ被害者之ヲ爲ス可キモノナルモ其無能力ナル場合ニ於テハ自身ニ其權アルコトヲ覺ラサル等ノ爲メ現ニ犯罪ノ爲メ損害ヲ被リナカラ賦クニ付シ去ルコトナシトセシメ因テ其法律上ノ代理人當然本人ニ代リ告訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ是レ實ニ第五十四條第二項ノ規定スル所ナリ而シテ此場合ニ於テ本人ノ委任ヲ受クルコトヲ要セザルハ言ヲ換タス

告發ニ付テハ法律上ノ代理人本人ニ代リ之ヲ爲スコトヲ得ヘシトノ規定ナシ是レ其本人無能力ニシテ自ラ告發ヲ爲サ、ル場合ニ於テ其法律上ノ代理人告發ヲ爲サント欲セハ自己ノ名義ヲ以テ之ヲ爲スコシ故ラニ無能力者ノ名義ニ於テ之ヲ爲スニ必要ナクレハナリ

有能者告發告發ヲ爲スニハ必スシモ自身當該官署ニ出頭シテ之ヲ爲スヲ要セシ疾病其他ノ事故アルト否トニ拘ハラス代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ已ニ委任ト云フ上ハ其委任シタルコトヲ證明ス可キハ勿論ナリ尤モ官吏公吏職務上ノ告發ニ付テハ代人ヲ用ユルコトヲ許サズ官職ハ私ニ他人ニ委任ス可キ

告知告發ヲ受ク可キ者何人ナル乎告訴ニ付テハ第四十九條第一項ニ於テ
〔何人ニ限ラズ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ
地ノ檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得〕
ト規定シ告發ニ付テハ第五十三條ニ於テ

〔何人ニ限ラズ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五
十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢察官又ハ司法警
察官ニ告發スルコトヲ得〕

ト規定シ孰レモ檢察官又ハ司法警察官ニ於テ之ヲ受ク可キモノト爲シタリ是レ
檢察官ハ公訴ノ提起ヲ擔保スルモノナレハ該官ニ犯罪事件ヲ申告シ以テ其公訴
ノ提起ヲ促スハ當然ナリ又司法警察官ハ犯罪ヲ捜査シ其結果ヲ檢察官ニ報告ス
可キモノナレハ該官ニ犯罪事件ヲ申告スルハ間接ニ公訴ノ提起ヲ促スコト爲
ス可キノミナラス該官ノ配置各地ニ普ク申告者ノ爲メニモ違ク裁判所々在
ノ地ニ到ルノ勞ナク公私ノ爲メニ便利ナルヲ以テ該官ニモ告訴告發ヲ爲スコ
ト

ヲ得ベキモノト爲シタルモノナリ

檢察官及ヒ司法警察官ハ各土地ニ付テハ管轄ヲ有ス而シテ其管轄ニ屬セザル事
件ニ付テハ何等ノ處分ヲモ爲スコトヲ得サルモノトス横濱ノ犯罪ヲ東京ノ檢察
司法警察官ニ告訴スルモ東京ハ其事件ノ裁判管轄ニ非サル上ハ到底東京ニ於
テ公訴ノ提起アル可キ謂ハレナク隨テ東京ニ於テ捜査スルモ其效ナシ故ニ犯
罪ノ地タル横濱若クハ被告人他ノ地ニ在ルルハ其地ニ於テモ告訴ヲ爲スコトヲ
得セシメ此以外ノ地ニ於テハ之ヲ爲スコトヲ許サス前掲第四十九條第一項ニ犯
罪ノ地若クハ被告人所在ノ地云々トアルハ即チ裁判管轄ノ地ヲ指シタルモノ
ト解釋セザル可カラズ今此法意ヲ推シテ之ヲ論スレハ法文ニ單ニ檢察官トアル
モ這ハ是レ裁判所ノ檢察官ヲ指シタルモノニシテ裁判管轄ノ地ニ在ル檢察官
上ハ其階級ノ如何ヲ問ハズ總テ之ニ告訴スルコトヲ得ルモノト爲ス可カラズ何
トナレハ下級裁判所ノ檢察官ハ上級裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ニ付テハ法律上
特例アル場合ノ外何等ノ處分ヲモ爲ス可キモノニ非サレハナリ
前述ノ如ク告訴ハ管轄裁判所ノ檢察官又ハ裁判管轄ノ地ノ司法警察官ニ爲ス可

三三〇

キモノナルモ告發ニ付テハ前掲第五十三條ニ其所在ノ地トアリテ被告人所在ノ地ト記載シアラス而シテ其ノ字ハ前文何人ニ限ラヌトアルヲ承ケタルモノトナレハ告發ハ告訴ト異ナリテ告發人所在ノ地ニ於テモ之ヲ爲スヨリ得ヘキモノト解釋セサル可カラヌ何カ故ニ告訴告發ノ間此ノ如キノ差異アル乎思フニ被害者所在ノ地ハ即チ犯罪ノ地ナルヲ通例トス左レハ犯罪ノ地ニ於テ告訴ヲ爲スヨリ得ルト定メタル上ハ別ニ被害者所在ノ地ニ於テモ之ヲ爲スヨリ得ヘシト定ムルノ必要ナシ之ニ反シ被害者以外ノ者ハ其身犯罪ノ局面ニ當リタル者ニ非サルヲ以テ常ニ必ズ犯罪ノ地ニ在ルナラント推定ス可カラヌ故ニ犯罪ノ地ニ非スト雖モ其現在スル地ニ於テ告發スルモ可ナリト爲シタルモノナラン然レモ被害者必ズ犯罪ノ地ニ現在スルヲ期シ難ク犯罪ノ地ヲ去リタル後其犯罪ノ爲メニ害ヲ被リタルヨリ覺知スルヨアル可ク又犯罪ノ地ニ在ラサルモ其犯罪ノ爲メニ害ヲ被ルヨアル可シ故ニ告發ニ付キ本人所在ノ地ニ於テ之ヲ爲スヨリ許ス上ハ告訴ニ付テモ同ク被害者現在ノ地ニ於テ之ヲ爲スヨリ許スヲ相當ナリトス

官吏公吏ノ職務上ノ告發ニ付テハ私ノ告發ト異ナリテ第五十二條ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シト明言シ以テ官吏公吏ハ司法警察官ニ告發セスシテ直チニ檢事ニ告發ス可ク又其告發ハ犯罪ノ地ニ於テ之ヲ爲スニ及ハス其職務ヲ行フ地即チ自己所在ノ地ニ於テ之ヲ爲ス可キモノト定メタリ其司法警察官ノ手ヲ經ルヲ要セスト爲シタルモノハ此職務上ノ告發ハ公文往復ノ式ニ依リ爲ス可キモノニシテ私ノ告發ノ如ク告發人自ラ其告發ヲ受ク可キ官吏公吏ノ面前ニ出ルヨリ要セサルカ故ニ直チニ檢事ニ宛テ、告發狀ヲ送致セシムルモ敢テ不便ナカル可キヲ以テナリ尤モ法律ノ意ハ司法警察官ニ告發スルヨリ禁止シタルニ在ラサルヲ以テ現行犯ノ如キ急速ノ處分ヲ要スル場合ニ於テハ一面ハ式ニ依テ檢事ニ告發シ一面ハ司法警察官ニ通告シテ其處分ヲ求ムルヨリ妨ケサルナリ又職務ヲ行フ地ト限リタルハ犯罪ノ地他所ナル場合ニ於テ故ラニ其地ノ檢事ニ告發セシムルノ必要ナク其官吏公吏所在ノ地ノ檢事ヲシテ其告發ヲ受ケ之ヲ犯罪ノ地ノ檢事ニ轉送セシムルモ敢テ不都合ナシト認タルニ由ル

又現行犯ノ場合ニ於テ司法警察官及ヒ巡查憲兵卒ノ爲ス可キ告發ニ付テハ前掲第五十八條第二項第五十九條第二項ニ特別ノ規定アルヲ以テ固ヨリ其規定ニ從ハサル可カラス

之ヲ要スルニ告訴告發ヲ爲ス可キ土地ニ付テハ種々ノ區別アリト雖モ其告訴告發ヲ受ク可キ者ハ檢事又ハ司法警察官ノ外ニ出テス而シテ茲ニ檢事ト稱スルハ專ラ第一審裁判所ノ檢事ヲ指シタルヤ疑ナシト雖モ第一審裁判所ノ檢事ヲ除クノ外餘ノ檢事ハ告訴告發ヲ受クルノ權ナシト誤解ス可カラス裁判所構或法第八十三條ニ檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ各管轄區域内ノ裁判所ノ檢事ノ職務ノ範圍内ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有ス下アリ告訴告發ヲ受クルハ檢事ノ職務ノ一ナルヲ以テ檢事總長等亦此職務ヲ自ラ行ヒ告訴告發ヲ受クルコトヲ得ヘキヤ論ヲ埃クヌ然レニ檢事總長等カ告訴告發ヲ受クルハ其職權ニ屬シ決シテ其義務ニ屬セズ殊ニ其地位ヨリ觀察スルモ平常ハ軍口之ヲ受ケサルヲ可トス但檢事司法警察官カ故ナシ告訴告發ヲ受ケス又ハ之ヲ受クルモ起訴ノ手續ヲ爲サ、ルニ因リ更ニ檢事總長等ニ向テ告訴告發ヲ爲ス者アルハ

ハ之ヲ受ケテ相當ノ處分ヲ爲ス可シ即チ其告訴告發ニ係ル事件起訴ス可キモノト認ムルハ當該檢事ニ起訴ス可キコトヲ命令シ之ニ反スル場合ニ於テハ告訴人告發人ニ其旨ヲ通告ス可キモノトス

告訴告發ノ法式ハ甚タ簡單ニシテ先ツ私ノ告訴ニ付テハ第五十一條ヲ以テ「告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作シ告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ」

ト規定シ而シテ此規定ハ第五十三條ヲ以テ私ノ告發ニモ之ヲ適用スルコト爲シタリ今此規定ニ依レハ告訴告發ハ本人ノ署名捺印シタル書面即チ告訴狀告發狀ヲ差出シテ之ヲ爲スヲ本則トス蓋シ告訴人告發人ハ其申告スル所ノ事ニ付テハ總テ其責ニ任シ萬一過誤ノ大ナルモノアレハ被告人ニ對シテ賠償ノ義務ヲ負ヒ又時アリテハ刑事上ノ責ニ任セサル可カラス然ルニ其人ニシテ判明ナラサルニ於テハ他日裁判上其人ヲ訊問スルノ必要生スルモ之ヲ呼出スニ由

ナク又被告人ヨリ賠償ヲ要求セントスルモ之ヲ奈何トモスルヲ能ハサル可シ
殊ニ被害者ノ告訴ヲ要スル犯罪ニ付テハ其告訴ハ公訴權實行ノ基本ト爲ルモ
ノナレハ第一ニ被害者カ告訴ヲ爲シタルコトヲ證明スルヲ必要トス然ルニ之ヲ
證明スルモノナク又其告訴ヲ爲シタル者果シテ被害者ナリヤ否ヤ知ル可カラ
サルニ於テハ審ニ公訴ヲ起スモ其効ナキノミナラス或ハ事ヲ好ム者昨テ被害
者ナリト稱シテ告訴ヲ爲シ以テ人ノ名譽ヲ毀損センコトヲ謀ル等ノ事ナシトセ
ス是レ告訴人告發人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ爲ス可シト定メタル所以ナ
リ
法文ニ依レハ告訴狀告發狀ニハ本人ノ署名捺印アルヲ以テ足ル其住所職業身
分ノ如キハ之ヲ記載スルコトヲ要セサルカ如シ然レモ世上往々同氏名ノ者アリ
又同氏名ノ者ナシトスルモ本人ノ住所等不分明ナランカ他日喚問等ノ必要ア
ルニ當リ搜索ノ手數ヲ煩ハス可シ故ニ本人ノ誰タルコトヲ確ム可キ事柄ハ記載
セシムルヲ相當トス
告訴告發ニ書面ヲ用ユルハ最も確實ナル方法ニシテ且ツ官ノ手數ヲ煩ハスコ

ナキヲ以テ法律ハ此方法ヲ本則ト定メタルモ通常人民ノ中ニハ文字ヲ書スル
ヲ能ハサル者アル可ク又文字ヲ知ルモ書面ヲ作ルノ勞ヲ厭フ者モアル可シ然
ルニ必ズ書面ヲ用ユ可シトスルハ是等ノ者ハ遂ニ告訴告發ヲ爲サスシテ已
ム可シ因テ變則トシテ口述ヲ以テ告訴告發ヲ爲スコトヲ許シタリ而シテ此場合
ニ於テモ官吏其聽取シタル所ヲ調書ニ記載シ之ヲ讀聞カセタル上本人相違ナ
シト申立レハ之ニ署名捺印セシム若シ署名又ハ捺印スルコト能ハサルハ其旨
ヲ附記スルヲ以テ足レリトス
諸告訴人告發人ハ書面ヲ以テスル場合ト口述ヲ以テスル場合トニ論ナク成ル
可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立テサル可カラヌ是レ第五十條
第五十三條ノ命スル所ナリ畢竟犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタリ又ハ犯罪アルコトヲ
認知思料シタリト申立ツルノミニテハ犯罪捜査ノ便ト爲ルコト大ナラス故ニ此
規定アリ但法律ハ成ル可クト云ヒテ必ズト云ハス是レ此申立テ告訴告發ヲ要
件ト爲スルハ爲メニ犯罪發覺ノ道ヲ塞クニ至ルノ恐アレハナリ
公ノ告發ニ付テハ第五十二條第二項ヲ以テ

告發ハ官吏公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證憑及ヒ事實參考ト可ル可キ事柄ヲ添フ可シ

下規定シ私ノ告發ニ於ケルカ如ク口述ヲ以テ之ヲ爲スヨリ許サズ是レ此告發ハ其性質上公文ノ式ヲ以テ爲ス可キモノナルナリ官吏公吏ニシテ目ニ

二丁字ナキ者ナル可キ理ナク又書面ヲ作ルノ勢ヲ厭フ可キ謂ハレナケレハナリ又證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事柄ヲ申立ツルニ止マラスシテ之ヲ添フ可シト定メタルハ通常人民ノ如ク此規定アルカ爲メニ告發セシテ已ムノ恐アルナケレバナリ但法律ハ同シク成ル可ク云々下命スルニ止マルヲ以テ或ハ職務上ニ差支アルカ爲メ或ハ其事柄ヲ隨意ニ處分スルノ權ヲキ等ノ爲メ告發狀ニ添フルヲ能ハサル場合ニ於テハ其旨ヲ申立ツルヲ以テ是レヲトス

前述ノ法式ヲ履キ告訴告發ヲ爲スルハ縱令其申立ニ係ル事實犯罪ト爲ラストモ思料シ又ハ其事實ノ有無ニ付キ疑アルモ必ズ之ヲ受理セサル可カラサル乎此第三ノ場合ニ於テハ其告訴告發ヲ棄却シテ妨サシ否之ヲ棄却スルヲ相當トス何トナレハ告訴告發ハ元來犯罪ヲ申告スルモノナレハ其申告ニ係ル事實犯罪

ヲ構成モサレバ顯然タルニ於テハ名ハ告訴告發ト稱スルモ事實告訴告發ニ非ラレハナリ例ハ貸金辨濟法其期限ヲ徒過シタルハ即チ詐欺取財ナリト稱シテ告訴ヲ爲スカ如キモ是ナリ之ニ反シ實際之アル可カラスト見ユルモ其申告ニ係ル事實十分犯罪ヲ構成スルモノナリルハ之ヲ棄却スルヲ得ヌ例ハ監督人ヲ殺シタリト申告スルカ如キ監督タル者決シテ此ノ如キ行爲ヲ行フ者ニ非スト情スルモ兇殺人ハ一ノ犯罪タルヲ以テ必ズ其申告ヲ受ケテル可カラズ殊ニ司法警察官在リテハ其身告訴告發ヲ取捨スルノ權利ナキヲ以テ必ズ之ヲ受ケテ檢察官ニ送致セサル可カラズ但第四十九條第二項ニ明言スル如ク違警罪ニ付テハ法律ニ從ヒ即決ノ處分ヲ爲シ又此處分ヲ爲スノ權ナキニ於テハ其權ヲ有スル警察署ニ之ヲ送致ス可キモノトス

第五十五條ニ依リテ告訴告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコトヲ得云々下ナリ故ニ其事柄ヲ落着セサル限ハ何時ニテモ之ヲ取下ク又ハ前ニ申立テタル所ヲ變更スルハ告訴人告發人隨意ナリトス而シテ此取下及ヒ申立ノ變更ニ付テハ法律ハ何等ノ法式ヲモ規定セズ唯モ告訴告發ヲ爲スニ付テハ法

分り爲す。又、非現行犯ノ場合ニ付テハ、部重ナル法式ヲ依ルニ非サレハ、人ノ權利ニ對スル侵害ヲ爲スルコトヲ得ルシメ、又、現行犯ハ法律上特別ノ處分ヲ爲スルコトヲ許スルニ付テハ、制裁ナクシテ、其特別ノ處分ハ左ノ如シ。

第一、刑事ノ令狀ハ、又、常軌外ニ雖モ、或ハ被害者人ヲ逮捕スルコトヲ得。

第二、檢事ハ、總テノ令狀ヲ司法警察官ハ、拘留狀以外ノ令狀ヲ發スルコトヲ得。

第三、檢事及司法警察官ハ、其ニ公力ヲ以テ人ノ家宅ヲ搜索シ、財産ヲ差押ヘ、其他被告人證人ヲ訊問スル、捕獲審判事ニ屬スル處分ヲ犯スコトヲ得。

第四、檢事ノ起訴ナシ、雖モ、豫審判事庭ニ證據ニ著手スルコトヲ得。

右ノ如シ、現行犯ニ付テハ、特別ノ處分法アリ、左レハ、現行犯ノ區域ハ、極メテ之ヲ制限シ、容易ニ之ヲ超越スルコトナカシムルコトヲ要ス。是レ第五十六條第五十七條ノ規定アル所以ナリ。

第五十六條ニ曰ク、

〔現行犯罪ナシ、現ニ行モ、又ハ、現ニ行モ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ〕

ト、其現行ノ際發覺シタル罪ノ現行犯ニシテ、何人モ爭ハサル所ニシテ、殆ト法

律ノ明文ヲ要セス、但其現ニ行モ終リタル際ニ發覺シタルモノハ、純理上之ヲ現行犯ト稱スルコトヲ得、又、其所分ハ、急速ヲ要スル點ニ至リテハ、現行ノ際發覺シタルモノト異ナルコトナシ、例ヘハ、盜アリ、現ニ財物ヲ盜取スルヲ目擊シタルト、其已ニ財物ヲ盜取シ、其場ヲ立去ラントスルヲ目擊シタルト、之カ發見ノ遲速ニ因リ、吾人ハ其所分ヲ異ニス可シトノ感想ヲ懷カス、反テ共ニ速ニ其犯人ヲ逮捕ス可シト思考ス可シ、是レ犯罪決行ノ時ハ、幾分カ過去ニ屬スルモ、猶ホ現ニ行モ終リタル際ニ發覺シタルモノナル上ハ、之ヲ現行犯ト爲シ、特別ノ處分ヲ爲スコトヲ得ルシムル所以ナリ。

現ニ行モ終リタル際トハ、犯罪決行ノ時ヲ隔ルルコト幾何時間内ニ在ルノ意ナル乎、法律ハ、其區域ヲ明定セズ、是レ何分何十分若クハ、何時間ト豫定スルコト能ハサルニ由ル蓋シ、犯罪ノ性質方法等ニ依リ、其痕跡ノ早ク消滅スルモノト否ラサルモノトアリ、一、概ニ時間ヲ以テ、其區域ヲ劃スルコトヲ得、又、犯所ノ何如ニ依リ、其犯罪後、數時間ヲ經過スルモ、仍ホ現行犯トシテ處分スルコトヲ許サ、又、可カラサル場合ナシトモ、例ヘハ、甲者アリ、山中ニ於テ乙者ヲ殺シタルニ、丙者傍ヲ過キ

三三二

受之ヲ自覺シ直ニ逃走シ警察署ニ告發ス然ルニ警察署ハ遠隔ノ地ニ在ルカ
 爲メ病者ニ警察署ニ於テ即時該犯罪ヲ警察官ニ發覺シタル時ハ其犯罪決行人
 時ヨリ計算スルハ起點七八時間ヲ經過シタリ此場合ノ如キ仍ホ現ニ行ヒ終リ
 タル際ニ發覺シタル時ニ爲サシル可カラズ若シ之ヲ現行犯ト非ストセハ事
 難急速ニ處分ヲ要スルニ拘ハシテ警察官ハ搜查處分ヲ爲スノ外袖手傍觀シ其
 犯人未ダ其犯所ナル山中ヲ立去ラサルヨリ察知シナカク之ヲ逮捕シ著手ス
 ル時能ハサルに至ラン是レ豈法律ノ望ム所ナランヤ要スルニ犯罪決行ノ後空
 シ少數日ヲ經過シタル場合ノ如キハ格別未ダ多クノ時間ヲモ經ス且ツ罪跡灼
 然トシテ現存シ實際急速ニ處分ヲ要スル情況場合ニ總テ現行犯トシテ處分ス
 ルハ自防ケテ救ヒテノ意思者トシテ之ヲ現行犯トシテ處分スルハ其
 現行犯トシテ處罪處罰ニ付キハ准現行犯ナルモノガリテ現行犯ニ於テアルト同シク
 特別ノ處分ヲ爲スリテ罰五十七條ハ其場合ニ規定シテ日ク日ニ於テ
 現行犯トシテ處罪ニ付キテハ現行犯トシテ處分スルニ付キハ其
 罪ニ處スルニ付キテハ現行犯トシテ處分スルニ付キハ其

三三三

現行犯トシテ處罪處罰其他ノ物件ヲ携帶シ又ハ身體被服ノ顯著ナル犯罪ノ痕跡
 ヲ有シタル人トシテ現行犯トシテ處分スルニ付キハ其
 第三 一 家宅内ニ於テ犯罪ノ痕跡ヲ檢證スル時又其犯人トシテ思料ス可キ
 犯罪者ヲ逮捕スルニ付キハ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ
 是等ノ場合ハ固ヨリ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ其罪發覺シタルニ非
 スト雖モ現行犯アリタルヨリ確證スルニ足ル可キ形跡アルノミナラス多クハ其
 目前ニ在リ所ニ犯人トシテ推認スルニ付キハ但違警罪ニ付テハ特ニ急速ノ處
 分ヲ爲スノ必要ヲ見サルヲ以テ此罪ニ付テハ准現行犯ナシトス
 備准現行犯第一ノ場合ヲ分析スレバ一方ニ逃走スル者アリ一方ニ追跡スル者
 アリ而シテ其追跡者ニ於テ逃走者ヲ指シテ重罪處罪ノ犯人ナリト呼ハル事
 ノ三條件ヲ具備スルコトヲ要ス若シ其一ヲ欠クハ準現行犯ト爲スコト得ス蓋シ
 此三條件具備セシカ故ナク他人ヲ指シテ犯人ナリト呼ハル可キ謂ハレナク又
 犯人ナリト呼ハル者惡事ナキニ畏怖遁逃ス可キ謂ハレナキヲ以テ其者ハ多

分犯人ナリシト推定され得ルハ然ルモ若シ犯人ナリト呼スルハ若シシテ
 眞怖運送ニ関シテシテ犯人ナリト呼スル者ニ對シ抗爭アル等シ者ニ對シテ其者
 ノ犯人ナリト推定スルニ足ラズ是レ此三條件其具備スルニ要スル所以ナ
 リ佛國法ハ殺人既供傳シテ從テ世間ノ風聞亦之ニ由テ特別ノ處分ヲ爲スコトヲ
 ナルモノ其區域明確ナラハ從テ世間ノ風聞亦之ニ由テ特別ノ處分ヲ爲スコトヲ
 得ルニ至ルハ惡クテ故ニ我法律此ノ如キ漫然タル規定ニ依ラスシテ右ノ如
 シ制限明確ナル規定ヲ爲シテ之ヲ行ハルニ由テ然ルモ所聞ル衆人ノ供傳
 第三ノ場合ニ於テハ兇器等ヲ携帶シ又ハ身體被服ニ犯罪ノ痕跡アル等有形ノ
 事ト其者シ犯人ノ思料ニ可キ無形ノ事ト三條件具備スルコトヲ要ス假令暗夜
 力制ヲ携帶スルモ護身ノ爲メナルモノ知ル可カラヌ又身體被服ニ血痕ヲ留ム
 ルモ必シモ人殺殺傷シタル爲メナラシト推定ス可カラヌ唯此有形ノ事ノ外其者
 ノ舉動疑ハシク巡査ヲ見テ逃避スル等ノ事アリ始メテ其犯人ナルコトヲ思料ス
 ルニ足ル是レ此三條件具備スルニ於テ准現行犯ト爲シタル所以ナリ佛國法モ
 亦兇器等ヲ携帶スル場合ヲ以テ准現行犯トシテ爲シタルモ其事ノ犯罪ヲ隔ル

些少ノ時間内ニ在ルモノ要セリ蓋シ被メ立法者ノ意タル犯罪ヲ隔ルコト已ニ違
 ノ數日若シハ數月ノ後ニ至レハ兇器贓物等復テ犯人ノ手ニ存在セス輾轉シテ
 良民ノ手ニ移ルコトナシトモ然ルニ之ヲ携帶スルノ故ヲ以テ現行犯ト准シ處
 分スルコトヲ許スニ於テハ良民モ亦一時ノ嫌疑ノ爲メ嚴格ナル處分ヲ受クルコ
 トアラシ此不都合ヲ避ケシカ爲メ時間ノ制限ヲ加ヘタルモノナラン然レモ已ニ
 犯罪アルコトヲ認知シ其犯人ヲ捜査スルニ當リ兇器贓物等ヲ携帶スル者ヲ發見
 スル場合ハ格別其未テ犯罪アルコトヲ認知セシテ偶然是等ノ物件ヲ携帶スル
 者ヲ發見シ因テ其者ノ必然犯人ナランコトヲ推知スル場合ニ於テハ其犯罪ノ日
 時ヲ確ルルコトヲ得サルハ勿論ナリ若シ此場合ニ於テ先ツ犯罪ノ日時ヲ確メ次
 ニ其日時ヲ隔ルル時間ヲ算定シ而シテ後逮捕等ノ處分ニ着手スルト否トヲ定
 メサル可キトスドモ徒ニ時機ヲ失シ目前ニ在ル犯人ヲシテ容易ニ逃走スル
 コトヲ得セシムルニ至ラン故ニ佛國法ノ如ク些少ノ時間ヲ隔ルトノ條件ヲ付ス
 ルハ實際ニ適スルモノト謂フ可カラズ故ニ我法律ハ時間ニ付テ毫モ制限ヲ加
 ヘサルナリ

第三ノ場合ニ於テハ家宅内ノ犯罪ナル事其犯罪ニ付キ檢證又ハ逮捕ノ請求アリ其請求ニ係ル處分ハ家宅内ニ於テ爲ス可キ事其請求者ハ戸主又ハ戸主ニ代ル可キ者ナル事ハ四條件具備スルヲ要ス抑此場合ヲ以テ現行犯ニ准シタルハ前述三箇ノ場合ノ如ク專ラ公安ノ爲メニ急速ノ處分ヲ要ストノ理由ニシテ蓋シテ非ニ主トシテ一家内ノ安全ヲ保護シ其居住者ヲシテ安堵スルヲ得セシメシムル旨趣ニ出テタルモノナリ故ニ家宅内ノ犯罪ニ付キ家宅内ニ於テ檢證又ハ逮捕ノ處分ヲ爲スヘキ場合ナルヲ必要トス若シ夫レ家宅外ノ犯罪ナランニハ毫モ一家ノ安全ニ直接ノ關係ナク又家宅内ノ犯罪ナルニモセヨ家宅外ニ於テ爲ス可キ處分ニ付テハ是レ亦一家ノ安全ニ何等ノ關係ナシ若シ此終ノ場合ヲモ現行犯ニ准セシカ家宅内ニ於ケル總テノ犯罪ハ皆准現行犯トシテ處分スルヲ爲シ現行犯非現行犯ノ區別ハ殆ト無効ニ歸ス可シ是レ此三條件ノ具備ヲ要シタル所以ナリ其第四ノ條件ヲ要シタルハ家宅ハ人ノ城廓ニシテ其主人若クハ主人ニ代ル可キ者ノ請求ナキ上ハ擅ニ侵入スルヲ許ス可カラズ而シテ是等ノ者ノ請求ナキハ一家ノ安全未タ妨害セラレサルモ

ノ下看做スヲ相當トス是レ請求アリテ始メテ現行犯ニ准シ處分スルヲ許シタル所以ナリ

右四條件ヲ具備スル場合ト雖モ必シモ常ニ現行犯ニ准スルヲ得ス例ヘハ數日若クハ數月前家宅内ニ於テ一ノ犯罪アリ戸主以下之ヲ覺知スト雖モ當時官ニ向テ何等ノ處分ヲモ請求セス徒ニ時日ヲ經過シタル後偶ハ犯人カ其家ニ來リタルニ方リ始メテ之カ逮捕ヲ請求スル場合ノ如キ是ナリ此場合ニ於テハ表面上法律規定ノ條件ヲ具備スルカ如キモ一家ノ安全已ニ常ニ復シ毫モ現在ノ妨害ナキヲ以テ之ヲ准現行犯ト爲スヲ得ス此法律ノ規定ハ一家内ノ危急切迫ヲ除去シ安全ニ復セシムルヲ目的トスルモノニ外ナラサレハナリ

右現行犯准現行犯ノ場合ニ於テ爲ス可キ特別ノ處分ニ付テハ後ニ詳説スル所アル可キヲ以テコゝニハ一切之ヲ省略ス可シ

情犯罪ノ發覺ハ前述ノ告訴告發及ヒ現行犯准現行犯ニ因ルモノ多キニ居ル可キモ亦他ニ之ヲ發見スルノ原因ト爲ル可キモノ種々アル可シ或ハ間巷ノ風聞或ハ新聞紙ノ報道或ハ犯罪物体ノ發見或ハ犯人ノ自首ノ如キ皆犯罪發覺ノ端

緒ト爲ル可シ但是等ノ事項ニ付テハ法律上豫メ特殊ノ手續等ヲ規定スルノ必要ナカレバ可キヲ以テ立法者ハ別ニ何等ノ規定ヲ爲サス第四十六條ヲ以テ單ニ告訴告發現行犯其他ノ理由云々ト言ヒ以テ告訴告發現行犯ノ外尙ホ他ニ犯罪發覺ノ理由アルヲ示シタルニ止サルノミ
法律ハ搜查處分ニ付テ別ニ一節ヲ置カサルモ講說上便宜ノ爲メ余ハ左ノ一節ヲ假設シ以テ其處分ニ關スル事ヲ説明セントス

第三節 搜查處分

搜查ニ付テハ如何ナル處分ヲ爲スヲ得ヘキ乎法律ハ「犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證據及ヒ犯人ヲ搜查ス可シ」(第四十ト云ヒ又ハ「犯罪ヲ搜查スルニ付キ云々犯罪ヲ搜查ス可シ」(第四十ト云フニ止マリ其處分手續ニ付テハ何等ノ規定ヲ爲サス是レ犯罪ノ證據ト爲ル可キ事物ハ如何又其事物ハ何處ニ存在スル乎犯人ト認ム可キ者ハ何人ニシテ何處ニ現在スル乎等ヲ探知スルハ檢察及ヒ司法警察官ノ職能ト勉勵トニ一任ス可キモノニシテ豫メ法律ヲ以テ其方法手段ヲ示定スルヲ能ハサルニ由ル且ツ前ニモ曾テ陳

述シタル如ク搜查ハ豫審ト同シク下調ニ處分ニ屬スルモ豫審ニ於ケルカ如ク公力ヲ用非テ強テ處分ヲ爲スヲ得サルカ故ニ從テ此搜查ノ處分ニ付テハ弊害ヲ防制スルニ必要ナル法式制限ヲ設ク可キノ謂ハレナシ是レ法律カ何等ノ規定ヲ爲サ、ル所以ナリ

公力ヲ用非サル上ハ何等ノ處分モ總テ搜查上之ヲ爲スヲ得ヘキ乎此點ニ付テハ區別ヲ爲サ、ル可カラス
第一、人ノ身體ニ對スル處分ニシテ強制ニ涉ルモノハ決シテ之ヲ爲スヲ得サルハ言ヲ決タス假令強制ニ涉ラス本人ノ承諾アルモ事實監禁ト認ム可キモノハ亦決シテ之ヲ許スヲ得ス若シ逮捕監禁ヲ爲サンカ刑法上ノ責罰ヲ受クルヲ免レサル可シ

然レモ人ノ身體ヲ拘束スルニ非サル上ハ其人ノ檢察局又ハ警察署等ニ隨意ニ出頭センヲ求ムルハ妨ナシ而シテ其人出頭セハ犯罪事件ニ付キ其知ル所ヲ尋問スルモ亦之ヲ不法ノ處置ト謂フ可カラス是レ其人ノ所在ニ就キ尋問スルト異ナラサレハナリ然レモ搜查上參考ノ爲メ其人ノ陳述ヲ聽取スルノミニ止マ

三五〇

シテ其陳述ヲ他日ノ證憑ト爲サンニ其陳述ヲ錄取シ其人ヲシテ之ニ署名捺印セシムルガ如キハ證憑ノ搜查ニ非スシテ證憑ノ集取タリ乃チ證憑ニ豫審判事ノ職權ヲ侵スノモノナラズ其人ヲ被告トシテ證人鑑定人トシテ審問スルモノナレハ之ヲ違法ノ太甚シキモノト謂ハサル可カラズ大審院ガ檢察又ハ司法警察官ニ於テ非現行犯ナルニ拘ハラス被告人又ハ證人等ヲ訊問シ因テ作リタル所ノ調書ハ不法ニ成立シタル無効ノ調書ニシテ斷罪ノ資料ニ供スルコトヲ得ス下判決シタルハ其當ヲ得タルモノナリト確信ス

第二、人ノ家宅ニ對スル處分即チ侵入搜索ニ付テハ其主人若クハ主人ニ代ル可キ者ノ許諾アルハ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レモ其許諾ナキハ晝間ト雖モ又何人ノ立會アリト雖モ決シテ之ヲ行テテ得サルモノトス是レ其家宅ニ侵入搜索セシレサルノ權利ヲ侵害スレハナリ

第三、人ノ所有物ニ對シテハ其人ノ承諾アレハ搜查上ノ便宜ノ爲メ一時之ヲ借入ル、モ妨ナシ然レモ強制的ノ處分即チ差押ハ決シテ之ヲ行テテ得サルモノトス是レ亦其所有權ヲ侵害スルニ至レハナリ

犯罪ノ場所ニ遺留シタル物品ニシテ其所有主ノ知レサルモノ又ハ逃亡犯人ノ所有物ナラント思料セラル可キモノニシテ之ヲ還付ヲ請求スル者ナキハ一時之ヲ官ニ領置スルモ亦可ナリ殊ニ犯罪ノ證憑ト爲ル可キモノハ之ヲ保存スルヲ必要トス

第四、人ノ死屍ヲ解剖シ墳墓ヲ發掘スル等ハ如何ナル場合ニ於テモ搜查處分トシテ之ヲ行フコトヲ得ス此他犯罪ニ關係アル物件ノ分析ノ如キモ其物質ヲ變更シ復タ原狀ヲ存セサルニ至ルヲ以テ必要已ムコトヲ得サル場合又ハ其物件ノ腐敗シ到底正式豫審ノ始マルヲ待ツニ違アラサル場合ノ外ハ之ヲ行ハサルヲ適當ナリトス

之ヲ要スルニ人ノ權利ニ關スル處分ハ之ヲ行フコトヲ得サルヲ本則トシ唯其人自ラ權利ヲ拋棄シ得ヘキ場合ニシテ眞ニ其人ノ承諾ヲ得且ツ裁判官ノ職權ヲ侵犯スルニ非サル上ハ變則トシテ處分ヲ爲スコトヲ妨ケサルモノトス

司法警察官搜查ノ處分ヲ終ハリタルルハ其結果ヲ管轄檢察官ニ報告ス可ク區裁判所檢察官ノ上其事地方裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト認ムルハ同裁判

所ノ檢事ニ其事件ヲ送致ス可シ管轄檢事ハ捜査ノ結果如何ニ依リ公訴ヲ提起
スルト否トヲ決ス可キナリ
以上說示シタル所ハ通常ノ場合ニ於ケル捜査處分ニ關スルモノニシテ非常ノ
場合即チ現行犯准現行犯同シノ場合ニ付テハ被告人逮捕ノ一事ニ付キ法律ハ
特別ノ規定ヲ爲シタリ

第五十八條ニ曰ク

司法警察官及ヒ巡查憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可
キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕
ス可シ
罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被
告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官
署ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラズ又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若シハ官
署ニ引致スルコトヲ得
此被告人ノ逮捕ハ豫審處分ニ非ス又純然タル捜査ノ處分ニ非スト雖モ其性質

ハ寧ロ彼ニ屬セシテ此ニ屬スルモノト謂フヲ得ヘシ是レ本章ニ於テ之カ規
定ヲ爲シタル所以ナル可シ

借右ノ法文ニ依レハ被告人ノ逮捕ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル犯罪ニ限り罰金以下
ノ刑ニ該ル可キモノニ付テハ決シテ之ヲ許スナシ蓋シ輕微ナル事件ニ付テ
ハ其被告人ノ自由ヲ拘束スルノ必要ナキヲ以テ法律ハ之カ未決拘留ヲ爲スト
ヲ許サズ縱令其犯罪現行ニ係ルト雖モ亦此一事ヲ以テ自由拘束ノ必要アリト
謂フ可カラズ是レ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ單ニ告發ヲ命シタル
ニ過キサル所以ナリ但其被告人ノ誰タルヲ即時ニ之ヲ確メ置クノ必要アル
ヲ以テ氏名住所ヲ問ヒ置ク可ク若シ其分明ナラサルハ之ヲ確ムル爲メ一時
檢事等ニ引致スルヲ許シタリ

法文ニハ「逃亡ノ恐アル者ハ云々」トアリ故ニ氏名住所分明ナルモ逃亡シテ其身
ヲ匿サントスルノ嫌疑アル者ハ之ヲ引致スルヲ得ルヤ勿論ナル可シ然レモ
一旦之ヲ引致シタリトテ檢事及ヒ警察官ハ引續キ其被告人ヲ留置スルヲ得
ス左レハ其引致ハ何等ノ效用モナク引致シテ直チニ放免スルヲト爲リ畢竟無

益ノ手續ヲ爲スニ了ランシ故ニ余ハ此法文ヲ解シテ逃亡ノ恐アル者トハ急
 速ニ訊問ヲ爲スヲ要スル者ノ意ナリトス是レ聊カ牽強附會ノ嫌ナキニ非ス
 ト雖モ亦此解釋ノ甚ク所ナクシハアラヌ第四百四十四條第四百十六條ニ依レハ
 罰金ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テモ急速ヲ要スルルハ檢事ニ於テ豫審處分ヲ爲
 ストヲ得即チ被告人ヲ勾留スルヲ得サルモ之ヲ訊問スルハ妨ナシ左レハ急
 速ニ訊問ヲ爲スノ必要アル場合ニ於テハ其訊問ノ爲メ被告人ヲ一旦檢事ニ引
 致セシムルモ決シテ不當ノ處置ニ非サル可シ又逃警罪ニ付テ即決ヲ爲サント
 スルニハ通常被告人ヲ訊問スル等ノ事ナシト雖モ場合ニ依リ一應之ニ訊問ス
 ルヲ必要トスルヲアラン左レハ現行犯ニシテ被告人目前ニ在リ且ツ其一應ノ
 訊問ヲ要スルルハ之ヲ警察官ニ引致セシムルモ亦決シテ不適當ノ處置ト謂フ
 可カラヌ是レ余カ此解釋ヲ取ル所以ナリ

第六十條ニ依レハ何人ト雖モ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ事件ノ現行犯ニ付テハ
 直チニ其被告人ヲ逮捕スルヲ得ヘシ此逮捕ハ固ヨリ捜査ノ處分ニ屬セサル
 モ現行犯ニ付テハ常人モ司法警察官ト爲ル下ノ法諺ニシテ信ナランニハ是レ

第二章 起訴

亦一種ノ捜査處分ナリト謂フヘシ然リ而シテ常人カ被告人ヲ逮捕シタル場合
 ニ於テ之ヲ司法警察官ニ引致シ又ハ巡查憲兵卒ニ引渡ス等ノ手續ハ第六十一
 條ニ明定シアリテ此點ニ付テハ別ニ説明ヲ要スルモノナキヲ以テ之ヲ略ス

犯罪アリト思料シテ捜査ノ處分ヲ遂ケタルモ終ニ犯罪タル可キ事蹟ヲ發見セ
 ス又ハ或ル事蹟ヲ發見シタルモ法律上犯罪ト爲ラス若クハ犯罪ト爲ルモ公訴
 權已ニ消滅シタル等ノ理由ニ依リ公訴成立ス可カラサルモノナルルハ檢事ニ
 於テ起訴ス可カラサルハ勿論ナリトス之ニ反シ犯罪タル可キ事實存在シ且ツ
 其犯人タル可シト思料スル者現在スルニ於テハ起訴ノ手續ヲ爲サ、ル可カラ
 ス但公益上却テ起訴スルヲ不利ナリト認ムルルハ自己ノ責任ヲ以テ起訴セサ
 ルヲ得ヘシ

起訴ノ手續ハ別テ二ト爲ス豫審ヲ求ムルト公判ニ付スルト是ナリ法律ノ規定
 第六十二條ニ依レハ重罪ト思料シタル事件ニ付テハ必ス豫審ヲ求メサル可カラヌ
 是レ其事体重大ナルカ故ニ審理ノ鄭重ヲ要スルニ由ル輕罪ト思料シタル事件

ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ或ハ豫審ヲ求メ或ハ直チニ公判ニ付スルヲ得而シテ此二者其一ヲ擇フハ檢事ノ意見ニ在リテ他ヨリ之ニ容喙スルヲ得ヌ即チ輕微ニシテ事情簡易ナルモ檢事ニシテ豫審ヲ求メタル上ハ豫審判事其豫審ヲ拒ムヲ得ヌ重大ニシテ事情繁雜ナルモ檢事ニシテ公判ニ付シタル上ハ公判判事ハ其公判ヲ爲サハル可カラズ畢竟輕罪中ニハ重罪ノ輕キモノト相似タルモノアリテ鄭重ナル審理ヲ必要トスル場合アリ又輕易ニシテ違警罪ト相稱ヲ所ナク隨テ簡便ナル手續ニ止ム可キモノアリ而シテ其孰レノ方法ニ從フ可キヤ換言スレハ其事件ノ輕重難易如何ハ審理ヲ盡シタル上ニ非サレハ之ヲ確知スルヲ能ハサルモ概シテ捜査ノ末之ヲ豫知スルヲ難カラス是レ豫審ヲ求ムルト否トヲ檢事ノ意見ニ一任シタル所以ナリ

輕罪ノ中其刑極メテ輕キヲ以テ區裁判所ノ管轄ニ屬シタルモノアリ此種ノ輕罪ハ裁判管轄上違警罪ト異ナラス左レハ其治罪手續ニ於ケルモ之ヲ違警罪ト異ニス可キノ理由ナク又必要モナシ故ニ法律ハ此種ノ輕罪及ヒ違警罪ニ付テハ豫審ヲ求ムルヲ直チニ公判ニ付ス可キモノト爲セリ即チ區裁判所檢事

是等ノ事件ヲ捜査シ終リタル片ハ直チニ其裁判所ニ起訴ス可ク若シ地方裁判所檢事ニ於テ之ヲ捜査ヲ爲シタル片ハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致シテ起訴ノ手續ヲ爲サシム可キモノトス

地方裁判所檢事豫審ヲ求ムルニ付テハ第六十六條ニ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シトアルモ臨檢ス可キ場所又訊問ス可キ證人ナキ片ハ之ヲ指示スルニ由ナシ左リトテ其指示不能ノ故ヲ以テ豫審ヲ求ムルヲ許サハルノ理ナシ要スルニ法律ハ檢事ノ知り得タル一切ノ事情ヲ申立ツ可キヲ命スルニ止マリ必スシモ是等ノ事情ヲ以テ豫審請求ノ要件ト爲シタルモノニ非サルナリ

地方裁判所檢事又ハ區裁判所檢事直チニ事件ヲ公判ニ付スルニ付テハ法律上其手續ヲ特定シタルモノナシ然レモ第二百十二條第二百三十五條ニ區裁判所及ヒ地方裁判所檢事ノ起訴ニ因リ公訴ヲ受理スル旨ノ規定アリテ而シテ第二百十三條ニ檢事ハ………被告人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請求ス可シトアリ此呼出狀ヲ發スルノ請求ハ公判ニ付スルノ手續ナリトス

地方裁判所檢察事タルト區裁判所檢察事タルトヲ問ハス其捜査シタル事件ニシテ其裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノト思料シタルモノハ之ヲ管轄裁判所ノ檢察ニ送致ス可ク又其事件カ法律上罪ト爲ラス若クハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルモノハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラサルハ勿論ナリトス
儲檢事ニ於テ起訴ノ手續ヲ爲シタルモノハ勿論起訴セサルトニ決シタルモノ及ヒ他ノ檢事ニ事件ヲ送致シタルモノト雖モ其事件ニ付キ告訴人アルモノハ檢事ヨリ其如何ナル處分ヲ爲シタル乎ヲ告訴人ニ通知セサル可カラス是レ告訴人ハ檢事カ起訴セシナランニハ其公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲シ若シ起訴ナキニ於テハ別ニ民事裁判所ニ出訴セントノ意思ヲ有シ居ルヤモ知ル可カラサルナリ要スルニ此通知ハ一ニ公訴人カ私訴ヲ爲スニ付テノ便利ヲ計リタルモノナリ

第三章 豫審

豫審ハ事實發見ノ爲メ換言スレハ諸般ノ證據ヲ集取スル爲メ豫審判事カ行フ所ノ下關處分ナリ而シテ豫審判事ト雖モ亦一ノ裁判官ナレハ原告ノ請求ナキニ自ラ起テ事件ヲ取り之カ處分ヲ爲ス可キモノニ非ス故ニ現行ノ重罪輕罪ニ

關シ特別ノ規定アル場合ノ外豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非アレハ豫審ニ取掛ルヲ得ス若シ請求ナクシテ處分ヲ爲シタルモノハ其處分ハ無効ニ屬スルモノトス

儲豫審ハ前述ノ如ク事實發見ヲ目的トスルモノナレハ成ル可ク其處分ヲ秘密ニシ世人ヲシテ之ヲ知ラシメサルハ勿論訴訟關係人タル被告人ニモ之ヲ知ラシメサルヲ必要トス若シ公判ニ於ケル如ク其取調ヲ公行センカ當ニ事實發見ニ妨アルノミナラス被告人ニ對シテモ不利益ヲ被ラシムルニ至ル可シ何ヲ以テ之ヲ言フ被告人果シテ犯罪人ナランニハ常ニ取調ノ進行ニ注意シ判事カ處分ヲ爲スニ先チ或ハ證據ヲ湮滅シ或ハ虛偽ノ認憑ヲ捏造シ以テ事實ノ真相ヲ覆ハンヲ計ル可ク縱令被告人自ラ是等ノ奸計ヲ企テサルモ其親族故舊等苟クモ被告人ノ免罪ヲ望ム者ニ於テ詐術ヲ試ムルヲアラン若シ然ラハ事實發見ニ大妨害ヲ與ヘ少クトモ其發見ヲ遲延セシムルヤ必然ナリ又被告人ニシテ全ク無辜冤枉ノ者ナランニハ其豫審處分ヲ公行セラレ隨テ其被告人ト爲リタルト世上ニ傳播セラルニ因リ少クトモ其免罪ノ言渡ヲ受クルマテノ間名譽ヲ

毀損セラルレヲ免カレヌ故ニ公益ノ爲メ又私益ノ爲メニモ豫審處分ハ之ヲ密行スルヲ必要トスルナリ

然レモ豫審處分ヲ密行スルニモ自ラ其程度アリテ嚴重ニ過クルルハ反テ事實發見ノ妨害ト爲ルヲアラン例ヘハ被告人數名アル場合ノ如キ之ヲ拘留シタルハ固ヨリ其監房ヲ別ニシ又其訊問モ同時同所ニ於テ之ヲ爲サス以テ其相通謀スルヲ防ク可シト雖モ其孰レカ正犯ナル乎從犯ナル乎其他共犯ノ事情ヲ確カメシムル爲メニハ兩々相對質セシムルヲ必要トスルヲナシトセス又被告人ノ人違ナキヲ確カメシムル爲メニハ證人其他ノ者ト對質セシムルノ必要ヲ見ルヲアリ故ニ是等ノ場合ニ於テハ幾分カ密行ノ制限ヲ緩フセサル可カラヌ尙ホ密行ノ程度ニ付テハ各處分ヲ説クニ當リ之ヲ詳悉ス可シ

豫審ハ密行スルノミナラス原被相對シテ辯論ヲ爲スヲ許サス故ニ公判ニ於ケル如ク被告人ニ於テ辯護人ヲ用ユルヲ得ヌ又被告人ノ法律上代理人之ニ干與スルヲ得ヌ其口頭辯論ヲ爲スヲ許サ、ルモノハ畢竟豫審ニ於テ直チニ本案ニ付キ終局ノ判決ヲ與フルヲナク單ニ事實ノ下調ヲ爲スニ過キサ

ルヲ以テナリ

第六十八條ニ依レハ檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記録ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シトアリテ被告人ノ訊問調書證人ノ訊問調書鑑定人ノ鑑定書等檢事ニ檢閱スルヲ得セシムルモ被告人ニハ此檢閱ノ權ヲ與ヘヌ原告ニ厚クシテ被告ニ薄ク頗ル不公平ニ失スルカ如シ然レモ檢事ハ其職務トシテ訴訟ニ關係スルモノニシテ自家一身上利害ノ關係ナシ故ニ訴訟記録ノ檢閱ヲ許スモ爲メニ豫審ノ前途ニ妨害ヲ試ムル等ノ恐レナシ反テ同條第二項ニ規定スル如ク豫審ノ目的ヲ達スルニ必要ナル處分ヲ臨時請求スルヲ得セシムル爲メ此檢閱ヲ許サ、ル可カラヌ之ニ反シ被告人ハ犯罪人ナリトノ嫌疑ヲ受ケ居ルモノナレハ訴訟記録ノ檢閱ヲ許スハ太甚タ危険ナリトス是レ檢事ニ許シテ被告人ニ許サ、ル所以ナリ但第九十七條ニ規定スル如ク被告人其供述書ノ謄本ヲ求ムルヲ妨ケス

豫審ハ事實發見ノ爲メニ行フモノナレハ豫審判事ハ被告人ニ不利益ナル證據ニ限ラヌ其利益ト爲ル可キ證據ヲモ集取セサル可カラヌ是レ豫審判事ノ最モ

注意ス可キ所ナリトス

第一節 令狀

夫レ人ハ身體ノ自由ヲ有ス又實ニ此自由ヲ有セサル可カラズ然レモ此自由タ
 ル無限ノモノナル可カラズ若シ各人無限ノ自由ヲ有センカ彼我互ニ抵觸シ遂
 ニ自由ヲ有セサルト一般相擇フナキニ至ラン帝國憲法第二十三條ニ曰ク日本
 臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁……ヲ受ケルコトナシト是レ自由カ法
 律ニ依テ制限セラル可キコトヲ明示シタルモノナリ
 逮捕監禁ハ法律ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコト得ヌ即チ法律ノ之ヲ聽許シ若
 クハ命令シタル場合ニシテ且ツ法律ニ規定シタル方式ヲ履行シ而シテ後始メ
 テ此處分ヲ爲スコト得ヘシ其場合ト方式トハ本節實ニ之カ規定ヲ爲セリ
 思フニ被告人ハ必シモ犯罪人ニ非ス唯犯罪人ナラントノ嫌疑ヲ受ケタルモノ
 ニ過キサルナリ故ニ有罪ノ判決確定スルニ至ルヤチハ無罪ヲ以テ之ヲ待タサ
 ル可カラズ然ルニ其罪ノ有無未タ分明ナラサルニ拘ハラス之ヲ逮捕シ之ヲ監
 禁ス是レ其有罪ナルコトヲ豫斷スルモノニ非スト謂フ可カラズ且ツ其逮捕監禁

ハ實ニ其人ノ身體ヲ苦シムルノミナラス其名譽ヲ害シ其健康ヲ損シ又其業務
 ヲ妨ケ随テ累ヲ其家族ニ及ボスニ至ル立法者此惡結果ノ生スルコトヲ慮ハカラ
 ツルニ非ス然ルニ猶ホ敢テ此處分ヲ爲スコト許シ若クハ命シタルモノハ公益
 上己ムコト得サルノ必要アリ然ルナリ

何ヲカ己ムコト得サルノ必要ト云フ余カ見ル所ヲ以テスレハ其必要三アリ

第一、公安保護上ノ必要 凡ソ人ノ罪ヲ犯スヤ必ス其因ル所ナクシテハアラス
 或ハ怨恨或ハ憤怒或ハ嫉惡或ハ利慾或ハ痴情或ハ功名是等皆犯罪ノ原因ヲ爲
 ス己ニ是等ノ原因アリテ罪ヲ犯ス幸ニシテ其目的ヲ達シタルカ爲メ原因全ク
 消散スルニ至レハ則チ可ナリト雖モ多クハ一罪ニ満足セスシテ反テ益其罪ヲ
 重ネ甚シキハ犯罪ヲ以テ其生業ト爲スモノアルニ至ル利慾心ニ出ル犯罪ニ付
 テハ殊ニ然リトヌ左レハ被告人トシテ犯罪ノ嫌疑ヲ受ケタル上ハ其罪ノ有無
 未タ明ナラサルモ依然之ヲシテ身體ノ自由ヲ得セシムルハ大ニ公安ニ害アリ
 トヌ何トナレハ渠レ果シテ犯罪人ナランニハ或ハ數罪俱發一ノ重キニ從フノ
 律アルヲ俾トシ否ラサルモ自暴自棄益覺暴邪慾ヲ逞シテスルノ虞ナキヲ保セ

ス若シ犯罪人ニ非ストスルモ世人ハ已ニ嫌疑ヲ渠レニ懐クカ故ニ恰モ猛虎ト相伍スルノ思アリテ瞬時モ其心ヲ安シスルヲ能ハサル可クレハナリ故ニ一面ハ國家公益ノ爲メニ一面ハ良民保護ノ爲メニ一時被告人ノ自由ヲ停止スルモ亦實ニ已ム可カラサル所ナリトス

第二事實發見上ノ必要 事實ノ判定ハ一ニ裁判官ノ心證ニ任セタリト雖モ所謂心證ナルモノハ臆測妄斷ト同シカラス必ス諸般ノ證據微憑ニ依據セサル可カラス故ニ心證ヲ資ラントセハ被告人ヲ訊問シ犯所ニ臨檢シ證人鑑定人ノ供述ヲ聽ク等細大トナク證據ト爲ル可キ事物ヲ集取スルヲ必要トス然ルニ被告人ノ自由ヲ停止セス其爲ス所ニ一任セハ管ニ隨時渠レヲ訊問スルヲ能ハサルノミナラス渠レ或ハ證據物件ヲ毀棄シ或ハ證人等ノ口ヲ滅シ其他證據ノ集取ヲ妨ケ遂ニ裁判官ヲシテ事實ヲ發見スルヲ能ハサラシムルニ至ルモ亦知ル可カラズ是レ事實發見ノ必要上往々被告人ノ逮捕拘留ヲ爲サ、ルヲ得サル所以ナリ

第三裁判執行上ノ必要 被告人罪アリトシテ刑ノ言渡ヲ爲スモ其裁判ヲ實

地ニ執行セサレハ刑罰ノ名アリテ刑罰ノ實ナク殆ト無益ノ業ニ屬ス故ニ裁判ヲシテ効用アラシメントスルニハ豫メ其執行ヲ確保スルノ手段ヲ爲シ置クヲ必要トス蓋シ犯罪人タル者罪ノ免カレ可カラサルコトヲ知ルモ自ら好シテ刑罰ニ就クコトヲ爲サズ逃避跡ヲ晦マシ律ニ期滿免除ノ到着スルヲ待ツハ百中九十九皆然ラサルハ莫シ左レハ裁判執行ヲ確保スル爲メ被告人ノ自由ヲ停止スルモ亦已ムヲ得サル所ナリトセサル可カラズ

然レモ一被告人ニ對シ公訴ノ起リタル上ハ其罪ノ輕重大小如何ニ拘ハラズ毎ニ必ス上陳ノ三必要若クハ其中ノ一ヲ存スルモノト認ム可カラズ罪ノ極メテ輕キモノハ公安ヲ害スルヲ亦至小ナルヲ以テ縱令其犯罪人ヲ自由ニ放置スルモ決シテ之カ爲メニ更ニ公安ヲ害スルニ至ラス犯罪人モ亦百方苦計ヲ運ラシ刑罰ヲ免カレシコトヲ規圖スルニ付キ大利益ヲ有セサルヲ以テ其自由ヲ停止セサルモ事實ノ發見裁判ノ執行ニ妨害ヲ試ムルヲナカル可シ又罪ノ重キ場合ニ於テモ其罪質又ハ被告人ノ身分等ニ依リ公安擾亂等ノ害ヲ生スルノ虞ナキコトアリ故ニ裁判官ニ於テ善ク是等ノ事ニ注意シ實際上必要已ムヲ得スト確認シ

タル所ニ非サレハ逮捕監禁ヲ命ヌ可カラズ
逮捕監禁ノ必要不必要ハ畢竟事實上ノ問題タルニ過キサルモ法律ハ此處分ヲ
爲スニ付キ或ル制限ヲ設ケ殊ニ犯罪ノ輕微ナルモノニ付テハ全ク此處分ヲ爲
スコトヲ許サ、ルナリ

第七十五條ニ曰ク

「拘留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト思料スルニ
非サレハ之ヲ發スルコトヲ得ス但被告人逃亡シタル場合ニ於テハ其訊問ヲ
爲サスシテ之ヲ發スルコトヲ得」

故ニ監禁即チ拘留ハ重輕禁錮又ハ重罪ノ刑ニ該ル可キ事件ニ限リ之ヲ行フコ
トヲ許容シタルモ罰金又ハ違警罪ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ決シテ之ヲ行フ
コトヲ許容セヌ是レ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ立法者自ラ上陳ノ三
必要ナシト認メタレハナリ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ必要ノ有無
豫メ斷定スルコト能ハサルヲ以テ之ヲ行フト否トヲ裁判官ノ見ル所ニ任シタル
ノミ

逮捕即チ勾引ニ付テハ法律ハ一般ニ之ヲ行フコトヲ許容シタルカ如シ

第七十一條ニハ

「豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキ
ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得」

ト規定シ又七十二條ニハ

「豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

- 第一 被告人定リタル住所アラサルトキ
- 第二 被告人罪證ヲ濯滅シ又ハ逃亡スル恐アルトキ
- 第三 被告上未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アル
トキ

ト規定シタルニ止マリ其拘引狀ヲ發スルハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ事件ニ限
ルトノ規定ナシ故ニ罰金又ハ違警罪ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テモ右兩條ノ規
定ニ從フ上ハ勾引狀ヲ以テ逮捕セシムルコトヲ得ヘキニ似タリ
然レモ現行犯ニ關スル第五十八條ノ下ニ於テ説明シタル如ク現行犯ノ場合ニ

於テモ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ被告人ノ氏名住所ヲ確ムル爲メ一時引致スルコトヲ得ルニ止マルモノトスル上ハ非現行犯ノ場合ニ於テ反テ逮捕拘引シ四十八時内留置スルコトヲ得ヘシトノ道理ナシ且ツ違審罪事件ニ付テハ元來豫審ヲ行ハサルモノナレハ豫審判事ニ於テ其公訴ヲ受ケ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發スルカ如キ場合ノ生ヌ可キ謂ハレナシ故ニ姑ク之ヲ論外ニ含キ專ハラ罰金ニ該ル可キ事件ニ付キ之ヲ考フルニ其本刑スラ猶ホ財産ノ上ニ及フニ過キス然ルニ其事件ノ審理中ニ在リテハ被告人ノ自由ヲ停止スルコトヲ得ヘシトスルハ實ニ條理ニ反スルノ太甚シキモノト謂ハサルヲ得ヌ立法者如何ニ不注意ナルモ此ノ如キ冠履顛倒ノ規定ヲ爲サ、ル可シ論者或ハ曰ハン第七十五條ニハ故ヲニ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ云々ト記シ而シテ第七十一條第七十二條ニハ此制限ヲ設ケヌ故ニ拘引狀ハ罰金ニ該ルヘキ事件ニ付テモ之ヲ發スルコトヲ許スノ意タルコト見ルニ足ルヘシト此言一應其理アルカ如シ然レモ此ノ如キ反對解釋ノ法ハ常ニ必シモ其當ヲ得ルモノニ非ス寧ロ法律ノ全体ニ就テ立法者ノ意思ヲ討究スルノ優レルニ若カヌ公判通則ノ第七十八條ヲ見ヨ哉

判所ニ於テハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ被告人ニ對シ拘引狀又ハ拘留狀ヲ發スルコトヲ得トアルニ非ヌヤ公判ニ於テハ罰金ニ該ルヘキ事件ニ付キ勾引狀ヲ發スルコトヲ許サ、ルニ豫審ニ於テハ同事件ニ付キ此令狀ヲ發スルコトヲ許サ、ルヘカラサルノ道理何クニカ在ル或ハ公判ニ於テハ被告人代人ヲ差出ヌコトヲ得ルモ豫審ニ於テハ否ラス故ニ此區別アリト辯スル者アラン然レモ公判ニ於テ被告人出頭セヌ又代人ヲ差出サ、ル場合ハ如何此場合ニ於テモ拘引狀ヲ發スルコトヲ許サ、ルニ非ヌヤ然ラハ豫審ニ於テモ被告人出頭セサル片ハ其儘ニテ豫審ヲ終結スヘシ輕微ノ事件ナルニ拘ハラス被告人ヲシテ必ス出頭セシメ之ヲ訊問シタル上ニ非サレハ終結ヲ告ク可カラストノ必要ナカルヘシ

又勾引狀ノ効力ハ僅ニ四十八時内ニ止マルモノナレハ罰金ニ該ル可キ被告人ニ對シ此令狀ヲ發スルモ左マテ其自由ヲ停止スルコトナシト論スル者アリ然レモ人身ノ自由ハ瞬間ト雖モ故ナク之ヲ停止ス可キモノニ非サルノミナラス拘引狀ノ効力ハ四十八時ヲ超過セストノ規定ハ被告人ヲ判事ノ面前ニ引渡シ

三七〇

タル以後少事ヲ規定シタルニ過キテ故ニ其令狀ヲ執行シ著手シタルヨリ判事
 人面前ニ引致スル等事ヲ時間外之ヲ控除スルヲ以テ實際被告人ノ自由ヲ停止
 スルハ四十八時止セシムル等事ヲ遠方ヨリ引致スル場合ニ於テハ數十日ニ渉ルコト絶
 テ之ヲシト云フ可カラズ故ニ此論ヲ如キハ固ヨリ探ルニ足ラサルモトス
 要スルニ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ公安保護上ノ必要事實發見上
 ノ必要裁判執行上引必要アルヲ以テ拘留狀ヲ發スルコトヲ許スモ事實果シテ必
 要アルヤ否ハ被告人訊問以上ニ定ムル可キモトニシテ未タ其人物ノ如何ヲ詳
 シセズ之ヲ自由ニ放置スルノ危險如何ヲ究メズシテ直チニ此令狀ヲ發シ永ク
 其自由ヲ停止スルコトヲ得セシムルハ不都合ナリ故ニ訊問後ニ於テ是可シトノ
 條件ヲ付シタリ已ニ此條件ヲ付シタル上ハ豫審判事ヲシテ必ズ被告人ヲ訊問
 スルコトヲ得ヒシメサル可カラズ因テ召喚狀ヲ以テ呼出スニ被告人出頭セサル
 カ又ハ召喚狀ヲ送達スルニ由テ若クハ此令狀ヲ用ヰルノ反テ危險ナル場合
 ニ於テ拘留狀ヲ發シ公力ヲ以テ被告人ヲ引致スルコトヲ許シタルモノナリ然ル
 ニ罰金ニ該ル可キ事件ニ付テハ立法者ハ公安保護上等ノ必要一モ之ヲシト認

メ拘留スルコトヲ禁シナカラ引續キ拘留スルコト能ハサル被告人ヲ一時拘引スル
 コトニ限り許容セサル可カラズトノ道理ナシ豫審判事ヲシテ必ズ被告人ヲ訊問
 セシメサル可カラズ又豫審判事ニ其訊問ヲ實行シ得ルノ便ヲ與ヘサル可カラ
 ズトノ謂ハレナケレハナリ故ニ余ハ拘留狀ハ拘留狀ト同シク禁錮以上ノ刑ニ
 該ル可キ事件ニ非ザレハ之ヲ發スルコトヲ得サルモノト確信スルナリ
 借禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ事件ニシテ公安保護上等ノ必要アリト認メタルキ
 ハ拘留狀ハ勿論拘留狀ヲモ發スルコトヲ得ヘク法律ハ羅馬シニステニアンノ法律
 ノ如ク除外例婦女ハ常ニ勾留セストノ法ヲ設ケサルナリ然レモ帝國憲法第五
 十三條ニ兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關スル罪ヲ除ク外會期中其
 人院ノ許諾ナクシテ逮捕セラルコトナシトアルヲ以テ帝國議會ノ議員ニシテ内
 亂外患ニ關ル罪ハ被告人タル場合ハ格別其他ノ犯罪ニ付テ被告人タルキハ直
 チニ之ニ對シ拘留狀拘留狀ヲ發スルコトヲ得ス其之ヲ拘引シ拘留スルノ必要ア
 ルキハ豫メ其議員ノ屬スル議院ノ許諾ヲ得サル可カラズ此許諾ヲ得ルノ手續
 ニ付テハ法律別ニ之ヲ規定ヲ爲サスト雖モ豫審判事又ハ裁判所ヨリ直チニ議

三七一

院ト往復ス可キモノニ非サルヲ以テ他ノ司法行政上ノ事項ニ於テルト同シク
 豫審判事ヨリ裁判所長ニ具申シ裁判所長ハ司法大臣ニ具申シ而シテ司法大臣
 ヨリ議院ニ向テ其許諾ヲ請フ可シ若シ議院ニ於テ決議ノ上許諾ヲ與ヘサルハ
 ハ復タ奈何トモスルコトヲ得サルヲ故ニ已ムヲ得ス其議院ノ閉會ニ至ルヲ待タ
 サル可カラズ尤モ憲法カ議員ヲ保護スルハ其閉會中ニ限ルヲ以テ縱令召集令
 ヲ發セラレタル後タリトモ未タ開會ニ至ラサル前ニ於テハ其被告人タル議員
 ヲ拘引シ又拘留スルコトヲ得ヘキハ論ヲ竣タス而カモ一旦適法ニ拘引シ拘留シ
 タル上ハ爾後議院開會スルニ至ルモ之カ爲メニ前ノ拘引拘留ヲ無効ナラシム
 ルコトナシ憲法ハ單ニ開會中ニ在リテ始メテ議員ヲ逮捕スルコトナキ旨ヲ擔保シ
 タルニ過キサレムナリ

逮捕監禁ハ人身ノ自由ヲ侵害スルモノナレハ此非常ノ處分ハ之ヲ行政官ニ委
 ス可カラズ又此處分ヲ行フニ付テハ相當ノ方式ヲ履騰セシムルヲ必要トス若
 シ否ラサルニ於テハ其結果タル必ス專横壓制ト爲リ良民其苦ニ堪ヘサルニ至
 ラシ故ニ法律ハ逮捕監禁必ス裁判官ノ令狀ニ依ル可キノ原則ヲ定メ(現行犯ノ

場合ハ例外トス)又各令狀ニ付キ其方式効力ヲ定メ敢テ之ニ背反スルコトヲ許サ
 ズルナリ其程式規則ニ從ハサル逮捕監禁ハ即チ不法ノ逮捕監禁ニシテ刑法第
 二百七十八條ノ制裁ヲ免カルコトヲ得ス

法律ハ令狀ヲ三種ニ別テリ曰ク召喚狀曰ク勾引狀曰ク拘留狀此三種ノ令狀ハ
 裁判官ニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得サルヲ原則トス以下是等ノ令狀ニ付テ其
 効力并ニ方式等ヲ詳説ス可シ

第六十九條ニ曰ク

「豫審判事ハ檢事ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ
 對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時
 ノ猶豫アルヘシ

召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出頭ノ
 日ヲ過クルコトヲ得ス」

故ニ被告人訊問ノ爲メ之ヲ呼出スニハ先ツ此令狀ヲ用ユルヲ本則トス而シテ
 此令狀ハ他ノ二令狀ト異ナリ及公方ヲ以テ執行セス唯被告人ノ隨意出頭ヲ命令

三十四
 此令狀ハ即時ヲ出頭シ命令スルモノニ非スシテ其送達ト出頭トノ間二十四時
 以上ノ猶豫ヲ與ヘサル可キ故ニ其有效ニ送達アル可キ時刻ヲ豫算シ此時
 刻ヨリ起算シテ二十四時以上ト爲ル可キ時刻ヲ期シテ召喚ス可シ例ヘハ本日
 正午ニ送達アル可シト認メルハ明日本正午以後ニ於テ適宜ニ其時刻ヲ定メ
 午後一時若クハ三時ニ出頭ス可シト命令スルノ類ナリ(後ノ呼出狀等皆之ニ倣
 ハ)此猶豫ハ被告人ヲシテ其間ニ他ノ用務ヲ辦スル等ノ餘裕アラシムル爲メニ
 與フルモノニシテ辯護ノ準備ノ爲メニシタルモノニ非ス第二百十五條ニ規定
 シタル所ト其猶豫期間ニ長短アルヲ以テ其然ルヲ知ル可シ
 被告人此令狀ニ因リ出頭シタルハ直チニ其訊問ニ取掛ル可キモ若シ豫審判
 事ニ差支アルハ暫時其被告人ヲ待タシムルヲ得ルハ勿論訊問ス可キ事項
 夥多ナルハ其訊問ノ終ルヲ多少ノ時間之ヲ豫審廷ニ留メ置クコトヲ得ヘシ
 但法律ハ翌日ニ及フコトヲ許サ、ルヲ以テ過クハ午後十二時ニ至レハ其訊問ヲ
 止メサル可カラズ而シテ尙ホ訊問ヲ要スルニ於テハ更ニ之ヲ召喚ス可キモノ
 トス

三十五
 召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルモ別ニ其制裁ナシ但更ニ召喚狀
 ヲ發セズ第七十二條ニ從ヒ拘引狀ヲ發スルコトアリ其制裁トシテ見ル可キモノ
 僅ニ此一事アルニシテ
 召喚狀ヲ發セズシテ直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ得ヘキ場合ハ第七十二條ニ之
 ヲ規定セリ而シテ其注文ハ已ニ前ニ掲載シタルヲ以テ復タコ、ニ掲出セス今
 此ノ規定ニ付キ之ヲ按ズルニ其第一被告人定リタル住所ナキ場合ニ於テハ召
 喚狀ヲ發スルモ之ヲ送達スルコト難ク徒ニ無益ノ手續ヲ爲スニ過キサルヲ以テ
 直チニ拘引狀ヲ發スルコトヲ許シタルナリ其第二ノ場合ハ證據湮滅被告人逃亡
 ノ恐アルモノナレハ召喚狀ヲ發スルハ偶以テ其害ノ生スルヲ促スニ至ル其第
 三ノ場合モ前ニ述ケサリシ犯罪ヲ遂ケ又ハ脅迫シタル所ノ事ヲ實行セントス
 ル恐アルモノナレハ成ル可ク速ニ之ヲ防制スルコトヲ必要トス是レ直チニ拘引
 狀ヲ發スルコトヲ許シタル所以ナリ

拘引狀ハ公カヲ以テ被告人ヲ豫審判事ノ面前ニ引致スルモノニシテ其効力ヲ引致ニ因リテ消滅スルコトナク仍ホ其引致ヨリ四十八時間内被告人ノ自由ヲ停止スルノ効力アリ若シ四十八時ヲ過クルハ更ニ拘留狀ヲ發スルニ非サルヨリハ當然其自由ヲ復シ釋放ノ手續ヲ爲サザル可カラヌ第七十三條

拘留狀ハ召喚狀ニ因リ召喚シ又ハ拘留狀ニ因リ引致シタル所ノ被告人ヲ訊問シタル後ニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得サルヲ本則トスルモ被告人已ニ逃亡シタル場合ニ於テハ之ヲ訊問スルニ由ナキヲ以テ此場合ニ限り直チニ此令狀ヲ發スルコトヲ得ルモノトス

此令狀ノ効力ハ至大ニシテ永ク被告人ノ自由ヲ停止ス即チ一旦此令狀ヲ受ケタル者ハ豫審中ハ勿論豫審終結ニ於テ釋放ノ旨渡ヲ受ケタルハ公判ニ於テ仍ホ其効力ヲ持續ス加之公判ノ第一審第二審ニ於テモ釋放ノ旨渡ナキ上ハ其判決ノ確定スルマテ否其判決ノ執行始マルマテ此令狀ニ依リ被告人ヲ未決監ニ留置スルモノトス

借令狀ノ方式ニ付テハ第七十六條第一項第二項ニ之カ規定ヲ爲シテ曰ク

〔總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明サラサルトキハ容貌體格等ヲ明示ス可シ〕

又令狀ニハ之ヲ發スル年月日ヲ記載シ判事及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ其被告事件ヲ記載スルハ被告人ヲシテ其如何ナル嫌疑ノ爲メニ令狀ヲ受クルニ至リタルカヲ知ラシメンカ爲メナリ其被告人ノ氏名等ヲ記載スルハ人違ナキコトヲ示シ且ツ執行上過誤ナカラシメンカ爲メナリ其氏名ノ分明ナラサル者ハ籍號ヲ用并又ハ容貌體格年齢等ヲ明示シテ之ニ代フ可シ召喚狀ハ同條第三項ニ規定スル如ク執達吏ヲシテ送達セシムルモノナレハ其送達ヲ受ク可キ被告人ノ氏名ヲ記載スルニ非サレハ之ヲ送達スルコト能ハサル可シ故ニ此令狀ニハ必ス氏名ヲ記載ス可キモノトス

召喚狀ハ前述ノ如ク執達吏之ヲ送達スルモ拘引狀拘留狀ハ公カヲ用キサルヲ得サルモノナレハ巡查又ハ憲兵卒ニ之ヲ交付シテ執行セシム但拘留狀ヲ受ク可キ被告人已ニ監獄ニ在ルハ公カヲ用ユルノ必要ナキヲ以テ執達吏ヲシテ之ヲ送達セシム第七十六條第三項又召喚狀ハ常ニ一通ニ限ルモ拘引狀拘留狀ハ

時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査憲兵卒數人ニ分付スルコトヲ得第七十七條是レ被告
 人ヲ逮捕スルニ付キ急速ヲ要スル場合ニ於テ令狀一通ニシテ其執行者一人
 ナルモハ被告人ノ在ル可シト思料スル數箇ノ場所ニ同時ニ派出スルコト能ハス
 爲メニ時機ヲ失シ遂ニ逮捕スルコト能ハサルノ不都合ナカラシメンカ爲メナリ
 拘引狀拘留狀ノ執行方法ハ第七十七條第二項ニ「正本ヲ示シ其謄本ヲ下附ス可
 シ此場合ニ於テハ其正本謄本ニ執行ノ場所日時ヲ記載シ被告人ヲシテ署名捺
 印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ」下アリテ通
 常書類送達ノ方法ト大差ナシ此手續ヲ盡シタル後拘引狀ニ付テハ之ヲ發シタ
 ル判事ニ被告人ヲ引致シ拘留狀ニ付テハ其令狀ニ記載シタル監獄署ニ被告人
 ヲ引致ス若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサルモハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致ス
 ルモ妨ナシ但何レノ場合ニ於テモ被告人ヲ受取ル可キ監獄署長ハ令狀ヲ檢閱
 シテ之ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可ク然ル上ハ被告人ノ身上ニ付テハ監獄署長其
 責任ヲ負ハサル可カラス

右令狀ノ執行ヲ終リタル上ハ其旨ヲ令狀ノ正本ニ記載シ關係書類ト共ニ檢事

ニ送出す可シ其執行不能ノ場合ニ付テモ亦同シ第八十條

第八十一條ハ軍人軍屬ニ對スル令狀ノ執行方法ヲ特ニ規定シテ曰ク

「豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對シ令狀ヲ發シタルトキ
 ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ令狀ヲ示ス可シ其長官又ハ隊長ハ已ムコトヲ得
 テ差支アルニ非サレハ本人ヲシテ速ニ令狀ニ應セシム可シ」

此文ニハ右ノ如ク豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下アルカ故ニ豫備後備ノ軍籍ニ
 在ル者ニ付テハ此手續ヲ要セス通常ノ手續ニ從ヒ令狀ヲ執行スルコトヲ得ルハ
 勿論ナリ然レモ法律カ此特別ノ規定ヲ爲シタルハ畢竟現ニ軍籍ノ下ニ立ツ者
 ヲ軍旗ノ下ヨリ離レシメ爲メニ隊伍編成上ニ變更ヲ生スルコト勿ラシメンカ爲
 メニシタルモナレハ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ト雖モ召集中ニ係ルモハ現ニ
 軍旗ノ下ニ立テ現役ノ軍人軍屬ト異ナル所ナキヲ以テ之ニ對スル令狀ノ執行
 方法ハ亦本條ノ例ニ依ル可キヲ當然ナリトス

又下士以下ノ軍人軍屬トアルカ故ニ士官以上ノ軍人軍屬ニ付テハ此規定ニ依
 ルコトヲ要セサルカ如シ然レモ當直士官ノ如キ營中ニ在ル者又ハ行軍中ノ者ニ

對シ直チニ令狀ヲ執行シ之ヲ拘引拘留スルコトヲ得ルトセハ爲メニ軍紀ノ整肅
ヲ營スルノミナラス軍隊ノ離散ヲ惹起スニ至ルモ知ル可カラス故ニ是等ノ者
ニ對シテハ本條ノ例ニ依リサル可カラズ

倍令狀ヲ受ク可キ被告人其裁判所ノ管轄地内ニ在ラサルハ其令狀ヲ送達シ
及ヒ執行スルニハ如何ナル手續ニ依ル可キ乎第七十條ニハ

「豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサルトキハ詢問ス可
キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ
囑託スルコトヲ得」

トアルモ法律ハ必ズ囑託ス可シト命セサルカ故ニ豫審判事ハ此囑託ヲ爲サス
シテ遠隔ノ地ニ在ル被告人ヲ召喚スルコトヲ得ルハ旨ヲ俟タヌ即チ此場合ニ於
テハ裁判所書記ヨリ其召喚狀ヲ被告人所在ノ地ヲ管轄スル區裁判所書記ニ送
致シ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス可シ是レ通常ノ送達方法刑民
訴訟法第百三
十六條第二項ニシテ此點ハ別ニ説明ヲ要スルモノナシ
拘引狀拘留狀ニ付テハ第七十九條ニ

「豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ潛匿シタルコトヲ知り又ハ潛匿シタリト
思料シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキハ巡查憲兵卒ニ令狀ヲ帶
行セシムルコトヲ得

巡查憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シ
テ即時ニ執行ヲ求ム可シ」

トアリテ急速ニ被告人ヲ逮捕セサレハ遂ニ其踪跡ヲ失フニ至ルカ又ハ證據ノ
湮滅ヲ來タヌノ恐アルハ限リ巡查憲兵卒ヲシテ其被告人ヲ追跡セシムルコ
トヲ得ルモ這ハ是レ特例ニシテ本則ニ非ス本則ハ其被告人所在ノ地ノ巡查憲兵
卒ニ令狀ヲ交付シ執行セシムルニ在リ然ラハ其交付ニ至ルマテノ手續ハ如何
ニス可キ乎法律上何等ノ規定ナシト雖モ總テ裁判ノ執行ハ檢事之カ指揮ヲ爲
ス可キモノナレハ令狀ヲ發シタル豫審判事ノ屬スル裁判所ノ檢事ヨリ其令狀
ヲ被告人所在ノ地ノ裁判所ノ檢事ニ送致シ該檢事ヨリ之ヲ其地ノ巡查憲兵卒
ニ交付シ執行ヲ爲サシメサル可カラサルモノト信ス

拘引狀拘留狀ヲ受ク可キ被告人ノ所在全ク知レサル場合ニ於テハ令狀ヲ發ス

ルモ徒ニ半數ヲ費スノミモシテ何事ハ實益ナシ即チ法律ハ第八十條ヲ以テ此
場合ニ關スル規定ヲ爲シテ曰ク

三六二

〔豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知スルコト能ハサルトキハ各檢察長ニ被告
人ノ人相書ヲ送致シ捜査及ヒ逮捕ヲ爲ス可キコトヲ請求スルヲ得
請求ヲ受ケタル檢察長ハ其管轄地内ノ檢察官ヲシテ捜査及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲
サシム可シ此場合ニ於テ檢察官ノ發シタル逮捕狀ハ拘留狀ト同一ノ効ヲ有ス
法律ニハ各檢察長ニ云々トアルモ必シモ全國ノ各檢察長ニ本條ノ請求ヲ爲ス
ヲ要セヌ例ハ被告人九州内ノ何レノ地ニ在ルヤヲ知ルコト能ハサルモ必ス九
州外ニ出ルコトナカル可シト思料シタルハ長崎控訴院檢察長ニノミ此請求ヲ
爲スコトヲ得ルハ勿論ナリ

檢察長ヨリ搜索逮捕ノ會合アリタルハ檢察官ハ逮捕狀ヲ發シ普ク其管轄地内
ニ搜索セシム可シ左レハ此場合ニ於テハ其逮捕狀ハ勢ヒ數十百通ヲ作り成ル
ヘク巡查憲兵卒全員ニ分付スルヲ要ス又人相書モ複寫シテ之ヲ巡查憲兵卒ニ
分付シ以テ其搜索ノ便ニ供スルヲ相當ナリトス此場合ハ古史ニ大ニ天下ニ索

ムトアル場合ニ當ルモノナリ
巡查憲兵卒カ令狀又ハ逮捕狀ヲ執行セントスルニハ人ノ家宅ニ侵入スルヲ必
要トスル場合アル可シ此場合ニ於テハ直チニ侵入搜索ヲ爲スモ妨ナキ乎抑家
宅ナルモノハ其大小廣狹ノ別ナク人ノ日夜棲息スル處ニシテ其居住者ニ取リ
テハ一ノ金城湯池タリ容易ニ他人ノ侵入ヲ許ス可キモノニ非ス乃チ帝國憲法
ハ其第二十五條ヲ以テ日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外其ノ許諾ナク
シテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラル、コトナシト明言シ家宅ノ容易ニ侵入ス可
カラサルコトヲ規定シタリ但公益上已ムコトヲ得サルノ理由アリテ法律カ特ニ定
メタル場合ニ限り例外トシテ居住者ノ許諾ナキニ拘ハラス侵入搜索ヲ爲スコ
ト許シタリ本問令狀執行ノ場合ハ即チ公益上ノ必要アリテ復タ人ノ私權利ヲ
顧ミルニ違アラサレ場合ナリ因テ此法律ハ帝國憲法ノ意ヲ承ケテ一ノ除外例
ヲ立テタリ第七十八條ニ曰ク

〔令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛
匿シタリト思料シタルトキハ其地ノ市町村長又其差支アルトキハ隣佑二名

以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ
前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ラス搜索調書ヲ作シ
立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス但旅店割烹店其他夜間ト雖モ
衆人ノ出入スル場所ニ付テハ其公開時間内ニ限リ何時ニテモ搜索ヲ爲スコ
トヲ得

即チ必要已ムコトヲ得サルニ依リ被告人ノ家宅ハ勿論良民ノ家宅ニ侵入シ之ヲ
搜索スルコトヲ許シタルモ巡查憲兵卒一人ニテ此處分ヲ爲スコトヲ許サヌ又戶主
其他家人ノ立會ヲ以テ足レリトセス市町村長若クハ隣佑二名以上ノ立會ナカ
ル可カラスト爲セリ此ノ如ク他人ノ立會ヲ要シタルハ巡查憲兵卒カ權ヲ弄シ
横暴不法ノ所爲ニ涉ルコトアラシクテ慮リ之ヲ防止セシカ爲メニシタルモノナ
リ

又家宅搜索ハ日中ニ限リ日出前日没後ニ之ヲ行フコトヲ許サヌ是レ夜間ハ人ノ
休息シ安眠ス可キ時間ナレハ如何ニ公益上ノ必要アレハトテ其休息ヲ害シ其

安眠ヲ妨ク可キニ非ス且ツ夜間ハ暗黒ナレハ此時間ニ於テ搜索ヲ許スルハ爲
メニ不都合ヲ生スルコトナキヲ保ヌ可カラヌ或ハ姦淫兇暴ノ徒巡查憲兵卒ト詐
稱シ名ヲ令狀ノ執行ニ藉リ以テ輒ニ人ノ家宅ニ侵入シ而シテ後掠奪等ノ所
爲ヲ逞シフスルニ至ルモ知ル可カラヌ是レ立會人幾名アルモ夜間ニ於テ搜索
ヲ爲スコトヲ許サ、ル所以ナリ

然レモ旅店割烹店ハ勿論劇場、人寄席、貸座敷等ハ夜間ト雖モ仍ホ其場所ヲ公開
シ衆人ノ出入スルコトヲ得ル處ナレハ之ヲ人ノ住居スル家宅ト同視ス可カラヌ
因テ其公開時間内ニ限リ何時ニテモ侵入搜索スルコトヲ許シタリ其公開時間内
ニ限リタルハ已ニ營業ヲ止メ來客ヲ辭シタル後ハ通常ノ家宅ト爲リ之ニ侵入
シ搜索スルハ人ノ休息安眠ヲ妨害スルニ至レハナリ

旅店割烹店等ト雖モ其中ニハ來客ノ爲メニ設ケタル室ト家人ノ爲メニ設ケタ
ル室トアル可シ其家人ノ爲メニノミ設ケタル室ハ即チ公開ノ場所ニ非スシテ
眞ノ住居ナルヲ以テ夜間ニ於テハ此室ニ侵入シ搜索ヲ爲ヌ可カラヌ又來客ノ
爲メニ設ケタル室ト雖モ多少永久ノ期間滯留シ若クハ下宿スル者ニ貸與シタ

ルモノ、如キハ即チ其滞留人下宿人ノ住居ナルヲ以テ是レ亦夜間ノ侵入搜索ヲ許ス可カラズ

三八六

第七十八條ノ家宅搜索ハ潛匿シタリト思料スル被告人ニ對シ令狀ヲ執行セシカ爲メニスルモノナレハ尙クモ被告人カ潛匿シ得ヘシト認ムル部分ハ總テ搜索ヲ爲スヲ得ルハ勿論ナルモ道理上決シテ潛匿シ得ヘカラサル部分ハ決シテ搜索ヲ爲スヲ得ヌ例ハハ机ノ抽斗ノ如キ人ノ身體ヲ容ル、ニ足ラサルコト明瞭ナルモノナレハ之ヲ開披スル等ノコトアル可カラズ
人ノ家宅ヲ搜索セントスルニ當リ其家人腕力ヲ以テ之ヲ拒ムルハ巡査憲兵卒ハ公力ヲ以テ之ヲ制服スルコトヲ得ルハ勿論其抗拒カ刑法第三百九條ノ罪ヲ成スルハ即チ現行犯ナルヲ以テ其抗拒者ヲモ逮捕ス可シ又門戸ハ閉鎖シ以テ之ヲ拒ムルハ如キハ他ニ適當ノ方法ナキニ於テハ已ムヲ得ヌ其門戸ヲ踰越シ又ハ損壞スルモ敢テ不可ナシトス但損壞ノ如キハ非常ノ手段ニ屬スルヲ以テ萬已ムヲ得サルニ因リ之ヲ行フモ成ル可ク其損害ノ少ナキコトニ注意スルヲ要ス

巡査憲兵卒家宅搜索ヲ爲シタルルハ其搜索ノ手續及ビ被告人ヲ發見シ又ハ發見セサルコト等總テ搜索ニ關スル事項ヲ搜索圖書ニ記載シ之ヲ立會人ニ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ是レ其名分ノ適法ナルコトヲ證センカ爲メニスルモノナリ法律ニハ明文ナキモ立會人ニ於テ署名捺印スルコト能ハサルルハ其旨ヲ附記スルヲ以テ足レリトセサル可カラズ
借被告人拘引狀又ハ勾留狀ニ依リ其身體ノ自由ヲ停止セララル、ト雖モ未タ其罪ノ有無判明ナラサルモノナレハ固ヨリ犯罪人即チ已決ノ囚徒トシテ之ヲ待遇ス可カラズ左レハ第八十五條ヲ以テ

「密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬、故舊又ハ辯護士ニ接見スルコトヲ得
書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閱ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サズ但豫審判事又ハ檢事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得」

ト規定シ監獄外ノ者ト接見シ又ハ書類ノ往復ヲ爲スコトヲ得セシム然レモ其接

見ノ際罪證湮滅等ノ協議ヲ爲スモ知ル可カラサルヲ以テ監獄ノ吏員必ス之ニ立會ス可キモノトシ又書類ノ往復ニ付テモ同上ノ危險アルヲ以テ判事又ハ檢事ノ檢閱ヲ經ヘキモノトシタリ若シ接見ノ際言語又ハ舉動ニ異シム可キ廉アルキハ立會吏員ニ於テ其接見ヲ止ム可ク書類檢閱ノ上其往復ヲ許ス可キモノニ非スト認ムルキハ判事又ハ檢事ニ於テ其往復ヲ禁ス可ク加之犯罪ノ證據又ハ事實參考ト爲ル可キモノナリト思料シタルキハ其書類ヲ留置クヲ得ルモノトス

茲ニ一疑問アリ法文ニ辯護士ニ接見スルコトヲ得下アルニ依リ被告人ハ豫審終結後ニ於ケルト同シク辯護士ト辯護上ノ協議ヲ爲スコトヲ得ル乎否ト云フモノ是ナリ人或ハ曰ク豫審ハ密行ヲ主旨トシ又被告人ノ辯護ヲ許サス故ニ辯護上ノ協議等ヲ爲スコトハ一切之ヲ禁セサル可カラス唯將來辯護ヲ委託シ又之ヲ承諾スト云ヘルカ如キ言語ヲ接スルニ止メシム可シト此言ノ如クナランニハ法律カ故ラニ辯護士ニ接見スルコトヲ許シタルハ何等ノ意味モナク全文ニ屬スルニ至ラン故ニ余ハ之ニ同スルコト能ハス然レモ豫審終結後ニ於ケルト同

シク自由ニ言語ヲ接スルコトヲ得セシムルハ危險アルノミナラス豫審密行ノ主旨ニ反スルヲ以テ幾分カ之ヲ制限セサル可カラヌ即チ余ハ被告人ニ於テハ犯罪ノ事實又ハ其嫌疑ヲ受クルニ至リタル顛末ヲ語り辯護士ニ於テハ被告人ノ利益ト爲ル可キ證據アラハ其集取ヲ判事ニ請求スルコトヲ得ヘキ旨其他法律上ノ事項ニ付キ注意ヲ與フルハ差支ナク唯事ノ豫審處分ニ涉ルモノ例ヘハ判事ニ於テ云々ノ開ヲ發シタルキハ如何ニ辯解ス可キ乎其辯解ハ云々ス可シト云ヘルカ如キ言語ヲ接スルコトヲ禁スルニ止ム可シト思考ス

第二節 密室監禁

拘留狀ヲ受ケタル被告人ハ之ヲ未決監ニ收置スルモ一人ノ爲メニ一房ヲ與フルコト能ハサルヲ以テ通例一房ニ數名ヲ收置ス然ルニ斯ク數名ヲ一房ニ混居セシムルカ故ニ其被告人等共犯ニ非サルモ共犯ハ必ス其房ヲ別ニス互ニ通謀シテ事實發見ノ妨害ヲ爲スコトナシトセス將ニ放免セラレントスル者ニ囑シテ放免後ニ罪證ヲ湮滅セシメントテ企テ又ハ再犯以上ノ者初犯ノ被告人ニ對シテ陳辯ノ方法ヲ指示スルカ如キ是ナリ因テ是等ノ恐アルルキハ或ハ檢事ノ請求ニ